トエ14-1

女性の力

久生十蘭 著

納本

博文館刊

始

特220
414

女性の力

蘭士生久 著

小說選集

博文館

女性の力 ——目次——

出發……一
屆托のない人……一五
冬薔薇……三四
啞娘……五三
落葉の記……七一
闘志……九一
宣言……一一五
晩餐……一三二
同行……一五一
疑惑……一六四
溫室の中……一八二

四人の客……二〇三
卽興曲……二二八
茨の道……二四三
再會……二五九
炎の街……二七五
代理の人……二八八
愛執……三〇一
日記帳……三一七
信愛……三三九

女性の力

久生十蘭著

出發

馬が首を振りながらぶるゝと鼻を鳴らす。

駅者臺の嘉造お爺さんがおだやかな口調で、

『おウれ』

と聲をかけてやる。

教科書を齊讀する聲や幼稚部の子供たちが有頂天になつてキイキイ叫んでゐる聲が、朝の空氣に乘つてこゝまでとゞく。

眞波は古風な二輪馬車の上で停車場まで送つて行つてくれるはずの院長を待つてゐる。脚の間を秋風が吹いて通る。脛が風邪をひきさうだ。

馬車の革の座席の冷たさが、靴下をとほしてひんやりと膚に迫る。それがまたなんとなく落着かない氣持にさせる。

外套の裾を引きさげて出來るだけ脚を縮めてみる。寒々しいのは脚ではなくどうやら心のはうらしい。しかし、このはうは外套の裾で包むといふわけにはゆかない。

生れて初めて長い旅に出るといふ漠然とした不安や、途中の杞憂や、東京といふものに對する得體の知れない畏怖。伯母たちへの初對面の挨拶や、とるにも足らないつまらない心配が重苦しく胸をとざす。

それにしても、こんな擦り切れたやうな杉織の外套でなくつて、やはり、キヤメル・コートの方にすればよかつた。旅行鞄にしてからが、なんといふ哀れな恰好をしてゐるのだらう。壓し潰されたやうな、いかにも降參したといつた不甲斐ないやうすで馭者臺の上にぐつたりたぐまつてゐる。

こんなふうに考へだすと、田舍くさいパンプースの靴も、ひしやげたやうな帽子も、何もかもみんな氣に入らない。自分自身さへこのまゝ消えて無くなつてしまつたはうがいゝやうな、やり切れない

存在のやうな氣がしてくる。

初めて世の中へ出て行くといふ嬉しさや、これからの新しい生活への希望より不安のはうが深く大きくて、ついこゝろが尻込みをする。

眞波は、黃色くなつた芝生に蔽はれた人影のない廣い校庭のはうへ、助けを求めるやうなあはれな眼差を投げる。

『このまゝ、いつまでもこゝにゐられるんだつたら！』

しかし、歸つて來いといふ伯母の命令には從はなくてはならない。なにしろ、嚴しい伯母なのだから。

眞波は、この聖安土女學院の子供のやうなものだつた。

幼稚園から女學校まで。それから幼稚部の保姆を四年。院長や優しい尼姉たちの翼の下、蔓の絡んだ高い石塀の中で十七年も暮してきた。春の朝、夏の午後、秋の夕、冬の夜。もの靜かな、すこしばかり清淨すぎる樂しい生活のさまざまな思ひ出が急湍のやうに心の中へ滾りおちる。

『お爺さん、あなた、長い竿で杏の實を落してくれましたつけ』

嘉造お爺さんが、馭者臺の上で身體をひねつて、皺の中に埋まつた能面の翁のやうな顏をこちらへ向ける。

『あゝ、はれ。あれからもう何年になりますやら……。まだ小學部にゞさらしたときのことで』

『榾火で燒いた栗も、もう食べられないわ』

『あゝ、されば、これからは、あの栗めらもどぎやん淋しがるこッですやら』

『身體をだいじにしてちやうだい』

『有難うございまする……。あなたさまこたる、こげに優し氣な方ば世の中へ送り出すといふのは、どぎやん氣がかりなこッか。……院長さまも、そればば、卷きかへし繰りかへし嘆いてでこざりました。われらも、蔭ながら祈るとでこざります。行末永く、どきやんにも仕合せにお暮しなさりまッせ。われら、毎朝、鐘ば撞きながら、あなたさまのこつを……』

二

院長が、黑い毛繻子の服の袴を指でつまんで、恰幅のいゝ身體を搖りながら赤煉瓦の院長館から出て來る。

今日は、いつもよりよく糊のきいた、百合の葩のやうにピンと張出した純白の尼僧帽を被つてゐる。院長館の屋根から鳩が一羽ツイと飛ひ降りて來て院長の肩にとまる。院長は肩に鳩をとめたまま微笑しながら馬車のはうへやつてくる。すこし離れたところで立ち停つて、撫でるやうな眼付で眞波の顏を眺める。

『おや、あなたは泣かない組ですか』

眞波が微笑して見せる。

『えゝ、だいぢやうぶ！』

『それはそれは、えらいこと！……お爺さん、どうぞね、ゆるゆるやつて下さいよ。途中でお迎への方に逢へるかもしれない。……それから、うまく一と汽車ぐらゐ乘り遲れることが出來るやうにね』

顏ぢゆうを笑み崩して、

『これは、じやうだんだけど……』

嘉造お爺さんが、洟をすゝる。

『おゝ、われらも、なんぼう乘り遲らせたいこッか』

手綱が、ビシッと威勢のいゝ音を立てる。

『ほウれ』

馬が動き出す。

長い砂利道。間もなくゆるい速歩で校門から走り出す。

行途に落葉が散り敷いた白楊の白い並木道がどこまでも眞直に續いてゐる。世間へ出る道だ。

振返つて見ると、煤黝色の欅の大きな樹の群の向ふに、ゴシツクの赤煉瓦の校舍が薄い秋霧の中でぼんやり輪廓を霑ませてゐる。

（いよいよ、お別れだわ。……あたしは世間へ出て行く。これから、いつたい何が始まらうといふの

かしら……）

足元から風に吹き上げられるやうな、この世でたつたひとりぼつちになつたやうな孤獨な感情がはげしく胸を壓す。

院長がやさしく眞波の手を執つてくれる。その途端、急に遣瀬ない思ひがドット胸につつかけて來た。

馭車臺にカンテラをつけた、この古風な二輪馬車。毎年、三月の末ごろになると、院長がこの馬車で卒業生を一人づつ停車場まで送つてゆく。訓戒を與へるためではない。長い間手鹽にかけた大切な娘を世間へ送り出す前に、長い白楊の並木道をなんでもない話をしながら二人きりで搖られてゆくために。

院長と並んで坐つて、悲しさうな顏をしてゐる友達の顏を、眞波は、もういくつ校門の前で見送つたことだつたらう。それが、けふ、たうとう自分に廻つて來た。嘘のやうな氣がする。

院長は、この年齢で皺ひとつない血色のいゝ頰を、子供のやうに艶々と光らせながら、寛容な面持でニコニコと微笑してゐる。自分の左手は、溫かい大きな院長の手の中にしつかと握られてゐるが、それももう僅かの間だ。間もなく停車場へ着くと、たとへやうもなく賴母しいこの溫かい手から離されてしまふのかと思ふと、それからの自分の手の淋しさが思ひやられて、ついしよんぼりとなる。

向ふから村の郵便屋が自轉車でやつて來る。馬車の上の二人を見ると、剽輕なやうすで自轉車から

跳降りる。手の甲で額を撫でる。汗を拭くほど暑くはない、長い間の辭なのだ。

『これは、院長さま、眞波さま。うまいことに、行き逢つたぞな。しかし、どちみち、一本道ですけん……』

『おや、電報ですか』

『さやうでござります、眞波さんにな、東京から電報でござりますぞな』

三

ムカヒニユクワケナド　ナイデセウ」ヒトリデ　カヘツテキナサイ」ケイコ

心のなかを、風のやうなものがスツと吹き拔けて行つた。

『ご自慢の伯母さまからね？……東京から迎ひに來るんぢや、なかなか、たいへんだから……』

この心の深いひとは、凋れかへつた眞波の顏色だけで、もう何もかも察してしまつたのだ。

『伯母は乘物を好きませんの。いつかの手紙に、たしかそんなことが書いてあつたやうな氣がしますわ』

『あゝ、それなら、なほさら。……伯母さまにしたつて、あなたの望みをかなへてあげたいのは山々だらうけど』

『ほんたうに優しい伯母なんですから、あたしが無理を言つてやつたので、どんなにか困つたことで

せう』

院長は、何もかも知りぬいてゐるひとの深い大きな眼差で笑ひながら眞波の顏を見かへつて、

『甘えては、ひとぱつかり困らせるんだから、このひとは。……郵便屋さん、ご苦勞さま。嘉造さん、さあ、やつてちやうだい。あまりぐづ〳〵もしてゐられない』

郵便屋さんが自轉車の上で調子よく身體を振りながら行つてしまふ。馬車が動き出す。

女にしてはすこし冷たすぎると思はれるほど整つた美しい顏。

十七年の明けくれ、舍室の机の上の銀色の寫眞枠の中から、いつもしづかに自分を眺めてゐる若い美しい伯母。……薄緣の眞波にとつては、この世でたゞひとりの近親といふよりは、むしろ心の慰安とでもいふやうなものだつた。

十七年もの長い間、たゞの一度も自分を見に來てくれたことのなかつた伯母だつたけれど、それは容易く感情に動かされないそのひとらしい理智的なやり方で、それについては、尊敬に近い念を感じこそすれ、恨みがましく思つたことなどは一度もなかつた。

この二年ほど、すこしも便りをくれなかつたその伯母が、五日ほど前、とつぜん、東京へ歸つて來いといふ手紙をよこした。藪から棒な、おつかぶせなやり方を不快に思ふより先に、伯母が自分を忘れてゐなかつたといふ有頂天な喜びの中に溺れ込んでしまつて、たやすくは去りかねる學院だつたけれど、一も二もなく伯母の申出に同意してしまつた。

眞波は、すぐ折り返して島原まで自分を迎へに來てくれるやうにと手紙を書いた。生れてからまだ三時間と汽車に乘つたことのないこの自分を、たつたひとりで東京まで來させようなどとするはずはないと思つたからだつた。

（迎ひに行くわけなどはないでせう！）

いかにも、その通りだつた。伯母がこんなところまで自分を引取りに來なければならない義理合ひはなかつた。血が繋がつてゐるわけでもあるまいし。

眞波は、長い間、善意と深い親切のなかでばかり暮して來たので、すこし他人に甘え勝ちになつてゐたのにちがひない。眞波の想像はどうあらうと、現實の世間はこの學院の塀の中のやうな思ひやりなどに充ちてゐないといふことを警告するために、この電報はたいへん役に立つたやうである。

落葉の窪に轍が落ち込んで、馬車がガタンと跳び上る。

氣がついてみると、眞波は、電報の用紙で無意識に笹舟を折つてゐた。この四年の間、毎日、幾つとなく子供に折つてやつた千代紙の笹舟。

冷淡な文字を横つ腹にくつつけた笹舟が、馬車が彈むたびに眞波の膝の上で調子よく搖れる。

四

二輪馬車は、長い並木道を通り抜けて、雜木林をのせた赭土の崖道へ走り込む。林の中で漆木が眞

紅に染まつてゐる。

院長が、ほゝ、と穏かな笑ひ聲をあげる。

『嘉造さん、見てごらんなさい。このひとは今になつてもまだ笹舟を折つてゐる。かう未練でも困りますね』

嘉造お爺さんが、手綱を鳴らしながら、怒つたやうな聲をだす。

『あゝ、さうあるが當然ぢや。ながねん小かいひとの相手ばかりしてござらしたのだからそのくせは仲々拔けなからうバイ』

『えゝ、さうなの。指に癖がついてしまつて、紙片さへ持てば、無意識にすぐ何か折りはじめますの、鶴だの兜だの……』

『それはいゝけど、伯母さまの電報をそんなに揉みくちやにしてしまつていゝのですか』

眞波が、慌てゝ電報の皺をのばす。

『ほんたうにいけませんでしたわ』

『……どんな時でも、元氣をなくしないやうにね。……わたしが生きてゐる間はいつも遠くからあなたを戍つてゐてあげます。これからは伯母さまがいらつしやるのだから餘計なことかも知れないけれど、なにしろあなたは學院の子供のやうなものなんだから、わたしどもゝ、すこしはさういふ權利を分けていたゞいていゝのだと思つてゐます』

『あなたは、それを仰言るためにあたしを送つて來て下すつたのですね』

『あなたの思ひたいやうにお思ひなさい。なんではあれ、これがわたしのつとめなのだから』

『……間もなく汽車が停車場へ着きますね。あたしは汽車の中にゐて、あなたはプラット・フオームに立つていらつしやる。こんなふうに、同じところに並んで坐つてゐるわけぢやないんです。……汽車が動き出す。あなたや嘉造お爺さんの顏がだんだん小さくなり、間もなく見えなくなつてしまふ。……見えなくなる見えなくなる。……見えなくなるといふのはいつたいどういふ意味なのかしら。あなたにお別れするつてことがあたしにはどうしても納得がゆきませんの』

『あなたが、毎晩わたしの部屋へ來て、お寢みなさいをいふ。それから扉を閉めて自分の部屋へ寢に行くでせう。それと同じことよ』

『でも、あすの朝、眼を覺してまたお顏が見られるといふわけにはゆきません。大變なちがひですわ』

『おやおや、泣くつもり?……眞波さん、わたしはね、實はさつき電報の文句を見てしまつたのよ。見るつもりはなかつたんだけど、ひとりでに眼に入つてしまつた。……いま、あなたが拘つてゐるのはそのことなんでせう。伯母さんが冷淡なことを恨んでゐる。それで、あゝも言ひ、かうも言ふのね。それは、やはりあなたの心が狹いから。……おやおや、お說教になつてしまつた。ちやうどあなたの笹舟のやうなものね。口に癖がついてゐる』

『もつと仰言つてちやうだい』

『おゝ困つたひと！　この期になつて、わたしに何を言はせようといふの？　たとへ、いま千の訓誡を與へてみたつて、それは何の役にも立たないことよ。どつちみち、これからは自分でやつてゆくほかないのだから。……ひとにばかりたよつてゐないで、自分の力でやるやうにしなくては』

『大きなことは言へませんけれど、あなたのお側にゐる間ぢうに訓へられたことで、何とか切拔けて行けるだらうと思ひますわ』

『あゝ、その元氣があるなら、もう、何も言ふことはありませんよ。……そろそろ停車場だ』

道が大きく曲して、その向ふにひつそりとした踏切が見えだした。シグナルが薄い霧の中でぼやけてゐる。

五

ひつそりとした別離だつた。

尼姉たちや子供らの姿がひとりも見えないのは、この別離を心の籠つたしづかなものにしようといふ院長のはからひなのだつた。

發車の時間が迫つてゐた。

機關車が排氣瓣をあけてフウと湯氣を吐きだす。それが眞波に、なんともやるせない慌しい思ひをさせる。

どんなに獅嚙みついても間もなく遠くへ押しやられてしまふ。何か無情な力で無理矢理に引離されるのだとしか考へられなかつた。

優しい院長や尼姉たち、それから可愛らしい子供ら。……わけても、自分を育んでくれたこの土地の風土や季節に間もなく別れるのだと思ふと、嗚咽を耐へる力さへないやうな氣がする。

最後にもう一度この風景を眼の中に灼きつけて置かうと、窓から身體を乘り出して學院のあるはうを眺めた。

丸い丘の上で白楊の列がゆるゆると梢をゆすつてゐるばかり。赤煉瓦の建物はこゝからは見えなかつた。

院長が輕く眞波の手をゆすぶる。

『またそんな顏をする。さあ笑つてお見せなさい』

眞波は、微笑して見せる。たしかに笑つたはずなんだが、笑つたとはどうしても信じられない。

『なんだか、泣きさうですわ』

『泣くなら、お泣きなさい。別離といふものは辛いものなんだから。……でもね、それもひとときの辛抱。……わたしがゐなくなれば、すぐ代りのひとが現れてあなたを慰めてくれます。……伯母さまの手紙にもさう書いてあつたでせう。東京にはあなたの歸りを待ちかねてゐる青年がいらつしやるつて……』

こんなとき、そんな冗談をいふ院長がうらめしかつた。

（あたしが、こんなに悲しがつてゐるのに、院長は、あんなのんきなことを言つてゐる）

さう思ふ一方、何とも知れぬ心のほてりを感じて思はず眼を伏せた。

嘉造爺さんが花束を抱へてやつて來た。學院の庭に咲いてゐる白いアネモネと野菊の花束だつた。

汽車が動き出すときに手渡しするつもりで、今まで馭者臺の下へ隱してあつたのだつた。

院長が、それを受取つて眞波の手に渡した。

『これは、小さい人たちと尼姉たちが、ひと花づつ摘んだものなの。わたしの分も嘉造お爺さんの分もひとつづつ入つてゐます。みなであなたを見送るのよ。東京まで送つて行つてあげます』

眞波の眼の前がボーツと霞んできた。

『院長さま、あなたの分はどれですの』

院長は、いちばん小さなアネモネの花を指した。

汽笛が、たまげたやうな音をだす。汽車はガクンといちど後へ引きさがると、ゆつくりと動き出した。

氣の遠くなるやうな瞬間が來た。

『院長さま、……嘉造お爺さん、ごきげんよう、ごきげんよう』

心の中では、こんな風に呟いてゐた。

（……成程これが別離といふものなんだわ。これから幾度こんなことがあるのかしら……）

院長さんと嘉造お爺さんが手をふりながらニコニコ笑つてゐる。何も言はずに、それだけでお互ひの心が通じ合ふのだつた。

二人の顏はだんだん小さくなり、そして見えなくなつてしまつた。

屈託のない人

一

眞波は、花束を腕の中に抱いて沈んだ顏で座席に坐つてゐた。

秋の終りの三鞭酒色の風景が現象のやうにあわたゞしく車窓の外を通り過ぎる。

屈託があるので、自然などへ眼を向けてゐる餘裕がない。棘のやうにチカチカするものがどこかに刺さつてゐてどうしても氣持を寛がせないのである。

（立派な青年が、あなたの歸りを待ちこがれてゐるのよ）

伯母が、手紙の終りに書添へて來たのは、たつたこれだけだつた。

一行にも足らない短い文句だが、この中に、捕捉し難いさまざまな影翳と、若い娘のこゝろを擾が

せるに足るほどの意味あり氣な示唆が陰謀のやうに巧みに隱されてある。

言葉が簡單なだけ想像の領域が豐富で、考へようとすればどんな風にも考へられる。

立派な青年……。

たいへんに、はつきりした表現だがこれだけではまるきりなにも言つてゐないのと同樣である。

立派などといふのは、それ自身ずゐぶん隙のある言葉だが、そればかりではなく、全體の調子に、ひどく輕すぎる無責任にひとを煽てあげてゐるやうなところがあるやうに思はれてならない。

浮き浮きしたこの言ひ廻しの中に、このごろの伯母の生活がはつきりと窺はれるやうな氣がする。

（それにしても、いつたい、どんな方なのかしら……）

眞波は、今日までに自分が逢つたわづかばかりの男性の顏をひとつづつこゝろの上に呼びあげて見る。

實直さうな顏、高慢な顏、油斷のならない顏、濕つた顏、恍けた顏……。

學院の石塀の中だけの、眞波の狹い生活の中にも、これくらゐの男性の顏はある。

これらは、視學官や、參觀人の顏や、ときたま尼姉たちに逢ひに來る近親たちの顏なのだが、どの顏も『青年』といふには相應しくないやうだ。

眞波は、二年ほど前、保護者會のお茶の會で逢つた若い法學士の顏をふと思ひだす。

髮をぴつたりと頭に貼りつけ、胴のくびれたやうな服を着、感情の翳のさゝぬ、冷淡な、或はさう

見せかけようと苦心してゐるとり澄ました青年の顏が、はつきりと記憶によみがへつてくる。

皆が、立派な青年だとほめてゐたが、いやに禮儀正しくて、そのくせ厚顏しいところのある、鸚哥のやうな含み聲でものを言ふこの青年のどこが立派なのか、眞波にはどうしてもわからなかつた。

伯母の立派な青年といふのも、やはりあんなタイプなのではないかと思ふと、身體中が寒疣立つてくる。

そのはうは、假にどうだつていゝとしても、その青年が自分の歸るのを待ちこがれてゐるといふことになると、話はまた別である。

（いつたい、何のために、あたしなどを待つてゐる？……つまり、あたしと結婚でもしようといふので？……）

この考へは、たしかにすこし行き過ぎてゐるにちがひない。しかし、さうとしか考へやうがなかつた。

汽笛が劈くやうな鋭い音で長鳴りし、汽車がとつぜん急停車した。

そのはずみに、今まで通路に立つてゐた一人の青年が、えらい勢ひで眞波の方へ倒れかゝつて來た。

二

倒れかゝつて來た青年は、まともにどすんと眞波の肩に衝きあたつて惰性でよろよろと座席の狹間

の中へよろけ込み、床に手をついてしばらくそこで藻掻いてゐたが、すぐ元氣よく起ち上つて、すぐ照れたやうな顔を眞波のはうへ振り向けながら、快活な聲で、

『やあ』

といつた。

きつぱりとした、よく均整のとれた、どこといつて翳のない明るい顔容の青年だつた。

『痛くしませんでしたか。どこかへぶつかつたやうでしたが』

眞波の肩のあたりがシクシクと痛む。

『いゝえ、べつに……』

『そんならいゝけど……。うつかりしてゐたので、ひどくはずみを喰つちまつて……』

虫の聲で沸き立つやうな草原の中で、汽車がじつと停つてゐる。

しんとした氣配の中を、二三人のひとがレールの間の砂利を踏み鳴らしながらあわたゞしく駈けて行く。

汽車の遠い頭部で、何かガヤガヤと叫び合つてゐる聲が聞える。

青年は、窓から首を突出して、そちらの方を眺めてゐたが、駈け戻つて來た車掌らしいのへ、大きな聲でたづねた。

『何があつたんですか』

『別に、たいしたことではありません。牛ば轢きかけたのですと』

『ふうん、呑氣なもんだな』

青年のいひ方のはうが、よつぽど呑氣だと思つて、眞波は可笑しくなつて、思はず、くすつと笑つた。

汽車がまた動き出した。

青年が轉がつて來たはずみに、肱でも強く觸れたのだらう、胸の釦穴に挿したアネモネの花が平つたく押し潰されてあはれなやうすになつてゐる。

院長が摘んでくれた白い小さなアネモネ。身體に近いところに置いて、東京まで持つて行くつもりで、この一輪だけを特別に大切に胸につけてゐたのだつた。

眞波は、悲しくなつて、花束を座席の上へ置くと、胸に顎をくつつけてうらめしさうにアネモネを眺めやりながら、兩手の指でそこゝと葩に觸つてみた。

青年は、自分の座席へ行きかけてゐたが、それを見るとまた戻つて來て、申譯なささうな聲で、いつた。

『おやおや、すつかりいけなくしてしまひましたね。きつと、僕の腕でも觸つたのでせう』

眞波が、眼をあげると意外に近いところに青年の顔があるので、すつかり狼狽へてしまつた。

『いゝんですの』

『花が拔けかゝつてゐる。直して置きませう、失くするといけないから』

男性にこんな風に優しく劬られたことがなかつたので、眞波は、一層へどもどしてしまつた。

『いゝえ、いゝんですの。……ほんたうに、もうどうぞ……』

『怖がらなくともいゝんですよ。僕がやつたんだから、僕が直すのはあたりまへです』

子供に言ひきかせるやうなおだやかな口調でさう言ふと、無頓着なやうすで眞波の胸の方へ手を伸ばして、指でひとつづつ丁寧に葩を引き起しはじめた。

『……潰れたんぢやなかつた。ちよつと捻れただけです。……ほら、こんな風に引き起すと、ちやんともとのやうになるでせう』

『どうも、有難う……でも……』

無意識に花の方へやつた眞波の手が青年の指に強く觸れた。戰慄とはいひ難い、何か微妙な感じがゾツと背筋を走つた。

三

眞波は、あわてゝ手を引つ込めたが、火傷に似た感じがいつまでもイラ〳〵と指先に殘つた。

青年は、自分が直したアネモネの花の出來榮えを眺めるために、後へ退つて行つて向ひの座席に腰を掛けた。

眼を細めて、とみかうみしてから、いかにも滿足さうに、

『これでいゝ！　ひよつとすると以前よりよくなつたかも知れませんよ』

さういつて、鼻の梁に皺をよせておどけた顏をしてみせた。

『……何物も自然のまゝでは美しくないといふのが僕の意見なんです。……繪は自然より美しいといひますね。つまり、それと同じ考へ方です。あなたが無雜作に挿してゐたときよりも、こんな風にちよつと葩にアクセントをつけた方がたしかに美しくなつてゐるのです』

眞波は、微笑したゞけで返事はしなかつた。

斜めに、車窓から來る光が青年の廣い額に集まつて一種赫奕たる輝きをあたへる。眞波は、相手の額の上でチラ〳〵動く光の水玉を眺めながらこの青年が、今度はいつたい何を言ひ出すだらうと待つてゐた。

この青年に向き合つてゐると、なぜかしら氣怯れを感じないですむ。何んとなく氣持が長閑になつて自然に頰がゆるんでわけもなく微笑さうになる。

廿七八には見えるのだが、いかにも元氣で、考へ深さうな眼差の中に、確信のあるひとにだけ見られる希望の光といつたやうなものがあつた。

きりつと引き結ばれた唇は、どのやうな艱難にも耐へようとする強い意志の力を示し、小麥色をした廣い額は敏感と誠實を表してゐた。

（こんな顔をしたひとは、決して悪いことはしないものだわ）

経驗からでなく、女性特有の鋭い直感で眞波はかう感じた。そして、すぐこの考へが眞波の心の中で、動かし難いものになつた。

青年は、座席の背凭へ後頭部をもたせ、天井を見上げながら樂しい追想でも追ふやうにひとりでニコニコしてゐたが、窮屈さうに膝を組みかへると、だしぬけに、

『……何も、アネモネの花に限つたことではない。世間を渡るにしてからが、さうです。どんなに辛い中だつて、ちよつと工夫をすると、どんなにでも愉快にやつてゆける方法があるんです』

どんな人間でも、かうまで淡白に自分のことを語れまいと思はれるやうな朗かさで、

『……僕はね、無一文でこれから東京へ乘出すんです。手も足もつけられないやうなひどい狀態ですが、これだつて、ちよつと人工を加へると、それはそれなりに何とか愉快にやつてゆけるだらうと思ふんです。生優しいことではないでせうがね』

眞波は、驚いて、あうむがへしにたづねた。

『無一文つて……？』

『つまり、一錢もないことです』

『一錢も？』

『一錢も！』

『東京に、お知合ひの方がいらつしやいますの』

『居りません』

『ぢや、お友達でも？』

『居りません』

『何か、紹介狀でもおありなの？』

『ありません』

四

眞波は、呆氣にとられて、青年の顔を眺めた。

たしかに正氣の沙汰とは思へぬやうなところがあつた。

たゞの一錢も持たずに、一人の知合ひも友達もゐない東京へ出かけて行く。それだのに、屈託のないこの朗かさは一體どうしたといふことなんだらう。

眞波の狹い經驗ではどうしても理解しかねるので、もう一度かうきかずにはゐられなかつた。

『そんな風で、不安なことはありませんの？』

『いゝえ、べつに』

さういつて、青年は子供のやうな無邪氣な表情で輕く微笑して見せた。强がつてゐるやうなところ

はどこにもなかつた。

『痲疼はとうのむかしに濟ましてしまひましたからね。その方はもう免疫になつてゐるんです』

これも奇拔すぎてよくわからなかつた。

『痲疼つて何のこと？』

『あはゝ、痲疼ではわからないかもしれない。……貧乏に對する不安だの恐怖などつてものは、とうのむかしにやつつけてしまつたといふんです。……いや、やつつけたなんていつちやいけない、何も、そんな力むやうなことぢやありやしない。……貧乏は年來の友でね、永い間の馴染なもんだからずうつと君僕交際でやつてゐるんです』

さういふと、いかにもこの言廻しが氣に入つたといふ風にひとりで愉快さうに笑ひ出した。

本氣のやうでもあり、冗談をいつてゐるやうでもあつた。眞波は、釣込まれて笑ひながら、

『あたし、本氣にしかけてゐましたわ。……惡い方ね』

と言つてから、眞波は顏を緩めた。こんな輕い調子が一體自分のどこから出て來るのかそれがふしぎだつた。

『冗談なもんですか。……僕はね、孤兒なんです。大村の孤兒院で育つて、つい昨日までそこの飯を食つてゐた男です。手つ取り早くいへば、子供の時から面倒をみてもらつたお禮に、孤兒たちの保育をやつてゐたといふわけなんです。勿論、月給などは貰はない。呉れたつて、こちらは貰ふ氣はない。

自分が育てゝ貰つただけのものを自分が働いて返すのは當り前のことですからね！』

『それはさうでせうけど。……でも』

『……でも？……でも、どうだといふんです。僕があまり馬鹿正直だとでもいふんですか。いかにも、さういふ考へ方もあるかも知れない。しかし、僕は、まるつきり、反對な考へ方をしてゐるんです。丁年になつて、そのまゝおつ放り出されたつて文句の言へないところを、いつぱしの職業まで授けられたんですからねえ。たとへ食べるだけだつたとしてもですよ。この就職難の折からに』

ひどくムキになつて、まるで喰つてかゝるやうな勢ひで言ふのだつた。そのやうすに素朴な心がはつきりとあらはれてゐた。

『……無給といつたつてそれでも月に一圓宛の手當が貰へるんです。その僅かばかりの殘りでも積りつもつて東京までの汽車賃を拂つてまだお剩りが來るくらゐになつてゐたんです。……僕の方は、東京へ出さへすれやどんなことだつて出來るんだが、孤兒たちの方はさうはゆかない。だから、汽車賃の殘りは全部お菓子やら果物やらをシコタマ買ひ込んで大盤振舞ひをしてやつたんです』

五

二人の孤兒。

一人は、幼稚園の一年から十七年もの長い間、聖安士女學院の高い石塀の圍みの中で世間の波風に

も觸れずに來た娘。

一人は、大村の孤兒院の冷たい柵の中で育ち、つい昨日まで自分と同じやうな薄緣の子供たちの保育に從つてゐた青年。

どちらも、實世間の交渉から隔離した風土の片隅で暮してゐて、いま、まだ見ぬ東京の荒波の中へ船出しようとしてゐる。

境遇の違ひこそあれ、同じような素因と過去に貫かれたかういふ二人が、ほんのちよつとして偶然で觸れ合ひ、向き合つて腰を掛けるやうになつたといふのは、邂遇としても仲々奇拔だつた。

それにもして眞波を驚かせるのは、のびのびとしたいかにも屈託のない青年の態度だつた。

誰一人知合ひのない東京へ行かうといふのに、汽車賃だけ餘して最後の一錢まで孤兒たちの出發振舞に費つてしまつて、何の後悔もなく、まるで幸福の泉の中に浸つてゐるやうな樂しげなやうすをしてゐる。

この青年の心の深さは、眞波の乏しい經驗などでは、とても推し測られぬやうなところがあつた。なんといふ優しさ。

こんな素朴な心を持つた青年がまだこの世にゐるといふことすらが、すでに信じられないほどの事實だつた。

青年は、無限の優しさで眼元を皺ませて、

『……僕にしたつて、一世一代の大振舞でしたが、子供たちにしたつて、臍の緒切つて以來の夢のやうな大饗宴だつたんです。……カステラの厚切が一つゞつに、殊樂が四半分づつつくんです。何といふ贅澤加減なんだ！……あゝ實際、どんな騷ぎだつたか、とてもあなたにはお判りにならないでせう。……そいつを、食堂の長食卓へズラリと並べたところへいきなり連れ込んでさアお喰りと言つたんですが、一人殘らず慄へ上つてしまつて寄りつかうともしない。これは、おれのお別れの御馳走なんだから、食べてもかまはないんだと口を酸つぱくして言ひきかせてようやく納得させましたが、子供たちはすつかり昂奮してしまつて、食堂の羽目板へ喰ひついて大聲で泣きだす始末なんです』

青年は、うつとりとした顏つきで、

『ねえ、あなただつてさう思ふでせう。こんな嬉しい思ひが出來るなら、全財產を投げ出したつて決して惜しくはないつて！　汽車賃の殘りを一錢殘らずはたいてしまつたつて、あながち無茶だなんてお考へにはならないでせう』

眞波は、すつかり心を動かされて、咄嗟に返事が出來なかつた。

『えゝ、それはさうですとも！　それは、當然のことですわ。……でも、これからは、たいへんでせうね。東京つて、仲々むづかしいところらしいですから』

自分の感動を傳へる適當な言葉がありさうに思へるのだが、こんなとりとめもないことしか言へないのが情なかつた。

青年は、いかにも沈着な眼付でチラと眞波の顏を眺めてから、

『むづかしい？　それは僕だつて知らないわけぢやありませんが、どつこい！　僕は生きてゐるんですからねえ。……恐ろしいことなんか何もありやしない。死んでしまつたのなら手も足も出ないけど……。僕が孤兒だつたつてことはさつき言ひました。何しろ、生れた時から何も持つてゐやしないんだから、東京へ行つたつてこれ以上貧乏のしつこはない。損するといふなら、それはむしろ僕よりも東京の方ですよ』

六

青年が、屈託のない笑ひ聲を殘しながら、座席から立つて行つた。

いつの間にか窓の外がすつかり暮れて、暗い海の上で西戸崎の燈臺の灯が瞬くやうに點滅してゐる。

話に夢中になつてゐるうちに博多を過ぎて、汽車は箱崎の近くを走つてゐた。

あゝ、さうだつたと思つて眞波は急に空腹を感じ出した。

考へて見ると、今朝、出發する前に學院で輕い朝食を攝つたきり、十時間以上も何一つ口に入れてゐなかつた。

食事時になつたらお辨當を買ふのですよ、といつて、院長が心配して、驛賣夫を呼ぶ身振までして見せてくれたのでそれはよく知つてゐたが、大村の先で青年が自分のはうへ倒れかゝつて來てから絶

え間なく話が續いてゐたので、食べることなどに氣をつかふ暇はなかつた。

汽車は分岐線をガタガタと乘越えながら箱崎のフォームへ滑り込まうとしてゐる。

眞波は、ハンドバックの金入から五十錢銀貨を一つ摘み出してそれを手の中へ握ると、座席から立ち上つて窓を押開けにかゝつた。

とつぜん、ひとつの考へが心の上に落ちかゝつて心臟のあたりがキュッと縮まつた。

窓枠にかゝつてゐた手が、硬直したやうにそのまゝ動かなくなつてしまつた。

（……一錢もないひとの前で、自分だけが平氣でお辨當を喰べようといふのかしら）

銀貨を握つて狼狽てて立ちかけたとき、つい今迄向き合つて樂しく話し合つてゐた不幸なひとのことは、まるきり考へに入つてゐなかつた。

眞波は、羞恥の感情で首を垂れた。

この長い間、院長や尼姉たちの深い思ひやりや無私の親切の中で暮してきた。さういふものを少しづつ心に染め心に羽織つて、取るにも足らない自分だけど、いくらかは他人の不幸を感じるたましひを持つてゐると考へ、それがせめてもの自分の値打だと思つてゐたゞけに、この失敗はいかにも慘めだつた。

落着いた足音が近づいて來て、眞波の背中で青年の快活な聲がした。

『網棚のものをおろすんでしたら僕がやつてあげませう』

氣がついてみると、自分は立つたまゝぼんやりと窓枠に凭れてゐたのだつた。

眞波はどきまぎしながら座席に腰をおろした。

『い〻えい〻んですの。もうすみました』

さういつて、心の中で冷汗をかいた。

（ほんたうに見られないでよかつたわ！）

辨當を買ひかけてゐるところでも見られたら、どんなにか恥かしい思ひをしなければならなかつたかと思ひ、青年が何も氣づいてゐないのを知つて思はずホツとした。

眞波はすぐ決心した。この青年と向合つて行く以上、自分も東京まで何もたべないことにしようと心をきめた。

青年の辨當を買ふ位のことは容易いが、相手が一錢も持つてゐないことを知つてゐるのに、そんなものを、お喰んなさいなどと差出せるわけのものではなかつた。

眞波の右の掌の中で、さつきから握つたまゝになつてゐる五十錢銀貨が火のやうに燃える。その手をどこへやつていゝかわからなかつた。

『あなたとも下關でお別れですね』

眞波は、ギョッとして狼狽てて訊きかへした。

『あら、なぜでせう』

『あなたは勿論特急でせうが、僕の方はノロ〳〵の普通急行で行くんですから』

思つてもゐない言葉が口から飛び出した。

『あたしも、ガタガタの方で行くんですわ！』

我ながらうまく言つたと思つて嬉しかつた。

七

米原は雨だつた。

霧のやうな秋の小雨がしつとりと空氣を濡らしてゐた。

いちど神戸で眼をさましたのだが、いつの間にかまた眠つてしまつたと見える。

薄眼を開けて見ると、青年の深い眼差が、撫でるやうな優さしさでじつと自分の顏の上に注がれてゐる。眞波はたまらなく嬉しくなつて、もうすこしで微笑を浮べるところだつた。

昨夜、急行の出る十一時まで、ひつそりとした下關の夜更けの街を二時間ばかりも二人で歩き廻り、汽車に乘り込むと、氣疲れと心の弛みで耐らなく眠くなつてグツスリと眠り込んでしまつた……。

ひどい空腹だつた。灼きつくやうな感じが胃袋を責めさいなむ。

ところで、青年の方は徹底した沈着ぶりで、窓枠に肘を掛け、依然としてゆつたりと寛いだやうすをしてゐる。

眞波は、咽喉へそつと唾を送り込んで切ない空腹をごまかした。

それからまた無限のお喋舌だつた。

眞波は、學院で暮してゐた自分の過去のことや、突然の伯母の電報や、都會の生活の中へ入つて行く不安や杞憂や、何もかにもみな打開けた。

青年は、うろたへがちな眞波の眼差をガツチリと受止めると、底力のある聲で言つた。

『うろたへずに物事の正體を見屆ける視力さへあれば、大した間違ひは仕出かさないものです。僕が昨日、やりやうによれば辛いことだつて樂しみに變へることが出來ると言ひましたね。あれは、十年あまりも孤兒の保育をして來た僕の體驗を語つてゐたのです』

否應なしに元氣をつけようといふ風に、眞波の方へ身體を寄せながら根氣よく幾度も繰返した。そのやうすに、嘘のない親切な氣持がはつきりとうかがはれ、無限の慰めを心に感じた。

品川……新橋。……東京の街の灯が小雨の降る空をカツと灼いてゐる。

汽車が東京驛のホームへ滑り込んだ。

東京驛の降車口の出口で、いよいよ別れる時が來ると、青年は親しみの籠つた小さな合圖をしてから、ちよつと頭を下げた。

眞波は、見苦しい樣子を見せまいとして、さようならと、それだけ言つた。

考へて見ると、まだ名前をきいてゐなかつた。

（せめて、名前だけでも！）

さもないと、いつかまた逢ふときの手がかりもない。

眞波は、夢中になつて車道へ走り出した。

『ちよつと待つてちやうだい！』

必死な聲で、かう叫びかけてゐた……。

一瞬の心の亂れだつた。

とり逆上せたやうになつてゐる自分に氣がつき、はしたなさを恥ぢてすぐ自分を制へつけた。

眞波は吸取るやうな眼差で眺めてゐた。

青年は、身につかないダブダブの上衣の裾を風に膨らませながら、丸ビルに沿つた歩道を肩を聳やかすやうにして歩いてゐたが、まもなくその角を曲つて闇の中へ紛れ込んでしまつた。

（もう、これで逢へない！）

未練の氣持がしみじみと心に殘つた。

赤帽が手を擧げて合圖をするとタクシーがスーツと傍へ寄つてきて停つた。

眞波は、ぼんやりした聲で呟いた。

『麻布の龍土町まで……』

タクシーは雨の中へ走り出した。

冬薔薇

一

『お茶でもあがるんなら、勝手にさういつてちやうだい』
『どうぞ、おかまひなく』
『べつに、かまやしないけどさ』
『今日は、ちよつと話があつて來たのよ』
『いつも、どうもオマメなことで。……あたし、失禮して寢たまゝで伺つてゐるわ』
『あなたのぶんの話もあるのよ、顏ぐらゐこッちイ向けなさい』
『かうしてゐたつて話は聞えてよ』
『こちら、生をいふとひどいわよ。こつちイ向きつたら』
馨子は、枕の上でぐるりと頭を廻して、
『はい、向きました。話つて何に？』
こちらは、ブロイエルの鋼管製の床几を引ずつて寢臺の傍へよつて行きながら、

『なるほど、かうして近くで拜見すると、やはりどこかたるんでゐる感じね』
『ご同樣にね』
『憎らしい口をきく。それを言ひなさんなよ。なんとか言ふ不老藥ずつと使つてゐるの』
薄紗の覆のかゝつた薄い羽根蒲團を顎の下まで引上げると、細く剃り込んだ美しい眉の間にグイと堅皺をよせて、
『そんな話よしておくれ』
象牙のやうな色が膚の下に深く沈んで、少し整ひすぎ美しすぎ、冴え返つたやうな端麗さで、ちよつと寄りつき難い感じがする。
『朝つぱらからひとを叩き起して造作の棚おろしはないでせう。百貨店の女主人つてのは妙な趣味を持つてゐるわね』
『おや、あまり寢起きのいゝ方ちやないね、あんたも』
すこし膩肉がのりすぎた、女官式な圓滿な顏をおどけた風にひきゆがめて、
『ところで、なんの話をするつもりだつけな。……あゝ、さうさう昨日のお手紙の趣承知したわ小切手でいゝなら今すぐあげるけど』
『なあんだ、そんな話か』
めえ、と眼を剝いて、

『大束なことを言ひなさんな。無けりや困るんだろ』

『さうでもない。書換停止でちよつとまどついただけなんだ。明日の朝、仲買人が來るからほんのそれまでのことなの』

大袈裟に驚いた眞似をしてみせて、

『ほんのそれまでのことに五千圓も要るの』

『放つといてちやうだいね』

『この節、華族くづれの金利生活者は鼻息が荒いからね。われわれのやうなみゝつちい商賣をしてゐる者には到底お傍にも寄られません。……新東はどうだつたの？』

『まあまあ、どうにかね』

『隱しなさんな、水臭い。……あんたといふひとは蕊に冷たいところがあるわね』

『金利生活者の特長さ。何しろせち辛いからね』

『金のことぢやなくさ』

『たとへ、なんだつてさ』

しつとりとした眼付で數枝の顏をみまもりながら、

『それにしても、今日は遲いゞ出勤ね。お仕事の方にもそろそろ飽きが來たといふわけなの』

こつちは、眼も外らさず、

『どうして、なかなか！　金儲けの方だけは、一向飽きが來ませんな』

『そんな浮氣なあんたでもね。……ときに、あのひとはどうしてゐます。ご健在？　この頃、あまりご一緒のところを見掛けないけど』

『もう逢へないことになつたの』

『……もうお拂ひ箱か』

『今朝の明け方、自殺してしまつたの』

二

『由良さまからお電話でございますが、こちらへお繋ぎいたしませうか？』

扉のところでかしこまつてゐる小間使へ、

『ご用、伺つたの』

『いゝえ』

『この間のお約束のことでしたら承知してをりますと申上げてちやうだい。お伺ひするつもりですつて』

『かしこまりました』

『それで話がわかつたら、返事に來なくてもよろしいわ。……菩提樹茶でも持つていらつしやい。つ

いでにカーテンを開けてちやうだい。……そつちの方ぢやなく、硝子扉の方』

露臺に向いた大きな硝子扉から午に近いどろんとした灰色の陽の光が射し込んで來て、胡桃材の彫刻のある贅澤な大きな寢臺と、スーチンの繪のかゝつた壁の一部をぼんやりと照す。

馨子と數枝は女學校からの古い友達で、これにもう一人、舞踊家の由良祝子を加へて、ちりぢりな女友達のうちでも割合にうちあけた交際をしてゐる。

七八年仲が絶えたのち、野依數枝は亡父の後を繼いで、澁谷の大きな百貨店を獨りで切り廻すやうになつてゐたし、眞波の伯母の三宅馨子の方は、長い離婚裁判のすつたもんだのすゑ、うるさい腐れ縁を斷ち切つてさつぱりした顏をしてゐたところで、ちやうどその頃、亞米利加から歸つて來た由良祝子の發表會の會場で落合ひ急に舊情が復活した。

三人ながら偶然に人生の歩行を新しく踏みかへたばかしで、多少とも氣負つてゐるところだつたのでひどくウマが合ひ、あまり調子がよすぎて却つて閉口するくらゐだつた。

女學校の友達といつても、數枝の方は二年ばかり上だつたので、從つて三人の中では一番年かさで、むかしは日本橋の古舖で育つただけに、大さつぱなくせにキツチリと眼はしの利くところもあつて、一何といふことはなく二人の相談相手といつたかたちになつてゐた。

祝子の發表會の時なども、蔭でだいぶ金を出してゐるらしかつたが、二人にはそんなやうすさへ見せなかつた。

株主といつても六分通りは親族だが、總會などにはテキパキと口をきき、大抵の無理も頭から壓しつけてしまふ度胸があつた。

若い支配人といふよりは、男友といつた方がよく通る岸本清次郎とのことが親族間に問題になつた時も、眉も動かさずに素つ氣ない應待をした數枝だつたが、この事件はさすがに手痛かつたらしく、額のあたりを蒼白くして、

『七時頃に、警察から電話で起されてね。……まさか、そんなことをやらかさうとは思つてゐなかつたので、それこそ寢耳に水だつたわ』

『そちらは、何か覺えがあるんだらう？』

數枝は、ちよつと嫌な顏をして、

『あたし、自殺する動機なんか作つた覺えはないわ』

馨子は容赦のない眼付で枕の上から數枝の顏を見上げながら、

『それぢや、清次郎君、どういふ理由で自殺したのかしら』

『人生觀の問題でせうね、たぶん。……いづれにしても愚劣だわ』

『愚劣はいゝとしてもさ』

『あたしは、たゞ、支配人を辭めてくれといつただけよ』

『そんなことだらうと思つてたわ』

しんねりした微笑を浮べながら、

『それで、後釜は誰なの？』

『それは、まだ言へないの』

『清次郎君の終始末はどうするつもり？』

『あたしが先にたつてやるテはないでせう。……でも、出來るだけのことはするつもりよ』

三

自分と數枝と祝子を結んでゐる紐帶のやうなものは、もともと友情などから出たのではなく、極く利己的なもので、表面の見せかけは兎も角、深いところではこの關係を出來るだけ利用し合つていゝことに暗默に互ひの諒解が出來てゐた。

ちよつと眼につく容姿を持つてゐるといふだけで、どつしりしたところもなければ肚もなく、ひたすら數枝に追從して頤使に甘んじてゐたあの鬱陶しい青年が、生きようが死なうが馨子にはすこしも關係のないことだが、なにか餘波のやうに迫つてくる重苦しいものがあつて、この否應なしの感じが何んとも我慢なりかねた。

三人の交際は互ひの利益のためだけにあるので、損失のはうは初めから契約の中に入つてゐない。數枝自身の問題のためにこんな迷惑をかけられる覺えはなかつた。

馨子は、數枝の放圖のないやり方にもとからあまり好意を持つてゐなかつた。

數枝が亡父の事業を繼いで澁谷百貨店の社長に納まつたとき、その頃、雜貨部の賣子でしかなかつた岸本清次郎を、周圍の手强い反對を押し切つていきなり支配人に引きあげてしまつた勇氣に驚くと同時に、その臆面のなさに舌打ちをした。

勿論、忠告等する氣などはなく、數枝のあけすけな打明け話に氣輕に合槌をうち、平氣で清次郎を話題にのぼせて笑ひ興じもしたが、このためにいづれ何かうるさい目に會ひさうだといふことは、その時から薄々感じてゐた。

そら見ろといふ氣持で、何か手嚴しいことを言つて參らせてやりたくなつたが、それもめんだうくさくなつて止めにしてしまつた。

『……でも、ずゐぶんいゝひとだつたぢやないか。さぞお力落しでせう』

馨子にすれば、いちばん氣に入らないところに觸れてやつたつもりだつたのに、數枝は素直に受けて、

『死なれて見ると、やはりちよつと心を惹かれるのね』

『思ひ出す？』

『こゝへ來る途中、あの人のアパートの下を通るでせう。……ちよつと思ひ出したわ。どうしようと思つたくらゐ』

（やり切れない！）

安手な感情に動かされて、愚にかへつたやうになつてゐるこんな相手とこれ以上會話をつづける氣がなくなつた。

白々とした顔で、寢臺の上に起き上ると、

『今日は、祝子と晝食をすることになつてゐるの。そろそろ時間だから失禮してメークアップをしてくるわ。あんた、その間に小切手を書いて置いてちやうだい』

『あたしも喰つついて行かうかな』

『あたしだけ、つてことだつたから、あんた、今日は遠慮してくれない』

さすがに嫌な顔をして、

『おやおや、あたしは除けものか』

が、すぐ、いつもの調子になつて、

『いゝぢやないの、ついて行つたつて。どうしてもいけないつてんなら、そこから歸るわ』

馨子は、うるさくなつて、

『あゝ、それがいゝわ。ぢや、さうなさいよ。……ちよつと待つてゝね』

『あゝ、待つてる』

さういつて、神妙に小切手を書き出した。かあいさうなやうなところもあつた。

四

馨子と數枝は、めいめい自分だけの思ひに沈み込んで、ものもいはずに自動車の中に坐つてゐた。

數枝のはうは、今朝からの心の騒擾をくどくど反噬してゐたし、馨子のはうは、これから逢ふ祝子との太刀打ちのことを考へてぼんやりと心を霞ませてゐた。

祝子は數枝とちがつて、狹い解釋なりにキツパリとした世渡りの方法も心得てゐ、陰險な性格を淑かさに見せかけるほどの知性も持つてゐる。

この點は、だいたい馨子の性格と似てゐるので、それゆゑに時には忌々しさを感じさせられることもあるが、二人の氣持には疎通があつて、心をゆるしてものをいへるやうなところがあつた。

これも祝子の執拗な性質のひとつの現れであらうが、醜聞に對しては拔目のないほど用心深く、むしろ愼重すぎるといつてもいゝほどだつたが、その代り、絶對に人眼にふれぬところでは隨分思ひ切つた放埒もする。

素行の點でまだ人の口端にのぼされたことがないので、舞踊家などといふさういふ社會には珍らしい純潔型だといふことにされてゐるのはいかにも笑止のいたりだつた。

心を包み、どんな祕密の端も他人には覗かせまいとする油斷のない身構へは、馨子にしても同じだが、こちらの方はもう少し目の粗い皮膚を持つてゐて、かうまで愼重にやれなかつた。先夫の久武と

の離婚裁判のいさこさを、安心して祝子に任せたのもその緻密性を信用したからだつた。

祝子の意見では、あたしのはうが手取早く話がつくといつて、テキパキと久武を説きつけ離婚を承知させてしまつた。

うんざりさせられてゐた離婚裁判に蹠がついたのはひとへに祝子の力によることなので、馨子は今でもそれを感謝してゐる。今度、祝子に五千圓の公演費を出してやる氣になつたのもつまりはそのためだつた。

自動車は、鳥居坂に差しかゝつた。

柊を植ゑた土手の向ふに、安手なコルビュジェ風の建物が立つてゐる。これが、岸本清次郎が昨日まで生きて住んでゐたアパートだつた。

どんなやうすをするかと思つて窺つてゐると、數枝は、わからぬほどに膝頭を顫はせながら、道路に面した三階の窓のはうへチラと視線を送つた。

あの窓がさうだつたのかと、馨子が頭を低くして見上げてみると、窓に取付けた花棚に、末枯れたやうな冬薔薇の鉢植がひとつ置かれてゐて、悪く凝つた肉色のカアテンの裾がヒラヒラとその上に戯れかゝつてゐた。

外套置場へ半長外套を脱いで二階の食堂へ上つて行くと、いつもの窓際の席で祝子が待つてゐた。葡萄酒紅色のスーツをしつとりと身に纏ひつけ、細い切長の眼の隅から二人の顔を振り仰ぎながら、

『お揃ひでようこそ。數枝さん、ご機嫌よろしくて？　半月ばかりお目にかからなかつたわね』

改まつた口調で素氣のないお愛想を言つた。

數枝を連れて來たので、祝子が機嫌を悪くしてゐることがわかつたが、馨子は放つて置いてやれと思つて知らん顔をして自分だけ椅子に掛けた。

數枝は、無雜作に椅子を引き寄せると、食卓の眞中にある邪魔な花立をグイとわきへ押しやつて、

『祝子や、あたし居てもいゝだらう、幾らか出すからさ』

このまゝ坐り込んでしまひさうなので、祝子ははつきりと嫌な顔を見せて、

『今日は困るのよ、商談があるんだから』

『だからさ、商談ならあたしにも一口乘せてよ。どつちみち、損にはならないわ』

なんと言つても祝子が相手にしないので、數枝は、あきらめて歸つて行つた。

五

祝子は、出て行く數枝に流眄さへくれずに、いつものやうに給仕に食前の酒を二つ註文けるといきなり、

『お金、持つて來てくれた？』

と、きり出した。

岸本清次郎が自殺したことは、もう今朝の新聞に出てゐて、祝子もそれを充分知つてゐる筈だからそんなことでも話しながら、その時々に應じた太刀打をすればいゝと多寡を括つてゐたところへ、思ひがけなくいきなりこんな風にきり出して來たので、馨子はちよつとたじろいだ。

つい、五日ほど前に偶然こゝで落ち合つて、一緒に食事までした清次郎が自殺したといふのだから、お愛想にしろひと言ぐらゐはその事に觸れてもよかりさうなものなのに、膠もなく、いきなり拔き差しのならない話へ持つてゆく祝子のキマリのよさはさすがだつた。

自動車の中でも考へてゐたやうに、どのみち自分が拂はなければならない五千圓だが、出さずにすめばそれに越したことはないのだから、馨子としては最後まで粘つてみるつもりだつた。

五千圓の小切手は出がけに數枝から受取つて、現在手提の中に入つてゐる。

今までは、退つ引きならなくなつたら出すより仕樣がないだらうと考へてゐたが、こんなふうに切出されると急に執着が湧いて、のめのめとこの金を渡す氣はなくなつた。

馨子は頷いたとも頷かないともわからないやうな身振りをしてから、急に眼を大きくして、

『今朝の話、知つてる？』

と、誘ひかけてみた。

祝子は、ワイン・グラスの脚を指で捻りながら素氣もなく、

『え、、知つてるわ』

と、突つぱねるやうな口調で答へた。

嘘でも見せかけでもなく、これが祝子の本質なのだからちよつと敵はない氣がする。自分のこと以外には何ものにも興味を持たないといふ、この晒し切つた利己主義は、それはそれなりに一種の風格があつた。

『今朝、寢てるうちに襲はれちやつたの怖れたわ、まつたく』

と煽ぎ立てるやうな調子でもう一度やつて見たが、祝子は器用な手つきで羹汁の匙を使ひながら返事もしなかつた。

『察するところ數枝の方は未練たつぷりなのね。喧嘩まぎれに別れるとか何んとかと言つたんだらうが、本氣ぢやなかつたんだわ』

『ふむ』

『まだ、後釜が出來てゐないらしいのがその證據だわ。……數枝この頃何か焦つてるわね』

喋舌れば喋舌るほどこちらの負けになりさうで嫌な氣がした。言葉が頭腦を通らずにいきなり口先へ出て來るやうで、ひどく賴りなかつた。

『さつきの立ち際の惡さなんかなつちやゐないね。あんな風ぢやこれからもあまり利用價値がなささうだわ』

祝子は、氣が無ささうに魚肉叉の脊で魚のフライを押し潰しながら、

『要するに、發育不良なのさ。……數枝のことなんかどうだつていゝぢやないの。早く金をお出し』

馨子が祝子と違ふ點はしんねりとした粘り强さを持つてゐるところだつた。祝子も相當な辛抱强いところがあるが、最後の一歩といふところで熱を無くして投げ出してしまふやうな脆さがあつた。それが馨子の付け目だつた。

『お金、こゝに持つてゐないの』

祝子がどう出て來るかそれが見ものだつた。

六

馨子の先夫の方代久武は三宅家の執事の倅だつた。

家令の父が老齢を口實に體よく引退ると、有無をいはせずにその後釜に坐り込んで、慶應の理財科を出たばかりの氣慨もあるべき廿六の青年が、縞袴を穿き先代の居間の闘際に平突伏て一向恥辱とも思はぬ臆面のなさだつた。

ちよつと日本人離れのした整つた容姿と、取つてつけたやうな禮儀正しさがあり、それやこれやで廿三になつたばかりの世間見ずの馨子を逆上せあがらせてしまつた。

久武は、先代が死ぬまでの七年ほどの間は相當謹んでゐたが、それをキツカケに手の平をかへすやうな野放圖な樣子になり、どこかのバアの女給だつたといふ薄馬鹿のやうな女を公然と引廻すやうに

なつた。

その邊までは、馨子もさほど氣にはしなかつたが、盲腸炎で入院してゐる間にその女を邸へ引き入れたといふことがわかつたので、さすがに我慢する氣がなくなり、自分だけのものを纏めて葉山の別莊へ引移つてしまつた。

早速、顧問辯護士に離緣の訴訟をさせたが、すつたもんだで三年たつても埒があかずうんざりしてゐるところへ、アメリカから祝子が歸つて來て氣輕に久武の方の交渉を引受けてくれた。

久武は、この新鮮な花にすつかり幻惑され、祝子のいひなりに馨子との離緣を承諾した。

それを見澄ますと、祝子は覺れよがしに急に手の裏をかへすやうな仕打をしたが、久武の方はどうしても斷念めず、この二年ほどの間うるさく附き纏つて祝子を惱ました。

やうやく手を切るところまで漕ぎつけたが、今迄のいきさつに對しては、もちろん相當なお禮をしていゝわけなので、それを澁つたやうなやうすをするのだから祝子にしたつてをさまらないわけだつた。

祝子はマジマジと馨子の顏を眺めてから、むしろ愛想のいゝ口調で、

『無駄なことを言ふのは、止さないか。早くおよこし』

『無駄つて、何のことさ。あたしには、まだ何も話がわかつてゐないのよ』

祝子は平氣な顏で、

『それが、無駄だつて言ふのよ……。いつたい、押問答しなければならないやうなむづかしい話なの？』

『でも、五千圓となると、あたしだつて相當痛いわ。お手紙は拜見したけど、あなたと久武のその後の細かい經緯だつてよく知らないんだし、いきなり藪から棒ぢや……』

かうなつたら、どこまでも逃げを張るほかなかつた。初めから金を出さないつもりになつて、もつと緻密に組立てゝ來るんだと思つて、心の中で後悔の臍を嚙んだ。

祝子は、挺でもといふ風に、

『筋が通らないなんてことはないでせう。……別居してゐる間、久武に拂はなければならなかつた扶養料といふものをあたしのお蔭で一文も拂はずにすんだから、それくらゐのものは當然あんたよこしたつていゝ筈なんだわ。今更あたしにこんなことをいはせるなんて、すこしおかつたるいぢやないの』

七

祝子はしんねりした油斷のない眼つきで、

『……ねえ、お馨、あんた、そこに、お金、持つてるんでせう？』

馨子は眼じろぎもせずに、

『諄いわね。持つてゐないと言つたぢやないの』

『でも、さういふ約束だつたらう？』

『約束なんかした覺えはないわ。……別居してゐる間の久武の扶養料は法律で拂はなくともいゝことになつてゐるのよ。それを今になつてどうしてあたしが拂ふの』

『あたしが仲介したゝめにそれを拂はずに濟んだんだから、その請求權は當然あたしの方へ移轉してくるわけよ。四の五のと言はずにお出しなさい』

馨子は聞き流して、

『それで、久武、このごろどうしてるの？』

祝子は、綽々たる餘裕を見せながら、

『間もなくこゝへやつて來るわ』

これは、思ひもかけぬ痛ごとだつた。

この永い間散々逃げ廻つて、やうやく緣切りになつた久武とこゝで顏をあはせるのかと思ふと、考へたゞけでも身顫ひが出た。

もう見榮も張りもなかつた。馨子らしくもなく、見苦しいほどに狼狽へて、

『ひどいわ。……こんなところであたしを久武に逢はせる氣？』

祝子は眼に見えないほどの辛辣な微笑を泛べながら、

『どうしても出し澁るんなら、あんたと久武の撚を戻してあげようと思つて、それでわざわざこんな

ところへあんたを引つ張り出したといふわけなの。……小切手を貰ふだけなら、あんたの家へ出かけて行つたつていゝ譯なんだけどね』

『あたし、困るわ』

『困るなら、器用に出しなさいよ。よこす意思があるから數枝に小切手を書かしたんでせう？』

（さつき、自分がちよつと街路を見下してゐる間に、數枝が祝子に何か耳打してゐたのはこのことだつた）

さうとなると、馨子も惡びれずに、

『そこまで知つてゐるんならやむを得ないわ。どつちみち、あげるつもりでゐたんだから。……ぢや、これ……』

祝子の方も解りがよく、いつものやうな憎らしいほどの美しい笑顔になつて無造作に小切手を受取ると、今までのいきさつは忘れたやうに、

『この間の淀の競馬はどうだつたの？「ヒサタケ」がよく出たんですつてね。やはり賣らずに置くはうがよかつたわ』

馨子は、いゝ加減な合槌をうちながらそゝくさとナプキンを食卓の上に置くと、

『あたし、もうこの邊で引退るわ。そろそろ久武がやつて來るんでせう』

祝子は澄ました顔で、

『久武なんか來るわけはないさ。たゞ、あゝ言つてみたまでのことなの』

馨子は、さすがに呆氣にとられて、

『まあ、惡い奴！』

『どつちが！』

『ぢや、さつきの小切手の話もあんたのあてずゐ量だつたのね』

『數枝と一緒に來る以上、あんたが數枝に小切手を書かした位のことは察しられるでせう。ちやうど書換停止であんたが金も動かせるわけはなし。それに……』

さう言ひかけて、急に食卓越しに手を伸ばして馨子の手頸を押へると、食堂の上へ張出してゐる中二階の階段の方へ眼まぜをしてみせた。

馨子がその方を見ると、自分の娘も同樣になつてゐる姉の子の曉子が、五十ばかりの服裝のいゝ中老の紳士の腕に凭れるやうにしながら中二階へ上つて行くところだつた。

啞娘

一

曉子はノー・カラーの鶯桃色のジョーゼットの服の胸に蘭の花をつけ、頰にあてた手の小指の端を氣取つたやうすで唇のはうへ曲げ、相手の顏を上眼づかひに見上げながら何か小聲で話しかけては艶めかしく笑つてゐる。

家にゐるときは、凍えた魚のやうにおし默つて、ものを言ふ時も唇さへ動かしたことのない冷淡な娘のいつたいどこにこんな色つぽさが隱れてゐたのかと、馨子は呆氣にとられて眺めてゐた。

食卓を隔てゝ向ひ合つてゐるのは、地味な服を器用に身につけた伊達といつたらいちばん當りさうな中年の紳士で、ゴルフ燒けのしたキリツとしまつた淺黑い顏を眞正面に曉子の顏の上に据ゑ、いかにも人をそらさぬやうすで曉子の話に頷いてゐる。

ひどく馴れ切つたやうなところもあり他人行儀のやうなところもあつて、二人がどんな交際になつてゐるのか見當がつかないのが薄氣味惡かつた。

馨子が、二人の方へ心をとられてゐると、祝子はしやくるやうな含み笑ひをして、

『ちよいと驚いた?……でも、これが初めてぢやないのよ……。この間も二人でブラブラ散歩をしてゐたつけ』

これも、初耳だつた。馨子は驚いて、

『ちよイと、それ、本當?』

『誰が嘘なんぞいふもんですか。あたし、ちやんと見屆けたのよ』

『いつ? どこで?』

『五日ほど前。こゝで清次郎と中食をした歸り道。……新橋の袂へ自動車を停めて何か話しながら土橋の方へ歩いて行つたわ』

『どんなやうすだつた?』

『今日のに比べるとまだしもすましてゐたけど。でも、それにしても仲々やるわね。こちらを見て落着き拂つてるぢやないの』

曉子が、馨子に引き取られたのは、もう十二年ほど前、馨子が久武と結婚した翌年のことで、曉子は十歳だつた。

姉の智子は不幸な結婚をして早く夫に死に別れ、間もなく自分も肺を病んで死んでしまつた。

久武がそんなことを考へつくわけもなく、馨子の意思といふのでもなく、うやむやに父の意見に從つたまでのことで、もちろん曉子に愛情などを感じてゐたのではなかつた。家庭教師でもつけて放つておけばいゝので、そのために自分が煩はされることもなささうなので、何の責任もなく父のいひなりになつた。

眞波とちがつて、この方はちやんと血の續いた伯母姪なのだから肩身を狹くすることはいらないのだが、一體に氣の沈んだ、鬱したやうなところのある娘で、自分に當てがはれた庭の奥の別棟の洋館で一人でのつそりと暮してゐた。

三宅家の氣質で、この一家の誰もがさうであるやうに、冷淡で無關心でよく〳〵の時でも感情の小波さへ顔に現さない。

頭は鋭いほどいゝらしく、學校の成績もズバ抜けてよかつたが、日常はひどく物臭く、惡く落着き拂つてジロジロと觀察はするが決して自分の意見などは吐かない。

まだ廿三にしかならないのにいつも懶さうな顔をし、無口で陰氣でひどく老成ぶつたやうすをしてゐる。……さういふ曉子の、人が違つたやうなこの艶めかしいやうすはたしかに馨子を驚かせるに充分だつた。

『……どうしたつてんだらう』

思はずさう呟くと、祝子は、意味あり氣に、唇の端を押し曲げて、

『つまり、あれは反動なのさ。曉子さんがどうしてあんなになつたか、あんた、覺えがあるでせう？』

二

祝子は、ダイと身を反せると馨子を見おろすやうにしながら、やつつけてやれといつた口調で、

『氣のつかないわけはないんでせう。あんたのやうな悧巧なひとにさ』

『なんだか、ひどく大掛りなことを言ふわね。曉子があんな中年と遊び廻つてゐることに、何かあたしが關係でもあるといふの？』

祝子は底意地惡く眼を細めて、

『關係ぢやない、動機さ』

『おやおや、たいへんだ。よしてちやうだい、そんな言ひがかりは。あたし覺えがないわ』

『本當に、覺えがない？』

『諄いッたら！』

『へえ、そんな恍け方もあるの』

チラと思ひ當ることがあつた。

が、それならそれで、どんなことがあつても白を切る必要があつた。この祕密だけは、たとへ祝子でも覗き込ませるわけにはゆかなかつた。

『しつゝこいわね。煽らうたつてその手に乘るもンか』

祝子は何もかも洞察いてゐるといつた顔で、ふうんと鼻を鳴らし、

『逃げを張るなら、はつきり言つてあげようか』

『また當推量か。いつたい、どんなことなの？』

祝子は、容赦のない口調で、

『曉子さんのあゝいふ反動の原因は、要するにあんたの友達の戸山冬彦といふ青年にあるのさ』

馨子は、相手にしないやうなやうすを裝ひながら微笑してゐたが、心はそれどころではなかつた。

戸山冬彦にたいするひそかな愛の感情は、馨子の心理の放埒の生活の中で、これだけは理想といつたやうな、神聖化されたものになつてゐて、冬彦にさへ氣振りも見せず、まるで十六七の少女のやうにその日その日の思ひの丈を日記に書きつけ、たつた自分一人だけのものにしてゐた。

涸渇した馨子にとつて、これは心情をうるほす清冽な泉のやうなものだつた。冬彦へ遠いほのかな想ひを運ぶときだけ、馨子の心はたとへやうのない深い夢心地の中へ誘ひ込まれる。

勘定高い馨子も、この愛情だけはひどく高く評價して、多少の複雜な影翳はあるにしろ、これは母性愛に近いものかも知れないなどと考へてゐた。

今度、眞波を冬彦の配偶に選んだのも、冬彦にだけは間違ひのないしつかりしたお嫁さんが欲しいといふねがひのほかに、冬彦をこの先長く手近かなところで眺めたいといふ氣持が強く動いてゐることとは否めなかつた。

かういふ愛情に何といふ名をつけたらいゝのか、長い間、複雜に練りかへして來た心理の放蕩の末でも自分にもそれがよくわからなかつた。

探りの巧い祝子のことだから、いづれ何かカマを掛けて來るだらうとは思つてゐたが、かうまでしぶとく斬り込んで來られるといかにも腹に据ゑかねるのだが、こゝで怒つたやうなやうすを見せるとみすみす祝子の思ふ壺に嵌り込むわけで、思ひ切つてさう出來ないのが口惜しかつた。

馨子は人知れずグツと奥齒を嚙んで、

『だから、冬彦がどうしたといふんだね』

『冬彦さんが、曉子さんなんかを相手にせずに、あんたのやうな中年ばかり追求してゐるンで、それで、曉子さんが反動を起したつてわけなのさ。……そんなら、こツちだつて青つちよろい青年なンかに眼もくれるもンか。……無理もない點もあるわね』

三

冬彦はいつも謹ましやかで、馨子の顏を眞正面に瞶めたことさへなかつた。

馨子のはうでも馴れたやうすは露ほども見せたことはなく、隙のない身構へばかりして來たので、冬彦が自分にそんな感情を持たうなどと思つても見たことがなかつたが、祝子にそんな風にズバリと突かれると、さすがに心の火照りを感じないわけにはゆかなかつた。

祝子は嵩にかゝつて、

『このごろのお嬢さんは、みな過敏症に罹つてゐるんだからどんなことだつてすぐ感づいてしまふさ。あんたも冬彦さんもずゐぶん謹んでゐるらしいけど、それなりになんとなく不自然なところがあるンだ』

馨子は、やり切れなくなつてもう少しで叫び出しさうになつたが、やうやく苦笑に紛らして、

『馬鹿だよ、あんたつてひとは、下らない氣ばかり廻して……。要するに品性が下劣だからさ』

『へい、へい、どうせ、あまり上等の方ではございませんです』

可笑しくもないが、馨子は大袈裟に笑つて見せてから、

『冬彦はね、眞波のお婿さんなのよ。氣をつけて口をきゝなさい、當り障りがあるわ』

『おや！』

祝子にとつてはこれは思ひも掛けない不意打らしかつた。眼を丸くして、

『ほう、これは驚いた。それ本當のこと？　擔ぐんぢやないだらうね？』

やうやく一方を切拔けた感じだつた。馨子は心の中でほつと息をついて、

『まあ周章てずに見ていらつしやい。嘘でないことがすぐわかるから』

祝子は敏捷くチラと眸を動かして、

『いや、大したお腕前です』

これは、ちよつと聞き捨てならなかつた。しかし口調だけは穩かに、

『こらこら、何を言ふ』

祝子は、何か言ひかけたが、氣を變へて、

『眞波さんてのは、いゝお孃さんらしいね』

『眞正直すぎてすこし堅苦しいところはあるけど、冬彦のお嫁さんにはあんなのがいゝと思ふの』

祝子は、白々とした顏で、

『あたしなんか、口を出す資格はナシさ。危くつて、うつかりものも言はれやしない。なにしろ大切な祕藏ッ子なんだから』

『それを知つてゐるなら、これからはすこし氣をつけてものを言ひなさい』

祝子は、また探るやうな眼付になつて、

『それで、……あの二人を結婚させて、どうしようといふのさ』

馨子は輕く受け流して、

『どうもかうもないぢやないか。あたし、いゝお姑さまになるつもりよ。どつちも世間見ずだから、しつかり後見してやる必要があるわね』

祝子は、くつくつと笑ひ出して、

『なるほど、こいつアいゝ。……後見される方がよつぽど恐いつてね！』

また、カチンと來たが胸をおさへて、

『この情味は、あんたのやうな朴念仁にわかるもンですか』

『ですから、先程、ちやんとさう申上げましたわ』

さう言つて、洗指鉢にちよつと指先を浸しながら、

『あんた、これからどうするの。ワインガルトナアでも聽きに行かない？』

『やめとくわ。曉子を連れて歸らなくちやならないから』

『おや！　しをらしいこと』

『知らないならいゝが、見た以上放つてもおけずサ。……歸るならあんただけ歸つてちやうだい。あたし、あの二人が濟むまでこゝで粘つてゐるわ』

四

祝子が歸つて行くと、馨子はメモに一行ばかり走り書をして給仕に曉子の食卓へ持つて行かせ、自分はロビイの長椅子で曉子がやつて來るのを待つてゐた。

曉子が戸山冬彦を愛してゐるといふのは祝子の當推量で、事實のところはそんなことがあるらしく考へられなかつた。

曉子のゐるところは母屋から離れた庭の奥の別棟にあるのだし、冬彦が邸へ出入りするやうになつたのは、極く最近のことなのだから、冬彦と顔を合はせたことさへほんの數へるほどしかないわけだつた。

馨子も、その邊のことを惧れて、二人から眼を離さないやうにして來たつもりなので、その方の杞憂はまづまづ無用だといつてよかつた。

しかし、曉子が好んで中年の紳士とだけ遊び廻つてゐるといふのはいかにも奇矯で、それにあの媚態は油斷ならなかつた。

祝子の眼識は根本のところで間違つてゐるのだから、冬彦などに關係のあることではあるまいが、それにしても、あゝまで拗ねたやうなやり方をする以上、何かそれだけの理由がなければならぬはずだつた。

いくら放つてあるとはいひながら馨子にとつては、何といつてもたつた一人の姪なのだから、拗ねてゐるなら拗ねてゐるで、その捩れだけでも捻り戻してやらなければなるまい。

同じ家に住み、五日に一度ぐらゐは顔を合はせながら、この長い間、無關心に放りつぱなして置いた曉子がこの頃どんなことを考へてゐるのかそれを嗅ぎつけてやる興味もあつた。まさかとは思ふが間もなく眞波も東京へ着くのだし、何とかして退つ引きならぬところへ追ひ詰めて、せめて冬彦にたいする嘘のない氣持だけでもはつきりと突きとめて置く必要があつた。

心理の駈引や感情の詐術には充分自信のある馨子だつたが、それにしても曉子との太刀打ちには相當な身構へが必要だつた。

いつたん自分のことになると牡蠣のやうに沈默して、どんな些細なことでも漏らさうとしない頑固な曉子の口から、それだけのことでも引き出すのはなかなか容易いことではなささうだつた。

絨毯を踏む輕い足音が聞える。

顔を上げてみると、曉子がいつものやうに身體の芯まで凍えたやうな蒼白んだ顔を振上げて眞直ぐこちらへやつて來るところだつた。

見れば見るほど隙のない顔だ。

美しいことは美しいが、いつも齒を食ひしばつてゐるやうなこんな頑な顔をした娘を愛する青年などあるのかしらと思ふ。

曉子は、機嫌の惡い子供のやうなやうすで棒立ちになつたまゝ、まじろがぬ眼差でジッと馨子の顔を見据ゑながら、唇の端で、

『何か、ご用？』

と、いつた。

『そんなところに立つてゐないで、こゝへ掛けたらどう』

うんとも、すんとも返事がなかつた。

馨子はさうしまいと思つてゐるのに、いつものやうに腹立たしくなつて來て、

『あなた、あたしたちが床席で晝食をしてゐるのを知つてゐたんでせう』

『えゝ知つてゐました』

『知つてゐてなぜ挨拶に來ないの』

『だから、かうして來てゐますわ』

五

（なんて、可愛氣のない娘なんだらう）

自然に口元に冷たい微笑が泛んでくるのが判つた。

『あたしが、いらつしやいといつてやつたんで、それでやうやくやつて來たんでせう』

曉子はそろそろと口を閉ぢにかゝるやうすで、いつものやうなムツツリした顔になり、

『えゝ、それは、さう』

『そんな挨拶つてありますか』

『……』

『ねえ、なんとか仰言いよ』

『……』

急に聾にでもなつたやうな無感覺な顔で、突つ立つたまゝジッとこちらの顔を見返してゐる。かうなつたらもう挺でもおへるものではなかつた。

馨子は、うんざりして、投げ出したくなつてしまつた。

まだほんの若い娘が中年の男とばかり遊んで歩くなどといふのはずゐぶん危つかしい話だが、女の人生なんてどうせ賭事のやうなものなんだから、傍から口を出して見たつて仕樣がない。

冬彦のことにしたつてさうだ。この娘に冬彦を好きになつてはいけないなどといへる筈はあるまいし、好きになりたければ好きになるがいゝぢやないか。こんな風では結婚したあとで眞波が困るだら

うと思ふが、それだつてこつちの知つたことぢやない。

どのくらゐ本氣に思ひつめてゐるのかその點だけちよつと不安だが、祝子のいふやうにこんな拗ねた眞似をするのがその反動なら、どつちみちたかが知れてゐる。闘ふもんか放つて置いてやれ。

この小癪な娘を骨の髓まで思ひ知らせてやるには頭から無視してやるに限る。誰が訊いてなんぞやるものか。

覺られぬ程度に調子を變へて、

『……そんなむづかしい顏をするやうなことぢやないのよ。久しくどこへもど一緒しなかつたから、今日は夜まであなたに附合つてあげようと思つて、それでお呼びしたのよ』

この調子はたしかに自然だつた。

『どこへでも、お望みのところへお伴してよ』

曉子の頰が、瞬間、パツと血の色をあげ、すぐまた蒼くなつた。

（どうしたといふんだらう、この娘は）

何か、たいへんに激動してゐるやうだが、それがなんのためなのか、察してやるほどの氣もなかつた。

馨子は、何も氣がつかなかつたやうすで、

『それとも、あたしなんかとぢや氣詰つせい？』

馨子は、用心するやうな沈んだ聲で、

『あたくし、どちらでもよろしいわ』

さういつてから、足を踏み替へて休めの姿勢をしながら早口に附け加へた。

『行きたいところなんて、別にありませんけど……』

この頑固な娘がこれほどに折れてくるのはたしかに珍しいことだつた。

馨子は、すかさず輕く合槌を打つて、

『さうね、面白いところもなささうだけど……』

急に思ひついたやうに、

『あなた、ワインガルトナアはどう？……まだだつた筈ね』

『えゝ、まだでしたの』

『どうする？』

『お伴させていただくわ』

馨子は、大袈裟に勇み立つて、

『よかつた！　これで話がきまつたと。……そイで、あなたご晝食はすんだのね？』

『いゝえ、お茶だけだつたの』

『おやおや、ぢや、こゝで喰る？　……喰るなら見てゐてあげるわ』

始めて、コツクリとうなづいた。

『えゝ、頂くわ』

六

食堂へ引きかへして、食卓に向き合つて坐ると、馨子は曉子の晝食を命つけ、自分にはサンザノの白を持つて來させて口をつけながら、

『この頃、どうしてるの』

曉子は前菜の生雲丹を黑麵麭に載せて口へ運びかけて、ジロリと上眼をつかひ、

『いつもの通りよ』

同じ邸に住みながらこんな問答も妙なものだが、これがたまに二人が顏を合せた時の互ひのきまり文句になつてゐた。意味などあるのではなく、おはやうといふくらゐの挨拶だつた。

それはともかく、考へて見ると、馨子はもうこれで半月ほど曉子に逢つてゐなかつた。

風邪氣味でずつと寢室に食事を運ばせてゐたし、癒くなつてからも懶け癖がついて出鱈目な時間にしか食堂へ降りて行かなかつた。

今まではよく判らなかつたが、かうして明るい窓際に向き合つて坐ると、この半月ばかり逢はないでゐるうちに、曉子がまるつきり別な娘のやうになつてゐるのに氣がついた。

（おや、どうしたんだらう？）

髮も顏容もいつものまゝだが、手頸などはひどく細くなつて、眼の下に薄い隈のやうなものが出來、心の葛藤と戰つてゐるといつたやうな、ひどい悲しみに耐へてゐるといつたやうな、どつしりと底のすわつたものが表情の中に出來上つてゐた。

『どうして、そんなにあたくしの顏ばかりごらんになりますの』

今迄ぼんやりと曉子の顏を眺めてゐたのだつた。馨子は、すぐ笑ひ出して、

『この頃、急にお綺麗になつたわ、びつくりして眺めてゐたところなの』

曉子はぼぐしかけてゐた顏をキュッと引緊めて、

『止してちやうだい、そんないやな冗談は』

『冗談なもんですか。半月ばかり見ないでゐるうちに、まるで違ふ人みたいになつたわ』

何の氣もなく言つたのが、曉子にはこの言葉がひどくこたへたらしくビクッと肩の邊りを顫はせながら急に眼を外すと、殊更らしい氣のない調子で、

『あら、さうでせうかしら』

なんとかしてはぐらかしでしまはうとするやうな狼狽へた調子があつた。

（やはり、何か隱してゐることがある）

が、こちらは無視してやることに肚をきめてゐるのだから、わざと引きちぎつて、

『ついでだから、「ベルモオド」へ寄つて見ませうか。何か新しいのがあるかも知れない』

曉子は氣がなささうに、

『えゝ、どうでも……』

と、いつて、珍らしく臆病な眼つきで、窺ふやうに眼の隅からチラと馨子の顏を見上げ、

『さつきの方、あたくしをゴルフに誘つていらつしやるの』

（やはり訊いてもらひたいのだ）

馨子はまるで聽いてゐなかつたやうに、

『それで、お夜食はどこでするの？……ついでにそれもきめて置きませう』

曉子は唇を嚙んでちよつと顏を伏せたが、すぐいつもの冷たい表情になつて、小憎らしいほど落着き拂つて食事をつゞけた。二度とその話には觸れなかつた。

出かけようといふ間際になつて曉子がいつた。

『眞波さん、今日の晝の汽車で着くのでしたわね。お迎ひに行つて差しあげなくてよろしいの』

（あゝ、さうだつけ）

島原まで迎ひに來てくれといふ電報へ手嚴しい返事をしてやつた。せめて、東京驛までと思つたが、それも氣が重かつた。

『子供でもあるまいし、なにも迎ひになど……』

ワインガルトナアを聽いてから遲い夜食をし、十一時すぎになつて二人が邸へ歸ると、火の氣のない廣い應接間の椅子に、眞波がたつたひとりでしよんぼりと掛けてゐた。

落葉の記

一

……冬になると、樹は根から水分を吸ひ上げることが出來なくなるので、殘つてゐる養分を大切に使はなくてはならない。

そのためには、養分を送る部分を少くする必要がある。こんな理由で、秋になると葉が落ちる。葉は樹を保たせるために、樹全體のことを思つて、喜んで落ちてゆく。

では、さやうなら。

兄の手紙はこゝで終つてゐた。

遺書だとはつきりわかると、ドキンと胸にひどい衝擊が來た。身體中の血がスウッと足の方へ降り

てゆくのがわかつた。

アパートの差配のお婆さんからこれを受取つた時、なんで殊更めかしく手紙などをよこしたのだらうと、幸子は訝しく思つた。

別れ別れに住んでゐて、こちらからは兄の清次郎のアパートへは絶對に訪ねない約束になつてゐるが、澁谷百貨店へ行きさへすればいつでも逢へるのだし、つい一昨日の夜こゝへやつて來て、卅分ほど話し込んで行つたばかりなので、手紙をよこすほどの用事はない筈なのに、ドツシリと持ち重りのする兄の手紙はなぜといふわけもなく胸騒ぎを感じさせた。

そろそろ商會へ出勤する時間なので、服は着てゐたがまだ靴下は穿いてゐなかつた。

窓際に棒立ちにたつてゐる裸の足の爪先から、曇り日の底冷のする初冬の朝の冷たさがしんしんと脛の方へ這ひ上つてくる。

狼狽した頭の中で遺書の文句を辿つて見た。胸がワクワクするばかりで、何を讀んだのかまるつきり覺えがなかつた。

急いで窓際の椅子に腰をおろすと、グツと息をつめながら中程のところからもう一度讀みかへしてみた。

……昭和八、九年頃の左翼思想の反動時代に、私は人生に於ける最も大切な青年の開花期を過した。

疾風怒濤がをさまつたばかりでゝ海の上はまだ暗く、波が白い泡をふいて、凄じく荒れ狂つてゐる。何を知り何を目的に生きて行くべきかわからず、たゞ無氣力に押し流されるほかはなかつた。

何か新しい時代が來かゝつてゐた。が、それはどういふものなのかまるつきり見當がつかなかつた。

學問すら何の希望も與へず、生きてゆくこと自體が無意義と思はれるやうなさういふひどい時代に私は大學生活の大部分を送り、何の自信もなく「世間」へ押し出された。

遊惰や放蕩や虚無の精神が私の周圍に押し寄せた。希望も目的もない毎日の苦痛を誤魔化すためにさういふものが是非必要だつたともいへるだらう。

ところで、新しい曙がやつて來た。日本はいま國運を賭して正義のための戰爭をしようとしてゐる。

この偉大なる嚴肅な拂曉に遭遇して、魑魅魍魎は色を失つた。

長い間、怠惰と放蕩と淫佚に馴らされた私の精神は、とてもかういふ壯烈な時代の壓力に耐へられさうもない。そして、私のやうな有害な人間を自ら消滅させることだけが、私が成し得る日

本を愛する唯一の方法だと考へる。

私の放蕩の相手、野依數枝のことにはこゝでは觸れない。二人の間にどんな愚劣なことがあつたかいづれ君が知ることもあらうから。

正直に告白するが、數枝はたしかに私の自殺の原因をなしてゐる。しかし、それが全部ではない。これだけはよく覺えてゐてくれ。

二

幸子は、兄の遺書を膝に載せたまゝ、窓の方へ向いて長い間身動きもせずに坐つてゐた。

薄墨色の雲が葉を落した欅の梢の上に重苦しく垂れさがり、二つ三つ實を殘した烏瓜が地境のトタン塀の上で寒さうに搖れてゐる。

幸子は何も見てゐるのではなかつた。

視線は寒々した朝の景色に注がれてゐるが、心はとりとめのない過去のことをぼんやりと思ひかへしてゐた。

幸子が島原の聖安土女學校を卒業して東京へ出て來た時、兄はもう澁谷百貨店の支配人になつてゐた。

九州の大學にゐた頃のやうな朴訥なところはまるつきりなくなり、生えぬきの東京の人間のやうす

になつてゐるのに驚かされた。

隙のない服裝もさうだが、都會風になり切つてゐるのはむしろ心理の方だつた。

言葉尻にいちいち惡丁寧な抑揚をつけ、その癖、表情の方は水の樣に冷たく靜まりかへつてゐる。取りつくしまのない感じだつた。

姉の半生を通じて、結婚の不幸といふものをつくづくと眺め盡したので、どんなことがあつてもこの轍を踏むまいと痛いほどに心を引き緊め、自分ひとりで喰べて行く職業を身につけることにばかり一心になつて來た幸子だつた。

東京へ出て來たとしても、勿論兄になど頼る氣はなかつたが、とりすましたこの慇懃なやうすだけは我慢ならなかつた。

兄が別居を申出た理由は、百貨店主の野依數枝との放蕩を祕し隱すためだといふことはその後間もなく判つたが、大體そんなところだらうと察してゐたので、この方は格別驚きもしなかつた。

幸子の方も、せつかく東京へ出て來た以上、自分の思ひ通りに振舞へる自由を欲してゐたので、むしろほつとした位だつた。

扉の上の廻轉窓から冷い風が吹き込んでくる。

部屋の中に火の氣がないのでしんしんと身體が冷えあがる。手を伸ばせば屆くところに外套が掛つてゐるのだが、意怙地になつて齒を喰ひしばつて寒さに抵抗してゐた。

兄の遺書は、さまざまなことを言つてゐるやうに見えて、その實何事も語つてゐない。なにを言ふつもりなのか一向摑まへどころがない。こんなことなら何もこんなものを書く必要はなかつたやうに思はれる。

この遺書の中にあるものは、曖昧な觀念と、內容のない空疎な調子だけだ。

自殺する間際にさへまだこんな嘘を言ひ、自分の行爲を抒情で扮飾しようとしてゐる。

幸子は、兄の淸次郎の脆い性格と遊惰性をもとからひそかに輕蔑してゐたが、かうまで救ひ難いものだとは思つてゐなかつた。精神を見失つた現代の靑年の悲劇的な一面をはつきり見せつけられたやうな氣がして耐へ難い憂愁の情を感じて思はず聲を出して呟いた。

『自殺するのが當然だわ』

こんな低雜な性格に憐憫をかける方が間違ひだと思つた。

たとへ兄であらうと、この底知れない輕薄さには鞭を振はないではゐられない氣持だつた。

それにしても、東京へ出て來てまだ二年ほどにしかならないのに自分の手で兄の葬ひをしなければならないと思ふと、さすがに悲しかつた。

幸子は椅子から立ち上ると書机のところへ行き、今日の午後東京へ着くはずの眞波に宛てゝ、突然不幸が起きて迎ひに出ることが出來なくなつたから、落着いたらこの住所のところまで訪ねて來てくれるやうにと走書をし、手早く外出の身仕度をすると、その手紙を手に持つて階下へ降りて行つた。

三

アパートの差配のお婆さんが玄關の上り口で藝者崩れの若い止宿人と立話をしてゐたが、幸子の姿を見ると撥の惡さうな顏でむかふを向いてしまつた。

（何か噂をしてゐたんだな）

敏感にすぐさう覺つたが、顏色も動かさずに、

『ねえ、お婆さん。兄が死にましたのでね、お通夜だの後片付けなどで四、五日歸れまいと思ひますから、どうか、よろしくね』

魂消た顏で、ものも言はずに眼を据ゑてゐるのへ、膠もなく、

『……今日明日中に、吉江眞波といふ女のひとが訪ねて來るはずですから、來ましたらこの手紙を渡してやつてください、お願ひしてよ』

お婆さんは、へいへい、と頷いてから、さて、何と言つたものだらうといつた風に口をもぐもぐさせて、

『ほんたうに、たいへんでしたわねえ。……わたし、今朝、新聞で讀みましてねえ、おつ魂消ちまつて。……さぞ、お力落しで……』

餘計なことだと思つて、返事もせずにサツサと靴を穿いて玄關の扉を押した。

双葉女學校の角を曲ると、四谷驛の廣場で風が白い土煙をあげてゐた。冬の入りがけによくある白白とした肌寒い朝だつた。

幸子は、身體を曲げるやうにして廣場を突つ切り、驛の販賣店で「銀座だより」といふ四頁新聞を買つた。社交界の醜聞や花柳界の情事を好んで載せる有名な赤新聞だつた。

驛のそばの公衆電話で商會へ電話を掛けると、主人の方代久武がもう來てゐて自分で電話へ出て來た。

『兄が自殺しましてね、どつちみち、あたしひとりでやらなくてはならないのですから、四、五日お休みさせていたゞきますわ』

久武は、無頓着な聲で、

『さうだつてねえ、驚いてゐたところなんだ』

と、いつて、急に含み笑ひをし、

『何も君が手を出すことはないだらう。數枝にすつかりやらせたらいゝぢやないか。それが當然だよ』

あけすけな下司張つた調子がグツと癇に觸つた。

『こんな時、そんな下等な冗談は言はないでちやうだい』

久武は、はつは、と笑つて、

『まア、さう怒るなよ。……午後になつたら、おれもそつちへ行つてあげるが……』

機會さへあればつけ込んで來ようとする中年男の厚顏しさには我慢ならなかつた。

『よしてちやうだい！　兄の死體の前であなたなんかにお逢ひしたくないわ』

久武は、すこし眞面目な聲になつて、

『君がお葬式萬端をするのだとすると、金はどうするんだ、金は』

拂ひをしたばかりのところだつたので、幸子は五、六圓の持合せしかなかつた。

『あたしだけでどうにかやつて見るつもりですから放つといてください。兄のものでも賣り拂へば何とかなるでせう』

『そんな無茶なことをいつたつて仕樣がない。どう手輕にやらうたつて、そんなもの位で足りるわけはないんだから……』

面倒臭くなつてガシヤンと受話器を掛けてしまつた。

見付の橋を渡つて、停留所に立つてゐると、すぐ三原橋行の電車がやつて來た。

座席の狹い隙間に無理矢理割込むと、すぐ新聞を擴げた。

「澁谷百貨店尼御前の御亂行、男女郎の支配人哀れな末路」といふどぎつい表題を三段拔にして、雜貨部の賣子でしかなかつた兄が一躍支配人に拔擢された當時のことから書き出し、二人の放埒な生活をゾツとするやうな執拗な表現で微細に書き立て、この非常時に何たることぞ野依數枝愧死すべし、と結んであつた。

四

「ロード・ハウス」といふのは、窓ばかりのやうな、例のコルビニジェ式といふのを小器用に眞似た安手な建物で、いかにも兄の氣に入りさうなアパートだつた。

幸子は、今迄に幾度もこのアパートの前を通り、行きずりに三階の兄の部屋の窓を見上げたこともあつたが、內部へ入るのはこれが初めてだつた。

回轉扉を押して廣いギャラリーへ入ると、右手に受附のやうなところがあつて、そこに五十ばかりの、キチンとした服裝の猫のやうな顏をした小柄な男が坐つてゐた。どういふ譯か、ひどく立派な口髭をはやしてゐた。

『あたくし、岸本清次郎の妹でございますが……』

來るな、と思つてゐると、果して相手は憤慢とも恨むともつかぬ複雜な表情になつて椅子から立上りながら、

『はア、あなたが岸本さんのお妹さん』

詰め寄つて、首實驗でもするやうにジロジロと幸子の顏を眺めてから、妹だかなんだか判つたもんぢやないと言つたやうな露骨な微笑を浮べながら、

『ほんたうの、お妹さんで、いらつしやる？』

と、もう一度、念を押した。

『えゝ、さやうです』

口髭の男は確かにさうなら少し言ふことがあるといつたやうに急に開き直つて、

『どうも、えらいことになりまして、はア』

どういふ方法で憤懣を叩きつけてやらうかといつた眼付でジロリと睨めあげて、

『岸本さんには、かねがね色んな評判がありますので、近々ほかへお引越願はうと思つてゐた矢先にかういふことになつてしまつて、實にどうも、えらい迷惑……』

受附の男だと思つたら、どうやらこれが主人なのらしかつた。

成程、向ふの机に空色の上張を着た娘が別に一人控へてゐて、相手の氣を惡くしてやれといつたやうな技巧的な微笑を含みながらジッと幸子の方を瞶めてゐた。

幸子はどちらの相手にもならずに、わざと、

『管理人の方か、御主人にお眼にかゝりたいのですが……』

口髭の男は、身についた格式張つた咳拂ひをひとつして、

『私が、このアパートの主人ですが』

小金を貯め込んだ官吏の古手だと一眼で見てとられた。

『あゝ、さやうですか、初めまして』

ご迷惑を掛けまして、と、月並な挨拶が口まで出かゝつたが、そんなことをいつてやる必要がないと思つて言葉を咽喉の奥へ送り込んでしまつた。

『……昨夜、夜半の一時に叩き起されましてね、それからずうつとこいつにかゝり切りッ、てなわけで、實にどうもひどい目に逢ひましたよ。刑事が來る、新聞記者が來るで、あなた……』

幸子は、引ッぱづして、

『早速ですが、お通夜をすませるまで、兄をこゝへ置いていたゞきます』

主人は先を越されたといつた正直な表情をしてから、狼狽て苦い顔をつくり、

『いや、何とか、ひとつ』

『置いていたゞけますでせう?』

『それだけは、どうか』

『差當つて引移すところもありませんもんですから』

『さう仰言られても、私の方では何とも……』

『ぢや、どうしませう?』

主人は、聞えないふりをして、

『あゝして、野依さんて方もいらつしやるんだから、その邊でご相談して頂いて……』

『野依さんて方は存じませんわ。……あたくし、禮儀のつもりでこんな風に申しあげてゐるんですよ。……明日一日、兄をこゝへ置いていたゞきます!』

五

扉を開けると、小さな玄關の間になつてゐて、そこから十疊ほどの廣さの客間につゞいてゐる。

床には枳殻色の絨毯が敷きつめてあつて、凹壁の本棚の兩側に絨毯と共色の蒲團椅子がつくりつけになつてゐる。

花模様の大きな笠をかぶせた床電燈。鋼管製の小卓。色とりどりのクッション。

いかにも西洋臭く趣味がよささうだが、近寄つてよく見ると、どれもこれも西洋家具のデザインを鵜呑みにしてあわてゝ形だけを模倣した模造品ばかりだつた。

いかにも物欲しさうで、こんな家具に取卷かれて暮らしてゐるこの部屋の主人の淺薄な顏が見えるやうだつた。

幸子は本棚の傍の壁に凭れて立つてゐた。

この部屋で繰返された兄と野依數枝の日常を想像すると、穢らはしいやうでどうしても蒲團椅子に掛ける氣にはなれなかつた。

窓がひとつ開け放された儘になつてゐて、そこから風が吹き込んでゐる。風の中に微な藥品の匂ひが交つてゐた。兄の死體が置いてある隣の寢室からくる匂ひらしかつた。

幸子の眞向ひに桃花心木仕立ての寢室の扉がある。

（あの向ふで兄が死んで横はつてゐる）

それは、この部屋へ入つて來た時にちやんと知つてゐるのだが、いきなりその扉の方へ近づいて行く氣にはなれなかつた。

どんなキツカケでそちらの方へ歩いて行けばいゝのか判らない。いづれ間もなく直面しなければならない鬱陶しい情景が重苦しく心にのしかゝつて來て、もうそれだけでもやりきれない思ひがするのだつた。

扉を叩して、黑い背廣の服を着た男が入つて來た。これも嚴しい口髭を生やしてゐた。

幸子の方へ近寄つて來ると、立つたまゝでいきなり、

『岸本の妹さんといふのは君かね？』

とたづねた。

どんな人間がやつて來たか、すぐわかつた。

幸子は、壁から背を離すと、すこし改まつた口調になつて、

『は、さやうです』

と、こたへた。これから始まることのうるさゝを感じて、すつかり氣が滅入つてしまつた。

『僕は、麻布署のものだが、ちよつとお訊ねしたいことがあつてね。……何しろ、こちらには何も判つてゐないもんだから』

職業的な隙のなさで、

『ほんの、形式だけのことなんだ。……立つて話すわけにもゆくまい。……さア、こつちへ來て掛けたまへ』

幸子を掛けさせてから、自分も小椅子を引き寄せてそれに掛けながらすぐ切り込んで來た。

『死んだ岸本と澁谷百貨店主の野依數枝といふ婦人とは、一體どんな關係だつたのかね？』

『兄は、支配人のやうなことをして居りました』

刑事は、すこし氣を惡くしたやうすで、

『その位のことは知つてるさ』

『どういふことをお訊ねなのでせう』

刑事は急に底意地の惡い口調になつて、

『野依數枝と岸本との間に情交があつたといふのは事實なのかね？』

『あたくしには、どうも……。これまでも兄のところを訪ねたことさへなかつた位なのですから』

『東京に居なかつたのかね？』

『いゝえ、ずつと東京に居りました』

『喧嘩でもしたのかね』

『いゝえ、かくべつ』

『をかしいぢやないか、同じ東京にゐて、喧嘩もしないのに、一度も兄を訪ねなかつたなんてえのは』

六

兄を訪ねようと訪ねまいとそれは個人の自由で、咎め立てされる理由もなく、そんなことにいちいち答へなければならない義務もないが、逆らふほどのことでもないので、幸子は殊更丁寧な口調で、

『それは別に深い意味のあることではございません。……兄はいつも忙しく、わたくしもまた勤めを持つてをりますので、その中にその中にと思つてゐるうちに、こんなことになつてしまひまして……。尤も兄の方では一週間に一度位はわたくしのところへ寄つてくれました』

幸子がおとなしい出やうをしたので刑事の方も氣持を變へたと見え、單純に受け、

『ふん、あまり仲のよい兄妹ではなかつたとみえるね』

といつてズボンのポケットに兩手を突つ込んで技巧的な寛ぎ方をしてから、

『自殺だといふことは判つてゐるんだが、念を入れるに越したことはないんだから、それでまア岸本の最近のやうすでもきかせて貰ひたいと思つてね』

幸子の頭の中をドキツとするやうな考へが掠め去つた。

それはあまり素速く、それに摑まへどころのないものだつたのでいま自分の心を掠めた考へは一體

何だつたのかよく判らなかつた。

（いま何を考へたんだつけ……）

考へを纏めるために、瞬間、眼を閉ぢた。

幸子が沈默してゐるのを、刑事は言ひにくいのだと釋つたのか、宥めるやうな調子で、

『さう固くなるほどのことはないさ。言質をとらうといふのでもなし、證據のどうの言つてゐるわけでもないんだ。最近變つたことでもあつたかどうか、大體わからしてもらへればそれでいゝんだよ。最近、君が岸本に會つたのはいつ頃のことだつたね？』

『つい、一昨日の夕方逢ひました』

『あゝ一昨日の夕方ね』

無意味に繰返してから、如何にも作つたやうな去り氣ない風で、

『何か變つた樣子はしてゐなかつたかね』

『……格別、そんな風には見えませんでした。沈んだやうな顏もしてゐませんでしたし、さうかといつて、わざとらしいやうなところもなかつたやうです。……一體、兄は感情を顏に現はす方なので、そんな樣子があればすぐこちらに感じられる筈なのですけど、歸つて行く最後まで、いつもと同じやうな印象を受けました』

それが不思議で……といひかけて、口を噤んだ。どういふ心の作用なのか、兄がいつもと違つてゐ

なかつたといふことを、微妙に誇張してゐる自分に氣がついた。

（何のつもりでこんな言ひ廻しをするのかしら？）

刑事は眼を伏せて、ふむ、ふむ、と頷いてゐたが、何か暫く考へてゐたのち、唐突に眼をあげてもう一度念を押した。

『變つた樣子は、まるつきりなかつたといふんだね』

『どざいませんでした』

『何か遺書のやうなもの受取らなかつたかね』

思ひも掛けない言葉が幸子の口から飛び出した。

『遺書なんて、そんなものは受取りませんでした』

さういつて、すぐ覺つた。

先程チラと心を掠めた考へといふのは、これだつた。意地惡をして、すこし野依數枝を嫌な目に遭はしてやらう……心の深いところでさう考へてゐたのだつた。

七

兄は、壁際に寄せた寢臺の上で寂然たる樣子で眼を閉ぢてゐた。

鼻と頰骨が棘々と聳え立ち、頰が落ち込んでそのあたりに何ともつかぬ蒼い影のやうなものがあつ

た。

靜かな死顏だつた。苦惱の色もなく悲哀の影もない。トホンとした表情が幸子の悲しみを誘つた。

冬の蠅が一匹飛んで來て兄の額の上にとまつた。

幸子はそれを拂はうと手を伸しかけた途端、胸の奥に抉るやうな劇しい悲哀の情がこみ上げて來た。

突然、涙が溢れ出した。顏へ手を持つて行く暇もなかつた。苦味のある涙が、後から後から押し出して來てどうしてもとまらなかつた。

身を裂かれるやうな痛烈な悲しみに押し流されながら、幸子は生れて初めて肉身愛といふものをはつきりと感じた。

離れ離れになつてゐても淋しいとさへ思はず、東京へ來てからも進んで逢ひたいともかんがへたことのない兄だつたが、心の深いところではどんなに兄を愛し力にしてゐたか、死なれてみるとそれが手にとるやうに判るのである。

（あたしは、たうとう、ひとりぼつちになつてしまつた！）

落莫とした感じが悲しみの中に混り込む。

冬の薄陽が射し込むこのガランとした部屋の中で、兄の死體に向き合つて泣いてゐる姿が、如何にも佗しげに自分の心で眺められる。

ひつそりとした部屋に自分の泣き聲だけが響き、壁に反響してまた自分の耳にかへつてくる。その遣瀬なさといつたらなかつた。

東京へ來てからの浮足立つやうな樣子はともかくとして、子供の頃の兄は控へ目な心の優しい兄だつた。姉は早く嫁いで、兄妹二人だけで生きて行かなければならなかつたので、いつも力にし合つて暮してゐた。

兄と暮してゐたその時々の思ひ出が靜かに心の上を流れ去る。

（あゝ、あんなこともあつたつけ）

幸子は、聲を出して呟いた。

『もう、みな濟んでしまつた。何もかも思ひ出の中にしか殘つてゐない』

悲しみは段々薄れて、そのかはり憤りに似た一種の感情が胸に浸み透る。

兄は生きる力を失つて自殺をしたのに相違ないが、幸子には、何か眼に見えない苛酷なものが弱い兄を打ち倒し、生命を奪つてしまつたやうに思はれてきた。

『ほんとうに弱い兄だつたから……』

ふと、兄の遺書の一節を思ひ出した。

野依數枝はたしかに僕の自殺の原因になつてゐる。しかし……

『兄は、數枝に殺されたやうなものではなかつたかしら』

さう呟くと、思ひも掛けずに何かミリミリと心が緊き締つて來るのを感じた。

この思ひ付きにはたしかに根據があつた。

あの臆面のない圖太い數枝が氣の弱い兄をどんな風に弄び、利用し、消耗させ、そしてその末に投げ出してしまつたか、そのやり方の細かいところまでいちいちはつきりとわかるやうな氣がする。

低い切々の雨雲が動く度に、兄の死顏の上に薄陽が射しかけたり翳つたりする。

しみじみとそれを眺めてゐるうちに、刑事にあんなひどい嘘を言つたことが決して生優しい感情から出てゐたのではなかつたことを覺つた。

『兄はたしかに數枝に殺されたやうなものだわ』

理性が激しい憤りの感情の中で死にかけてゐた。

闘志

一

幸子は、暫くの間感情の滾りに身を任せてゐた。

憤りが間もなく憎しみに變り、一種の確固たる觀念のやうなものになつて心の底にどつしりと落着

いた。頰にのぼつてゐた血が靜かに退いてゆくのがわかつた。

幸子は、ハンドバツクから鏡を出して自分の顏を映して見た。表情を喪失した能面のやうな蒼白い顏。いつも見馴れてゐる自分の顏ではない。ちがふ人間のやうな顏が映つてゐた。

幸子は兄の耳に口を寄せて呟いた。

『あたしの顏をよく見ておいてちやうだい。あいつを叩きつけてしまふまで、この顏は決して笑ひません。どんな微かな笑ひでも。……お誓ひしてよ！』

あゝんと口をあけたわびし氣な清次郎の顏の上にまた薄陽が射しかける。天井に近いところで蠅の羽音がしてゐた。

『なんて悲しさうな顏をしてるの、お兄さん。……あなたは身嗜みがいゝのが好きでしたね。あたし、あなたのそんな趣味嫌ひだつたけど、伊達なら伊達なりになぜ最後の日までそれで押し通してくれなかつたの？……どんなことだつていゝけど、ギリギリまでやり通せないあなたのさういふ弱さがあたしには贅成出來なかつた。……今まではこんな餘計なことは一言も言ひませんでしたけど、これが最後だからよく聞いてお置きなさい。……ほんたうに情ないひとね。こんな死顏を妹に見せるなんて』

幸子の眼から靜かに涙が流れ出して來た。

『ねえ、お兄さん、あなたはどんな死に方をなすつたの。たぶん身じまひをする間もないほど慌しかつたのね。あなただつてこんな顏で死にたくはなかつたでせうけど……。あたしがいま綺麗にしてあげますわ。粉白粉をつけて、口紅を塗つて、どんなひとの死顏より綺麗にしてあげますよ。待つてゐてちやうだい、いま、すぐよ』

幸子は、ガアゼにコールド・クリームを掬つて兄の顏を丁寧に拭きとり、パフで粉白粉を薄く刷き、頰紅をつけ、口紅を塗り、それから綺麗に眉を引いた。これが兄にしてやる妹の最後のつとめといつたしみじみとしたものが胸に來た。

清次郎の頰はほんのりと薄桃色に染まり、何か樂しいことがあつて心をときめかしてゐるやうにも見えるのだつた。

『……まあ、なんて綺麗になつたのでせう！　まるで、結婚式の朝のやうな綺麗な顏になつたわ。……ほんたうに、いゝことね。ついでに、ちよつぴり笑つて見せてちやうだい』

この兄の顏も、間もなくこの世で見ることが出來なくなると思ふと、悲しさより淋しさの方が深く、この先この激しい世を一人で生きてゆく佗しさを改めて心に辛く感じた。

幸子は兄の死顏に向き合つたまゝ、長い間身動きもせずに椅子に掛けてゐた。時間の經つのをまるつ切り忘れてゐた。

寢室の扉が開いて、銀狐の襟卷をした、肉置のいゝ卅七八の婦人が入つて來た。

……寫眞で見覺えのある野依數枝だつた。

二

『あら、どなた？』

岸本の死體の枕元に若い娘が掛けてゐるのを見ると、數枝は眼差を險しくして詰るやうに言つたが、氣がついたと見えてすぐ愛想のいゝ顏になつて、

『あゝ、お妹さんでいらつしやいますね？　この度は、どうも、飛んだことで……』

ガラガラした調子で喋言り立てながら幸子の方へ近づいて來た。

『思ひがけないッたッて、こんな意外なことがあるもんぢやない。……びつくりしちやイましてねえ、どうしても本當とは信じられませんでしたの』

野依數枝の現れ方はたしかにすこし早すぎた。

氣持の用意がまだ充分に出來てゐなかつたので、ちよつとドキッとしたが、思つたより落着いてゐる自分を發見して安心した。

『あなたは、どなたです』

數枝は、大袈裟な身振りをして、

『あたし、野依よ、……野依數枝』

『何の御用があつて、無斷でこゝへ入つていらしたのです』

『……』

幸子の出方は數枝の度膽をぬいたらしかつた。瞬間、眼を見張つて幸子の顏を見返したが、岸本の妹なら自分と岸本の關係を知らないわけはなく、こんな咎め立てをされる筈はないといつた嚥んかゝつた口調になつて、

『ですから、あたし、野依だと申しあげてゐるんですよ』

幸子は冷たく突つぱねた。

『それは、いま伺ひましたわ』

『……』

（どんなことがあつたつて、兄の傍へなんか寄らせるものか！）

『こゝは兄の寢室なのですが、案内もなくヅカヅカと踏込んでいらつしやるのはどういふわけなのでせう』

數枝は、テレたやうな薄笑ひをしながら、

『あら、あなたは岸本さんとあたしのことをご存知なかつたのですか』

まさかそんな筈は、といつた顏でシャアシアと椅子へ掛けようとするのへ、幸子は浴せかけるやうに、

『どらんの通り、こゝには兄の死體が置いてあるのですから、何か御用でしたら、あちらの部屋でお

伺ひしますわ』

ずゐぶん手厳しい口ぶりだが、怒つてゐるやうなところも見えない落着拂つた幸子を眺めて、この娘は一體何を考へてゐるのだらうといつた戸迷つたやうな顏をしながら、

『さうねえ、どこだつてお話は出來るけど……』

未練を殘してグズグズしてゐるのを押すやうにして隣の部屋へ追ひ出すと、後手でピツシヤリと寢室の扉を閉めた。

『どんな御用でせうかしら』

數枝は、脂肪ののりすぎた括れ加減の顎を引き緊め、さてどう言はうかとあせるやうに、

『何もご存知なかつたとすれば、昔からのことをくはしくお話しなくてはならないけど……』

『そんなこと、伺づても仕樣がありませんわ』

數枝は、こいつ、といふ風に眼を光らせたが、すぐ苦笑に紛らして、

『たいへんな劍幕ね。あたし、こんな扱ひを受けるのは心外よ』

幸子は、相手にもせず、

『御用だけ、どうぞ』

三

數枝は、ちよつと氣色ばんだが、すぐ惡く落着いて、殊更見下したやうな口調になつて、

『話がチョクなのはあたしも贊成よ。こんなことにいつまでもひツ絡まつてゐる暇なんかありやしないんだから』

どうして酵憤を叩きつけてやらうかといふ風にジロジロと幸子の顏を眺めながら、

『まつたく、こんなのッてあるかしら。辭めたからは死なうと生きようと勝手だと言へばそれまでだけど、こッちの迷惑といつたら、それこそ！……こんな目に遭つた上にまた足前をするなんてずゐぶん馬鹿な話だけど、店の名もあることだし、岸本氏の後始末はやはりあたしの方でやるより仕樣がないわね』

幸子は、冷淡にはねつけた。

『折角ですけど、それは御辭退いたしますわ。そんなことをして頂くいはれはありませんから』

數枝は、ふん、と鼻を鳴らして、

『いはれのないことは今申しあげた通りなんですがねえ、岸本氏に支配人を辭めて貰つたことはあたしとあのひとの間だけのことでまだ表向きになつてゐないのだから、店としてはやはりそれだけのことをしなくてはならないのよ。店規といふものだつてあるんですし、それに……』

お前のやうな小娘が……、といつた輕蔑し切つた眼付でジロリと見おろして、

『それに、あなたがそんなことをいふのは、すこし餘計ぢやないこと？』

お前なんぞ引つ込んでゐればいゝのだ、と言はんばかりの言ひ方だつた。

幸子は、今に見ろと思ひながら、つとめて穏かな口調で、

『これは兄の遺思なのですから、妹としては、やはりそれに従ふほうが……』

案の定、數枝は急に眼を光らせて、

『……何か、そんな風な遺書でも？』

『さあ、なんといふのでせうかしら。……遺書といふよりはむしろ感想とでも言つたやうな……』

數枝は手の裏をかへしたやうな現金な口調になつて、

『まア、さうでしたの、遺書なンてえものもなく、何が原因で自殺したのか判らないもンだから、警察からなんだかんだと訊きにくるンでほとほと弱つちやイましてねえ。まさか、あたしが殺したとも思つてゐるわけでもあるまいけど、うるさいのが閉口で。そんなものがあればほんたうに助かるわ。……そイで、その手紙、そこに持つていらつしやるの？』

幸子は、ハンドバックから兄の遺書を取り出すと、それを小卓の上へ置いた。

數枝は、厚顔しくずゞ手を伸ばしかけて、

『それ、あたしの方へ拝借していゝかしら？』

『お斷りしますわ』

『みすみすあたしが迷惑をしてゐるのを承知でそんなことを仰しやるの？』

『どうしようと、あたしの自由ですわ。これは兄が私へ宛てた私信ですから』

手強いと思つたか、急に調子をかへて、

『さうね、あたしの言ひ方が悪かつたわ。……ぢや、新聞記者かなんかゞ來たら、納得するやうにあなたから見せてやつてちやうだい』

『お望みなら、さうしますわ。……でも、お斷りして置きますけどこの手紙では、自殺の原因なんかに少しも觸れてありませんのよ。書いてあるのはもつと別なことです』

數枝は、ギョッとしたやうすで、半ば獨語のやうに、

『どんなことが書いてあるのかしら』

『放蕩の告白や、澁谷百貨店のカラクリや、それから例の東京商會の買潰しのいきさつや……』

どんな出鱈目でも平氣で言へさうだつた。

四

數枝は狼狽を押隠すやうに冷たく鼻の先で笑つたが、それは心の動揺を示すのに役立つただけだつた。

『ふ、ふ、卑劣ねえ。自殺する間際にそんなことをするなんて、岸本のやりさうなこつたわ』

『兄は、あなたの店とはもう關係のない人間よ』

『なんであらうと、卑劣に違ひないでせう』

『あら、なぜでせう？……あたしたちは、なんでも打ち明け合つて來た兄妹なんですの。兄が妹にどんな手紙を書いたつて、あなたなんぞに卑劣呼ばはりされるいはれはなくてよ』

數枝はキリツと齒を嚙んで、

『では、先刻あたしと岸本のことは何も知らないと言つたのは嘘だつたのね』

『あんな風に申上げたのは、あなたへの禮儀よ』

『たいした落着き方ね。岸本氏のお妹さんだけのことはあるわ』

口では強さうなことを言ひながら手の中で無意識に手巾を押し揉んでゐる。數枝の不安と焦躁がはつきりと見てとられるのだつた。

感傷的な兄の遺書——

その中に、兄と數枝の放埒な生活の告白や、百貨店の惡辣なカラクリがくはしく素ッ破ぬいてあるなどといふのは、幸子の出鱈目だつたが、その効果は豫期しなかつたほど鮮かなものだつた。

數枝は睫毛を戰かせながら部屋の隅のはうを眺めてゐたが、フイと幸子の方へ顏を向けると、

『ねえ、その手紙、あたしに賣つてちやうだい』

幸子が返事をせずにゐると、數枝はそれを承諾の意味にとつたのか、肉置きのいゝ膝を乘り出すやうにして、

『その代り、あたしの方でも充分色をつけるわ』

ハンド・バックから小切手帳と萬年筆を取り出して手早く金額を書き入れ、それを小卓の上へ置きながら、

『三千圓で、手を打つてちやうだい。頃合の値段だわ』

誰か扉を叩する。

癖のある氣ぜはしいその叩き方で、幸子には方代久武がやつて來たのだといふことがすぐ判つた。うれしかつた。

數枝は、困惑の色をうかべて、幸子に返事をするなといつた眼交ぜをしたが、それより先に幸子は落着いた聲で叫んでゐた。

『どうぞ』

久武は、チエビアットの服をキツチリと身に着け、少しばかり禿上つた額を聳やかすやうに二人の方へ近づいて來ると、數枝の顏へ皮肉な微笑を送りながら、

『今朝、新聞で讀んだんだが、こいつア、いかな女傑でも少々痛手だつたらう』

祝子のトリツクに引つかゝつて、僅かばかりの眼腐れ金で馨子との離緣を承知して以來、祝子、馨子、數枝のトリオを眼の敵にしてゐることは、數枝もよく知つてゐるので、數枝にとつてはこれはこの上もない惡い折だつた。

『あたしのことは、どうだつていゝさ。……それはさうと、あんたこちらのお知合なの？』

『岸本幸子嬢は、わが大都商會の忠實な祕書役さ。御不幸があつたといふからちよつとお悔みに來たところなんだ。……見るところ、お二人ともひどくむづかしい顏をしてゐるが、何か御用談中だつたのかね？』

數枝が誤魔化さうとする先に、幸子がズバリと言つてのけた。

『野依さんが、兄の遺書を三千圓でお買ひくださるといふのよ。小卓の上に乘つてゐる小切手がさうですわ』

五

久武は、小卓の上の三千圓の小切手と岸本清次郎の遺書をジロジロと見比べながら、

『へえ、この手紙をね』

と言つて置いて、早くぶちまけろといふ風に幸子に素早い眴をくれた。

幸子は、殊更しみじみとした口調で、

『遺書といふよりは、むしろ懺悔錄と言つたやうなものですの。……野依さんとの生活の劇しい後悔や、百貨店のひどいやり方や、そんなことを殘らず細々と打明けて來ました。……本質は極く氣の弱い人だつたのですから、兄としては、自殺する前にせめてこんなことでもしなければとてもやり切れなかつたのだらうと思ひます』

久武は、唐突にヘラヘラ笑ひ出し、

『冗談……』

と、鼻の先で撥きつけるやうに言つてから、

『そんなら値ぢやないねえ。一桁ばかり單位がちがふよ、それぢやア』

數枝は、さすがに鼻白らんだらしく、ちよつと狼狽へたやうすを見せて、

『久武さん、あんたの知つたことぢやないんだから、あんたは口を出さずに置きなさい』

久武は、數枝の方へ痛快さうな流眄をくれながら、

『口を出す權利はないかも知れないが、君が屁古垂れるのを痛快に思つてい〻譯があるんだ』

數枝は、負けて居ずに、

『愚痴なら、祝子か馨子に仰言いよ。あたしの方は艮だからちよイとばかり見當違ひだわ』

と、跳ねかへして置いて、幸子の方へ向き直り、

『いざこざはぬきにして、話を決めちやつてちやうだい。お賣んなさいよ、損にはならない取引だわ』

幸子は、叩きつけるやうな口調で、

『やめて置きますわ』

『それがギリ〳〵のお返事？』

『ついでに、店葬の方もはつきりとお斷りして置きますわ』

數枝は、今日は折が悪いと思つたか、思ひ切りよく小切手を取上げてハンド・バツグに納めると、空々しい愛想笑ひをして、

『何れ折を見て、また改めて誰か御相談にあがらせることにして、今日は、これで……』

ゆつくり立上りながら、久武に、

『そのうちに、どこかへお伴いたしませうか』

久武は、相手にもせず、

『まア、平に平に。……俺ア、婆ア嫌ひだよ』

『なんて挨拶をするの。婦人に好かれない組ですぜ、あんたは

久武はそれに答へずに、ジロリと數枝の顏を見上げ、

『階下のギヤラリーで刑事が待つてゐた。何だか難しさうな話だつたぜ。あまり待たせずに早く行つてやれよ』

數枝は、さりげなく、おや、またか、と輕く受けたが、さすがにサツと面差を暗くして億劫さうなやうすで部屋から出て行つた。

數枝と久武が齒の浮くやうな應酬をしてゐる間、幸子は差當つてのことを考へてゐた。

取敢ず兄の後始末をしなければならなかつたが、幸子の財布には五、六圓の金しかなかつた。

最初のつもりでは、兄の家具でも賣つてなんとかする氣だつたが、見かけ倒しの小蒲團や床電燈ではいくらにもなるものではなかつた。

やつてやれぬことはあるまいが、兄のあはれな死顏を見ると、そんなみじめな葬式ではすませる氣にはなれなくなつた。

五分ほど思ひをひそめてから心を決めた。

（久武の結婚の申出を承諾して、その仕度金で立派な葬式を出さう。どのみち、さうでもしなければ方法がつかないのだし……）

『……お願ひがあるんですけど、あちらの部屋まで行つていたゞけない？』

久武は、ちよつとおびえたやうな顏で、

『話ならこゝだつて出來るぢやないか』

『兄の遺骸の前でなければ出來ない話なの』

六

兄の遺骸の前で久武と向き合つて掛けると、幸子は、最後にもう一度自分の決心を確めるために眼を閉ぢた。心がすぐ呼應した。

（どんなものを犧牲にしても！）

この決意は、理性の力などではどうすることも出來ない一種の狂信になりかゝつてゐることをはつきりと認めた。

輕薄な久武に自分の生涯を委ねることも、この闘志の前には殆どものゝ數ではなかつた。

（お兄さん、あたし一人の力で立派なお葬式をしてあげます。……あなたはあたしがいま何を考へてゐるかを知つていらつしやるわね。……あなたが辛かつたゞけのものは、必ず數枝に叩きかへしてやります。あいつが倒れるまでは死んだつてやめはしません。どうぞ見てゐてちやうだい）

久武は、三宅家から分けられた五萬圓の金で油壓式の研磨機とラップ盤の發明權を安く買ひ取つて蒲田に小さな製作工場をつくり、丸之内仲通に事務所を置いて精密機械類の貿易をやつてゐた。

先輩の紹介で幸子が傳票係として久武の商會へ就職したのは前年の春のことで、久武が祝子が自分に馨子との離緣をうるさくすゝめたのは實は馨子の差金だつたといふことをはつきりと悟つたばかりの頃だつた。

祝子の件には強かな久武も參つたと見え、ひどく人懐つこくなつて、就職すると間もなく盲腸炎をやつた幸子を氣の毒がり、入院から豫後の世話まで一切引受けてやつてくれた。

初めて東京へ出て來たばかりで、東京で生活するといふだけのことにさへまるつきり自信を持てなかつた折だつたので、久武のこの親切がひどく身に染みた。

その夏、事變がはじまり、好況の波に乘る絶好の好機がすぐ眼の前に來かゝつてゐるのに、久武は

祝子の件ですつかり自棄になり、取引も工場の監督も機械の納入も、何もかもおッ放り出して赤坂や新橋に流連荒亡し、てんで商會へ寄りつかなかつた。

幸子は見てゐられなくなつて、久武の代りに工場へ出かけて行つて製作の督促をしにり、規格檢査に立會つたり、註文先と折衝をしたり、この好機から逸脱する危險を切拔けるため眠る眠も合はさずに奮闘した。

幸子の努力のせゐばかりでなく、大きな機運がそこに動いてゐたのだらうが、どうにか落伍しないですんだとホッと息をついた時には、久武の商會は精密機械商の間で押しも押されもしないところまで成上つてゐた。

久武がやうやく瘧をおとし、四ケ月ぶりで蕩兒の歸宅をすると、嫌でも工場の擴張を行はなければ製作の注文に應じ切れぬやうになつてゐた。これが廿六の娘の細腕でやり上げたことゝは到底信じられぬほどだつた。

久武はさすがに感激して、四ケ月の間に幸子が扱つた取引の歩合を精確に計算して可成りな金額を賞與に贈らうとしたが、幸子はキッパリと辭退し、後は久武に任せて自分は以前の傳票係の位置まで引退つてしまつた。

幸子としては、いつかの久武の親切に報いるだけのつもりでやつたことだつたが、久武はさうは釋らず、大眞面目な顔で結婚を申込んだ。

幸子は、馨子や祝子との卑雑な經緯を知りぬいてゐたばかりでなく、久武の自惚と低能ぶりに呆れかへつて、機會ある毎に執拗に迫つてくるのを相手にさへしなかつた。

幸子が眼を閉ぢてゐるのをお禱でもしてゐるのだと思つたらしく、久武も殊勝らしく頭を垂れてゐる。こんなやうすをしながら心の中では何を考へてゐるかも知れたもんぢやないと思ふと片腹痛かつた。

幸子は當り觸りのない口調で切出した。

『方代さん、あたしと結婚して頂けないかしら？……お願ひといふのはこのことだつたの』

久武は呆氣にとられて幸子の顏を見返してゐた。

七

久武は、すぐには乘つて來ずに、探るやうな眼つきで幸子の顏を眺めながら、

『いつたい、どういふんだね、それは？』

幸子は淡泊な口調を變へずに、

『わかり切つたことを訊きかへすもんぢやなくてよ。……當面、こゝにお金が要ることがあるぢやありませんか、そのためよ』

『何を馬鹿なことを！　その爲めに俺がかうしてやつて來てゐるんぢやないか。……時代なことを言ふのはよせよ、氣障だから』

『氣障だといふなら、勝手にさうお思ひになつていゝわ。どう言つたつて同じことでせう、それに違ひないんだから』

久武は、心の奥の感情と闘ふといふ風に、顎を引緊めて沈默してゐたが、震を帶びた聲で、

『要るだけ使つたらいゝぢやないか、そんなつまらないことを言はなくとも』

『あたしのしたいやうにさせてちやうだい。結婚さへしたらそれでいゝでせう。あんたなんかの恩惠を受けるくらゐなら、あたし……』

久武は終まで言はせまいといふ風に、

『よく判つた。……つまり、キツパリすれアいゝんだらう。それなら譯アないぢやないか。借金にして置いて働いて返して貰はう。もつとサツパリしたいんなら、保證人も立てゝ貰ふし利子も拂つて貰ふ』

『いまの月給で精一杯なんですから、その中から借金を返すなんて約束をして見たつて、それア繪空事よ。あたしにしたつて、今以上に生活をみじめにする氣はないんだし』

久武は、突然、手を伸して幸子の兩手を執ると、かうすれば相手の心に訴へかけることが出來るとでもいふやうに、劇しく搖りながら、

『俺の心がわからないのか。よウ、信じてくれよ、お願ひだから』

幸子は久武に手を執らせたまゝ、冷淡に、

『紳士ぶるのはおよしなさい。あなたが欲しいのはあたしの心なんかぢやないんでせう？　だからそれでいゝぢやありませんか。あたしにしたつて普通のお嬢さんぐらゐにはやつてゐるつもりよ。たとへ結婚したつてあたしの心なんかあんたにはあげないわ』

久武は、ビクツと頬を痙攣させると、荒々しく手をひいて、

『いやだ、そんな結婚ならしてもらはなくともいゝ』

どうせ、お芝居なのだらうが、久武のこの出方はちよつと意外だつた。幸子は靜かに受けて、

『嫌ならよしてもいゝわ、誰かほかの人に相談するだけのことだから。……ぢやア、あなたもう歸つてくださらない、あたし仕事があるから』

久武の眼に涙がうかんできた。眼を大きく見開いたまゝ、心を鎭めるやうに息をつめてゐたが、やがて低い聲で、ぽつりと言つた。

『よからう！　仕度金はどのくらゐ？』

『千圓ぢやどうかしら』

悲しみに耐へるといふ風に奥齒を嚙みしめながら、久武が唇の間で答へた。

『いゝとも』

さう言つて、小切手帖を出しかけたが、

『現金の方がいゝだらう。いますぐ屆けさせるから。……それはさうと、一人で大丈夫なのかイ？　もし、人手が要るンなら……』

『いいのよ、葬儀屋さんと二人でなんとかやつつけますわ。お通夜だつてひとりの方がいゝし……。誰も寄越してくれない方が有難いわ。……恐れ入りますけど、お歸りがけに博善社へ電話を掛けて頂けないかしら』

『あゝ、いゝとも』

久武は、帽子を持つて立上りながら何かいひかけたが、結局、無言のまゝ肩を搖つて出て行つた。

間も無く博善社の店員がやつて來た。

四谷郷社のお札配りのやうな袴の裾を引擦つてゐるのが、何かこの場の樣子にそぐはなかつた。

『やはり、佛式でなさいます？』

『いちばん簡單なのはなんでせう』

店員はたまげたやうな顏で訊きかへした。

『簡單、と申しますと？』

八

長い夜が終り東雲の色が窓にさしかける。

柩に映る蠟燭の炎がほの紅くなり、部屋の隅々がぼんやりと明るくなつて來た。

部屋一杯に置き並べた百合や薔薇や蘭の香と線香の匂ひが交り合ひ、空氣は饐えたやうに重苦しく澱んでゐる。

幸子は椅子から立上つて窓をあけた。

そこからピリツとするやうな朝風が吹き込んで來て、ユラユラと蠟燭の炎をゆらめかした。

よく晴れた朝だつた。眼の下のお濠の水に鴨が二三羽浮いてゐ、塘松の梢が朝日の光で赤く染まつてゐた。

何の感慨もない。しんとした無情感が水のやうに胸の奥に沁みとほる。

長崎には先祖の墓があるが、あんなにも東京を愛してゐた兄だつたのだから、やはりゝこの土になる方が氣に入るだらうと思つて、骨は東京へ埋めることにした。

墓地の買入や石碑の据付まで一切博善社に賴み、前金で全部テキパキとかたをつけてしまつた。寺は牛込の光念寺がよからうといふので、讀經に來た僧侶に永代回向料として可成り纏つたものををさめた。

アパートには今迄の支拂をすませ、ほかに掃除代として相當な金を包むと、主人は急に人が違つたやうになつてモオニングを着込んで燒香にやつて來た。

香をひねつて額にあて、いち〳〵あツ、と奇妙な聲を出してから恭しく香爐に投げ入れた。

十一時頃になつて靈柩自動車がやつて來た。

博善社の店員は、今日は黑い背廣を着て腕に喪章を卷いてゐる。いかにも空々しく、それが幸子の怒りをそゝつた。

三人の男達に擔ぎおろされて棺が玄關まで出ると、主人と三人の事務員が殊勝らしい顏でそこに並んでゐた。

柩が靈柩車にをさまり、もう動き出さうといふ頃になつて眞波があたふたとタキシーから降りて來た。幸子が自分のアパートへ書置いた手紙を見て驅けつけて來たのだつた。

眞波は眼ばかりのやうになつて走り寄つて來て、力任せに幸子の手を握つた。

『幸子さん……』

もう眼にいつぱい涙をためてゐるのだつた。幸子はその手を握りかへした。

『よく來てくだすつたわ』

心の優しい、泉のやうな清冽な魂をもつた、かういふひとを一人友達に持つてゐるといふことが何とも忝く、思はず涙をこぼした。

眞波は單純な心を隱さうともせず、どうすれば幸子を慰められるかと焦るやうに、

『あなたと初めて東京で逢ふのが、こんな日だとは思ひもかけなかつたわ』

二人だけでずつと同じ舍室で暮らし、このひとだけが自分の理想だといつもさう思ひつゞけてゐた

その眞波が、かういふ折に驅けつけて來てくれたのは、胸もたぎるやうな嬉しさだつた。

『眞波さん、あなたが來てくださらなかつたら、あたし一人で兄を送るところだつたのよ』

花で埋まつたやうな派手々々しい柩車だが、それを送つて行くのは幸子ひとりなのだと察すると、眞波は胸をうたれたらしく、何も言へなくなつたやうすで低く首を垂れてしまつた。

この清純な友。……尠くともむかしは自分もかうだつた。變り果てた自分の姿が顧みられ、改めてしみじみとした氣持になるのだつた。

二人が乘込むと、靈柩車が靜かに動き出した。

幸子は、見送りの四五人のひとに輕く頭をさげた。

桐ヶ谷の火葬場から歸る頃にはもう陽が薄れかけてゐた。道端の白菊の色が眼に沁みた。

幸子は兄の骨箱を膝の上で抱きながら低い聲でさゝやいた。

『眞波さん、あたしが生きてゐる間、あなた死んぢや嫌や。……あなただけが、……あなただけがあたしの力なのですから。ほんたうに、お願ひしてよ。……なぜ、こんなことを言ふか、いづれわかるでせうけど……』

宣言

一

眞波は自分の部屋の窓際に坐り、喪服の白襟に顎を埋めるやうにしながら、東京へ着いてから今日までの出來事を思ひかへしてゐた。心の波が絶え間もなくうねりかへすやうな落着きのない三日だつた。

火の氣のない應接間でしよんぼりしてゐると、十一時近くになつてやうやく二人が歸つて來た。

馨子は、立つたまゝ素つ氣のない調子で、

『あら、あなたゞつたのね。……先に寢んでゐてくだすつてよかつたのよ』

氣のきかないひとだと言はんばかりだつた。

曉子の方は、應接間の入口に突つ立つて眼の隅からジロリと一瞥をくれると、手に持つた外套を床の上に引摺りながら自分のゐる別棟の方へ行つてしまつた。

伯母の馨子は、寫眞よりはたしかに老けた感がするが、これがと思ふほど瑞々しく、見惚れるほど美しかつた。

眞波はなつかしさに胸を搖られて、自分を東京へ呼んでくれた禮を言はうとすると、馨子は馴れ切つた科でおさへて、

『今夜は疲れてゐますからお話は明日にしてちやうだい』

といつて、小間使に二階の部屋へ案内させた。

窓の二つある十五疊ばかりの洋間で、こゝにも火の氣がなかつた。

久しく使はなかつたと見えて、寢臺や椅子を蔽つてある白い布の上に薄すらと埃がたまつてゐた。

ひとを待ち設けてゐたやうなやうすはどこにもなかつた。

眞波は服を脱いで寢卷に着換へかけたが、興奮してとてもすぐには眠れさうにないので、書机の埃を拂つて院長や尼姉たちに便を書きかけたが、濕つぽい手紙になりさうなのでそれもやめてしまつた。

ひどくガランとした部屋の中にひとり坐つて、冷々とした夜氣を身に染めながら縋りつくやうな想ひで幸子のことを考へた。

ズバ抜けて頭のいゝ、意志の强い、サツパリとした氣性の娘だつた。

女學部を卒業すると、眞波は學院へ殘つて幼稚部の保姆になり、幸子は長崎で速記や英文タイプの勉强をし、それから東京へ出て行つた。別れてから四年になるが、二人の心には岩の下ゆく細い流れのやうなものがひとすぢ通つてゐて、途切れるせきもなく月に二度ぐらゐづつ心のこもつた便りをし合つた。

この淋々たる都會の大海原の中に、幸子の姿が堅固な巖のやうにそゝり立つてゐる。そこにさへ行けばガツシリと抱き寄せられ、身も心も憩はせることが出來るはずだつた。

次の朝、朝食をすませると、匆々に幸子のアパートに行き、置手紙を見て驚いてそちらへ驅けつけると、まさに靈柩車が出發しようとしてゐるところだつた。

幸子は悲しさうなやうすもなく、しつかりと顎をひいて靈柩車の傍に立つてゐた。

四年逢はずにゐるうちに、表情の中に辛辣なものが加はり、どこと言つてはつきり指すことは出來ないが、何か猛々しくて、まるで違ふひとのやうな感じだつた。

幸子と二人だけで清次郎を送り、火葬場の待合室の片隅で二人つきりでお骨が上るのを待つてゐた。

お葬式もまた二人つきりだつた。乏しい冬の陽が射し込む廣い本堂で身を寄せ合ふやうにして讀經を聞いた。

これが、眞波が東京に着いた次の日の出來事だつた。

眞波は心寒くなつて思はず襟を引き合せた。たやすく心の寄り合へぬ大都會の生活の全景を一瞥のうちに眺めわたしたやうな氣がした。

扉を叩いて、伯母が入つてきた。

眞波が喪服のまゝでゐるのを見ると、美しく剃込んだ眉を露骨に顰めて、

『まだそんな恰好をしていらしたの。お招きがあるといふのに、いやな方ね。早くお召換へをしてち

やうだい。今日はあなたにだつて大切な日なんでせう』

二

眞波は驚いて伯母の顏を見あげた。

昨日の午前、幸子のところへ逢ひに行く心せはしい出がけに、伯母が食堂の出口で、明晩お客さまがありますからそのおつもりでね、といつた。

心はすつかり幸子の方へ飛んでゐたし、それからのうちつゞく心の擾亂のために正直なところそんなことを思つて見る暇もなかつた。

伯母にさう言はれたので、客があるといふことだけはやつと思ひ出したが、今日のお招きが自分にとつてなぜ大切なのか、その說明は聞いた覺えがなかつた。

戶迷つたやうな顏をしてゐるのを馨子は一種冷酷な眼つきで見かへしながら、

『どうしてそんな吃驚したやうな顏をなさるの。昨日の朝、ちやんと申しあげて置いたはずだわ、お忘れになつて？』

『忘れるなんて、そんなこと……でも、大切な日つてなんのことだかわからなかつたものですから、それで……』

どうしたか馨子は、このひとがと思はれるやうな激昂の仕方で、

『それは、手紙でも申しあげたつもりよ。お讀みにならなかつた筈はないでせう。そんな恍け方をするのはお止しなさい。ずゐぶん利いた風ね』

すぐ諒解した。

（立派な青年が、あなたが歸るのを待つてゐます）

伯母が手紙の終りに書いて來たそのことだつた。眞波の心をあまり愉快でない感情が掠めて行つた。忘れてゐたのはこちらが惡かつたかも知れないけれど、それにしても伯母のこの叱責の仕方はすこし常識外れだつた。いかに伯母でもかうまで言はれるわけはなかつた。

『あたくしが惡うございましたわ。でも、なぜこんなにまでお叱り受けなければならないのかしら』

眞波がさう言ふと、馨子はチラと狼狽へたやうすを見せて、

『さうね、妙だつたわ。昨夜よく寢めなかつたので、今日はあまりご機嫌がよくないのよ、氣になさらないでちやうだい』

眞波は微笑して見せた。

『そんなことでしたのなら、もつとよく話してきかせてくだすつてもよろしかつたのですわ。あたくしにしたつて、大事件なんですもの』

『驚かせてあげるつもりだつたのよ』

取繕はうとしてゐることがはつきりとわかつた。

眞波は、氣にしまいと努力しながら、うちとけた調子でいつた。

『もう、充分驚いてゐますわ』

馨子はこちらへ寄つて來て眞波と長椅子に並んで掛けると、すこし改まつた口調になつて、

『ねえ、眞波さん、あなたはあたしにとつてかけがへのない大切なひとなのよ』

眞波は、思はず馨子の顏を見かへした。

馨子は、唇の端にはつきりした憂鬱な微笑を泛べながら、

『……あたしは不幸な結婚をして、その方でもさんざんでした。曉子はあんな冷酷なひとだし、それに、あたしたちの生活環境の中には手のつけられない腐蝕性のやうなものがあつて、自分で自分を耗り減らすやうなことばかりしてゐるし、あたしの生活ときたら、ちよつと說明の出來ないほど悲慘なのよ。家庭もなければ愛もない、あたしたちのやうな人間は何を力に生きてゆけばいゝのかと思つて、長い間どんなに惱んだか知れないの』

馨子は、力めたやうな快活な調子で、

『あなたにあたしの傍へ來ていたゞいたのはそのためだつたのよ、眞波さん。……あたしが生きてゆくメドをあなたに授けて貰はうと思つて……』

三

馨子は、自分のいつた言葉の效果を確めるやうにチラと眞波の顏を眺めてから、

『あなただけが、あたしの希望なのよ、生きて行く力だといつてもいゝわ。氣障なことをいふと思はないでちやうだい。たとへどう聞えたつて、それはほんたうのことにちがひないんですけど……』

眞波は言葉を挾まずに聞いてゐた。

馨子のはなし方には雄辯術の魅力といふやうなものがあつた。

なぜかしら馨子はひどく感じやすくなつてゐる風で、追々感情のこもつた顫へを帶びた聲になつて、

『あたしの氣持を告白するにしても、こんな感慨めかしいことまでいふつもりはなかつたの。……眞波さん、あなたももう氣がついてゐるでせう。あたし今日なんだか妙ね。……それはあたしにもわかつてゐます。……こんなのをいつたい何といふの。感傷的とでもいふのでせうか？……まさかね、さうまでとは思はれないけど、だいたい、それに近いやうだわ。……心の作用といふのは、ほんたうに不思議なものね。正直なところうち明けますけど、あたしあなたにいふ言葉をちやんと用意してあつたの。……ところで、口を切りだすと、思つてもゐない言葉があとからあとから飛び出して來てどうにも始末におへないの』

心の弱さを隱し切れなかつたのが情ないといふ風にちよつと微笑して、

『……でも、結句、そのはうがよかつた。いま言つたことはみなあたしの本音だと思つてくだすつていゝわ』

優しい心などあるのかと思はれるやうに、いつも理智で心を鎧つてゐる冷酷な伯母が、こんな感情の亂れを見せるなどとは思ひもかけなかつた。そんなやうすを見ると、眞波は今迄の不快も忘れてむかし伯母に感じてゐた愛情がまた心にたち戻つて來るやうな氣がした。

『伯母さま、寄宿舍のあたくしの机の上にあなたのお寫眞が銀の枠に入れて置いてありましたの。……あなたのお顏とあたしの顏と向き合ふやうな位置になつてゐますので、あたくしが机から顏をあげると、いつでもあなたのお顏を見ることができるのです。……あのお寫眞をあたくしに送つてくだすつたのはもう七年も前ですわね……。この七年の間、あたくしは朝も晩もあなたのお顏と向き合つて暮してゐたのですが、その間ぢゆう、あたくし何を考へてゐたかご存じですかしら?』

馨子は熱情を失つたひとのやうな疲れた色を見せて、

『えゝえゝ、よくわかるわ』

早口でさう言つて、先刻と打つて變つたお義理のやうな口調で、

『要するに、あたしは誰かにしつかり頼られたり、ありつたけの愛情を誰かに注いだりしたくなるさういふ年齢になつたのだと思ひますわ。……眞波さん、あなた、あたしを慰めてくださることができるかしら』

昂まりかけてゐた感情をスルリと外された佗びしさを感じながら眞波は低く呟いた。

『あたしで出來ることでしたら、伯母さま』

『よく判つてくだすつて有難いわ』

懶さうな身ぶりをしながら、

『今晩おいでになるのは戸山冬彦といふ方なの。お父さまは長い間蘭の特殊な研究をしていらした學者で、お亡なりになつてからその方が熱海でお父さまの研究を引繼いでやつていらつしやるの。あたしの申しあげられるのはこの位のことよ。あとはあなたがごらんになる方がほんたうね。あたしとしては、あの方ならほんたうにあなたをしあはせにしてくだされる方だと思ひますけど、でもこれはあたしの感想よ。あまり尊重してくださらなくともいゝわ』

さう言つて立ち上りながら、

『今晩はお和服になさいね。でも、是非ともといふわけではないのよ』

四

遠い家並の上に冬の入りがけによくある、びつくりするやうな大きな落日が沈みかけてゐた。空が燃え、殘陽の餘沫が英吉利芝の廣い庭にうつすらと朱を流す。

花圃のダリヤや唐撫子などの秋の花々がかじかんだやうにひと塊りになつて寒々と首を垂れ、下草の上に沈鬱な長い影をひいてゐる。

眞波は外廊の硝子扉を開けて庭の隅にあるハンモック椅子の方へ歩いて行つた。

久しく着たことがなかつた和服がしつくりと身につかず、帶が胸を切なくしめつけて氣持を沈ませた。

眞波はハンモツク椅子の中に腰を沈めて、そつと身體を搖すりながら、爪先のところまで這寄つて來てゐる花々の影をぼんやりと瞶めてゐた。寒がりの落葉がひとつ吹き寄せられてきて、あるかなしかの風の中でよろけ廻つてゐる。

考へなければならないことが澤山あるやうな氣がするのに、心がうかうかとしてゐてひどく頼りなかつた。

はじめての長旅の氣疲れ。東京といふものに對する絶え間のない不安と危惧。雨空を灼く大都會の壯大な風景を一瞥したときの激しい興奮。馴染のない寢臺の寢心地の惡さ。靈柩車の傍に立つてゐる幸子を見たときの激動。二人だけの葬式の侘しさ。……それから、自分を幸福にするために突然前觸れもなしに自分の前に現はれて來ようとしてゐる戸山冬彦。

蔦のからんだもの靜かな學院の塀の中でばかり暮してゐた溫和な眞波の心では、とても處理しかねるほどの重荷だつた。

眞波の心は唐突な境遇の急變に逢つてうろうろと狼狽へる。急流に浮んだ木の葉のやうに引き廻され、浮き沈みし、思つてもゐない方へあてどもなく押し流されてゐるやうな不安な氣持だつた。

眞波は何ともつかぬ溜息をつく。心はいつか島原の平和な風土の中へ戻つてゆく。

十七年もの長い間眞波を暖め劬つてくれたあの優しい人情が遙か思ひも掛け渡せぬ遠いところにあるかと思ふと、もうそれだけでも遣瀬ない孤獨の情に魂を碎かれるやうな思ひがする。

この時、突然眞波の胸の中にほの溫かい思ひが雪崩れこんできた。

（あの元氣のいゝひとはどうしたかしら？）

殆どまる一晝夜切れ間もなく話し續けてきたあの質朴な青年。

霧雨に濡れながら肩を聳やかすやうにして丸ビルの角を曲つて見えなくなつてしまつた青年の後姿が、はつきりと心の視覺に灼きついてゐる。

いつかまた逢ふよすがに、せめて名前だけでもと思つて雨の中へ走り出したとり逆上せたやうな自分の姿を、新しい羞恥の感情で思ひかへす。

急にうらめしくなつてきた。

（名前ぐらゐ言つて行つたらどうなのかしら……。たぶん、あのひとはあたしなんかに會ひたいとも思はないので、わざとあんなことしたのだわ）

でも、どうしてもさうは思ひたくなかつた。

眞波のもう一つの心がそれをうち消す。

（あの呑氣なひとがそんな複雜なことをする筈がない。ぼんやりしてゐて大切なことを忘れて行つたのよ。ほんたうに仕樣のない呑氣屋さんだこと！）

人の氣配がするのでフト顔をあげて見ると、馨子の姪の曉子が老人臭く兩手を後手に組んで、すぐそばに突つ立つてジロジロと眞波を眺めてゐた。

五

美しいと言へば言へるのだらうが、鼻と顎のしやくれた愛想氣のない顔を俯向けて、珍しい動物でも眺めるやうにジロジロと眞波の顔を眺めてゐる。

底のすわつた大きな烏眼がしんねりと眞波の眼に絡みついていつまでも離さない。勢ひ睨み合ふやうなかたちになる。

もう四日も同じ邸に住みながらまだ初對面の挨拶もしてゐない。はじめて東京に着いた夜、應接間の入口に突つ立つて底意地の惡さうな眼つきでひと睨みくれられた覺えはあるが、二人だけで向き合ふのはこれが最初である。

人嫌ひといふのか、四間ほどある別棟の洋館でひとりで暮してゐるといふ、この一風變つた娘のことは眞波も伯母から聞いて知つてゐたが、こんな風に遠慮のない眼つきで眺められると、すつかり氣怯れがしてどう挨拶していゝのかわからなくなつた。

眞波は曖昧な微笑を泛べて相手の顔を見かへしてゐると、曉子はしつこく眞波の顔を瞶めたまゝ、ぶすつとした口調で、

『お美しいわ』

と、いつた。

この不意打ちに、眞波は一層へどもどしてハンモック椅子から立ち上りかけると、曉子は老成くさいひどく落着いた聲で、

『もうすこしさうしてゐてあたしに眺めさせてちようだい。……もう一分だけ』

眞波は赧くなつて顔を俯向けかけると、曉子は命令するやうに、

『動いちやいけない、つて言つてるのに！　顔をおあげなさいよ』

駄々ッ子じみた口調でなく、否應なしに自分の意思に從はせようとするやうな嚴しい調子だつた。

眞波は閉口して言はれた通りに顔をあげると、曉子はいはゞ穴のあかんばかりといふ風に眺めてから、

『ほんたうにお美しいわね。……これア問題だわ』

と譯のわからないことを呟きながら、ノソ〳〵と眞波の方へ近づいて來ながら、

『あたし、曉子よ』

眞波は、

『あたし、眞波ですの』

さう言つて、あわてゝその後へ、

『どうぞ、よろしく』

と、つけ加へてもう一度緩くなつた。

もつと上手なことが言へる筈なのだが、すつかり氣壓されたやうになつてうまい言葉が舌に乘つてこない。

どうぞよろしくなんて如何にも間抜けた挨拶だと思つて、すつかり氣が滅入つてしまつた。

曉子は、

『ふむ、よろしくか』

無頓著なやうすでハンモック椅子に腰をおろすと、うるさく身體を搖すりながら、

『ねえ、これでお近づきになつたわけね、さうぢやなくつて？』

『えゝ、さうですわ』

今度こそと思つて精いつぱいの元氣でやつてのけた。

『お近づきになれてうれしいわ』

曉子は、ふむと鼻で笑つて、

『そんなこと、今からわかるもんですか』

眼の隅からジロリと斜に睨めあげて、

『尤も、あなたの出樣ひとつよ。……ともかく、手強い相手だといふことだけは覺えてゐてくだすつていゝわ』

六

何を言ひ出すつもりなんだらうと思つて、眞波は曉子の顏を見かへした。

曉子は、たつたいま挑みかゝるやうなことを言つたのも忘れたやうに以前の沈鬱な表情になつて、

『そんな顏をなさらなくともいゝのよ。たいして意味のあることを言つたわけぢやないんですから。……女同士なんかどうせ敵のやうなものでせう。どつちみち味方ぢやないわね。だから、初對面のとき、いつもこんな工合にごつんとひとつやつて置くの。これがあたしのやり方なの』

眞波は、今迄尼姉たちの單純な言ひ廻しにしか馴れてゐなかつたので、深いところに何か底意のありさうなこの複雜な修辭をどう受けとめていゝかわからなかつた。

それにしても、やつと十八になつたばかりの、自分よりも六つも歲下の娘のこんな過度な敏感さを見るのはあまりいゝ氣持はしなかつた。

眞波は笑ひながら、

『ずゐぶん御用意がいゝのね』

やりかへしてくるのかと思ひのほか、曉子は懶さうに身體を搖りながら、

『さうよ、なんでも用心深くやるに限るのよ。さもなければ殺されてしまふから……』

何か考へるやうにちよつと沈默してから、歌ふやうな調子で、いつた。

『……風にさゆらぐ葦に倚る勿れ。また信頼を置く勿れ。なべて肉は草の如く、その榮華、野の花の如く移り行けばなり……』

これは眞波が島原の修院にゐるとき、朝夕いつも親しんでゐた「基督に倣ひて」の中の章句だつた。この娘の口からこんな言葉が出てくるのは意外だつたので、眞波は思はず微笑した。

唇の端に小波が立つたほどのちよつとした微笑だつたが、曉子は眼ざとくすぐ見てとつて、

『ふむ、いま笑つたわね』

眞波は素直に詫びた。

『ごめんなさい。……でも、笑つたのは懐かしかつたせゐなのよ。いまの章句はあたしの子守唄のやうなものでしたから、それで……』

曉子は、まるで聞いてゐなかつたやうに、

『笑ふのは勝手だけど、いづれきつと思ひ當ることがあるわ。その時、今のやうに笑へるなら大したもんだわね。あたし喝采を送つてあげてよ、ヴラヴオ、ヴラヴオつて……』

眞波の心に漠然とした不安が蔽ひかゝつてきた。

曉子の複雜な言ひ廻しの中に何か底意があると感じたのは間違ひではなかつた。曉子は、言外にそれとなく何か自分に言つてきかせてゐる。

（何かあるんだわ。……たぶん、今夜の晩餐のことだらうけど……）

放つて置けないやうな氣もするし、自分の方からそれに觸れるのも恐ろしかつた。

沈んだ顔つきになつて默り込んでゐると、曉子は靴の爪先で小石を蹴りながら、

『あなた、戸山冬彦つて人にはまだ會つてゐない筈ね』

眞波の心がキュッとちぢこまつた。

『お名前を伺つたのも今日が初めてなの』

『寫眞では？』

『まるつきり……』

『豫備知識を與へてあげませうか』

眞波は返事をしなかつた。

曉子は急に浮き浮きしたやうすになつて、

『それはね、たいへんな美男子なのよ』

といふと、手を拍ち合せながら、

『アドニス！……さうよ、確にアドニスといつていゝわ。あなたもずば抜けてお美しいし、これアすぐ戀愛がはじまるわね、あたし保證してもいゝわ』

晩餐

一

小間使が靜かに入つて來て、戸山さまがお見えになりました、と告げた。

冬彦の來かたが少し早過ぎた。眞波を調伏して來たばかりのところで、なんとなく氣が沈んですぐ會ふ氣にはなれなかつた。

馨子は、考へるふりをしてから、

『しばらくあちらでお待ち願つてちやうだい。いまお客さまだとでもいつてね』

部屋の隅々が暮れてきて、家具や花瓶の花の色が蒼い翳の中に沈み、海の底のやうな寂然とした氣配が部屋を占めてゐる。

馨子はソファで身動きもせずに取りとめのない物思ひに耽つてゐた。

馨子がはじめて戸山冬彦を見たのは一昨年の春ごろのことだつた。

ブラジル大使の新任のレセプションに、冬彦は父の代理で出席してゐた。

その頃はまだ農科の學生で、學生服をキチンと着て落着かないやうすで客間の隅の椅子でかしこま

つてゐた。

目立たないやうつゝましく片隅に引つこんでゐたので、その存在に氣がつかずにすんでしまふ筈だつたのに、ちよつとした偶然が二人を近づけた。

その夜は祝子も一緒だつた。

祝子はリオ・デ・ヂヤネイロで舞踊の公演をしたとき、今度大使になつて來た人にたいへん世話になつたことがあるので、そのお禮を述べるためだつた。

大使夫人は極く氣のいゝ淡泊なひとで、馨子と祝子を土壇のお茶の卓の方へ案内しながら冬彦の前を通りかゝり、窮屈さうに掛けてゐる冬彦を見ると、その前に足をとめ、愛想よく双方へ笑ひかけながら、

『この立派な青年をご紹介しませう。……お父さまは、蘭の特別な研究をしていらつしやる篤實な學者でもう二度もブラジルへいらしたことがあつて、日本でよりむしろあたくしどもの國の方で有名なんです。お父さまがご病氣なので今日はその代理でご挨拶に來てくださいました。……フユヒコ・トヤマ』

その青年は惡びれないやうすで立上つて輕く頭をさげた。

馨子は、挨拶をかへさうとしたが心がひどく躍つて咄嗟に言葉が出てこなかつた。ひどい慌て方をしたと見えて、祝子が可笑しがつて馨子の脇腹を突いた。

それほど冬彦は美しかつた。

すぐれた叡智と理性をあらはす廣い額の下に煙つたやうな熱情的な眼があつて、黒い瞳の沼の上に敏感な長い睫毛がしつとりと影を落してゐる。

きちんと整頓された心性をあらはす驚くほどかたちのいゝ鼻。唇は適度に引結ばれてまだひとに觸れられぬ素朴な野の花を想はせた。

それにしても、この顔の輪廓の端麗さは！　人間の血がまだ神話の神とまじり合つてゐた頃の、あのあえかにも氣高い美の理想ともいふべき完全な調和を示してゐた。まさに天上の美だつた。

この方圖のない美しさは冷靜な馨子の心をも徹底的に攪亂させるほどの力を持つてゐた。

馨子の心はすさまじい勢ひで迸出する激情の噴水にいちど高く押しあげられ、間もなくどすんと落下した。

馨子の胸の奥を不安に似た戰慄が電光のやうに鋭く刺し貫いた。

馨子は、いちど眞赧に顔を染め、すぐ眞蒼になつた。

馨子はよろめくやうな聲で、いつた。

『あたくし……三宅馨子と申しますの』

それだけいふのがやつとの思ひだつた。

二

馨子は、じぶんは戸山冬彦の美しさに打たれたのに過ぎないと可成り永い間さう思ひ込んでゐた。

世俗趣味と、さまざまな心理の放埒の末、自分の心はすつかり涸渇して戀愛などといふ青つちよろい情緒が自分の心をときめかすやうなことがあらうとも考へてゐなかつた。

ところで、心の作用といふものは、馨子が小馬鹿にしてゐるやうなそんな單純なものでないといふことを、間もなく骨身にこたへるほど思ひ知らされた。

ある日、外出するつもりで階段を降りかけてゐたとき、冬彦への激しい感情が思ひもかけない唐突さで襲ひかゝつて來た。

遣瀬ないとも切ないともいひやうのない、胸を絞めつけるやうな激しい情緒を支へ切れなくなつて、階段の欄干にすがつて泣き出してしまつた。

涙はすぐをさまつたが、一度心の岸邊に打ちよせた情熱の波はなかなかをさまらぬばかりか、追々沸り立つて手のつけられないやうすになつて行つた。

馨子は外出を思ひきつて自分の部屋へ戻り、冬彦に長い手紙を書き出した。

もちろん冬彦に送らうなどといふのではなく、この突然な激情に始末をつけるためだつたので、氣持の平安がくるまで根くらべのやうにいつまでも書きつゞけた。夜中近くなつて逆出するだけのもの

が逃出してしまふと、すこし心が鎭まつてきた。

大判用罫紙の裏表に五枚書いた長い手紙が出來あがつた。

破り棄てようか取つて置かうかとさんざ迷つたすゑ、未練の方が勝つてとつて置くことにきめた。

馨子が冬彦に祕かな手紙を書く習慣はこんな風にして始まつた。

大判用罫紙ではあまりザツカケないと思つて、革表紙の大きな日記帖にかへ、知合ひの工藝家に頼んで鍵がかゝるやうに拵へてもらつた。

寢つけなくなると、夜中でも夜明けでも起き出して幾時間も書きつゞけた。

冬彦に對する感情の昂りは生優しいものでなく、かういふ狀態が殆ど毎日のやうにやつて來たので、春から夏までの間に五百頁もある日記帖を一冊書きつぶしてしまつた。

冬彦との再會は、思ひがけない見せかけでやつて來た。

ある夏の暑い朝、小間使が名刺を持つて馨子の部屋へ入つて來た。

戸山泰二と刷つた父の名だけを消して、その傍に小さく冬彦と自分の名を書きつけ、

（いつぞや、ブラジル大使のレセプションで御紹介を受けました戸山でございますが、少々お願ひがあつて參上いたしました）

と、几帳面な字で書いてあつた。

馨子は、貧血する前のあの頼りない氣持を感じながら名刺を眺めてゐた。

小間使が出て行くと心を鎭めるために十分ばかり庭を眺め、それからのろのろした調子で階下へ降りて行つた。

馨子が應接間へ入つて行くと冬彦はすぐ用件を切り出した。

父の時代から熱海の町外れにある蘭の溫室が、地權の移轉のため急いでよそへ移さなければならぬ事情になつてゐるのだが、隣があなたの所有地だといふことを伺つたので、適當な土地が見つかるまで溫室を置くだけの地面をお貸し願へまいかといふのだつた。

馨子は愼重な顏つきで冬彦の話を聞くふりをしてゐた。

底知れぬ陶醉の情に心を溺らせつゞけてゐたので、何も聞いてたわけではなかつた。冬彦の用件を了解したのはそれからずつと後のことだつた。

三

馨子は激しい動悸を制へるために應接間の扉の把手に手をかけたまゝちよつと呼吸をとめた。

この二年の間、これに手をかけるたびに、いつかの夏の朝に味はつた思ひがけない再會のあの眼もくらむやうな歡喜の情をその時のまゝに思ひ出すのである。

冬彦は煖爐から遠い隅の方の椅子に兩膝をくつゝけてキチンと掛けてゐて、馨子が入つてゆくといつものやうに機械的に立上つて目禮をした。

二人の眼が瞬間凝視しあつた。

馨子は冬彦の深い瞳を瞶めながら、自分の身體が波に搖られてゐるやうな頼りなさを感じた。

冬彦は淀みのない眼差で靜かに馨子の眼を見かへしてゐる。

（あたしが、こんなにも愛してゐるのに、このひとはあたしのことなどちつともかんがへてゐてくれない）

馨子の心はいつものやうにやる瀬ない感情にひしがれて、うらうらと萎れかゝつてきた。

『お待たせしたわ。いままでお客さまだつたの』

冬彦は美しい眼元をほんのりと微笑ませながら、

『僕がお伺ひするときは、いつもお客さまですね。すぐお目にかゝれたことは一度もありませんでした』

（それはね、あなたに逢ふ前に氣持をしづめる必要があるからなのよ、冬彦さん。さもないと、何をいひ出すか知れないから……）

馨子は考へるふりをしながら、

『さうでしたかしら、よく覺えてゐないけど……』

冬彦がこんなことを覺えてゐてくれたのがうれしかつた。

『では、今度からみンな追ひかへしツちまふ。きつと待たせないやうにするわ』

『そんなことを仰言つたつてすぐ忘れてしまふんだから當にならない』

『だいじやうぶ。信用してくれていゝわ』

冬彦と語り合ふときはいつも友人同志の自然な調子でばかりやつて來た。

冬彦にたいする激しい戀情は誰にも覗かれぬ心の奥深いところへおし隱し、そのひとの前ではどんな微かなときめきもそぶりに表したことがなかつた。

冬彦へのひそかな戀文を毎日日記帳へ書きつける習慣は今もまだつゞいてゐて、逢つた日の物足らなさや、もどかしさや、口に出せなかつた眞情のありつたけを少女のやうな純眞さで心ゆくまで書きつけてわづかに心やりにする。

二年の間のこのあけくれは、馨子にとつてもすこし辛すぎた。

見ず知らずの娘へ冬彦を渡してしまふのは、どうあつても我慢がならない。眞波を島原から呼びよせて冬彦と結婚させようといふ思ひつきは冬彦をいつまでも自分の手近なところに置きたいといふねがひのほかに、この切なさをいくぶんでも輕くしたいといふ些か矛盾した氣持もたしかに含まれてゐた。その方が一層精神的な魅力を深く味はふことが出來、この苦しい戀情を平和な親族的な慈愛に置きかへることが出來る……。

自分の役割はいかにも雅量のある立派なものゝやうに考へられ、それを思ひついた時は嬉しさのあまり涙ぐみさへした。

馨子は霞むやうな思ひで間もなく自分から離れてゆくこの美しい青年の顔を眺めてゐた。

冬彦の愛情はやがて眞波にだけ注がれ、自分はその娘の義理の伯母といふだけの位置へ追ひ退けられてしまふ。その時になつて、眞波を嫉妬せずにすむだらうか。その氣持はいまからほのめきかけてゐる。

眞波はたしかにすこし美しすぎた。少くとも寫眞を通して想像してゐたより遙に美しかつた。

應接間で初めて眞波を見た時の自分の狼狽ぶり。それから今日、眞波と向き合つてゐる間ぢゆう自分の心は手に負へない嫉ましさの感情で絶えずたけり立つてゐた……。

馨子は心をおさへながら靜に切り出した。

『今夜、あなたを一眼で逆上がらせるやうな美しい女性を紹介してあげてよ』

四

覺られてはならないので出來るだけ、去り氣なく話を進めてゆく必要があつた。

馨子は、淡泊な口調でいひ足した。

『それはね、ほんたうにびつくりするほど美しい女性なのよ。あなたの驚く顏をよく見てゐてあげるわ』

冬彦を眞波に近づけたいと思ふ一方さうさせたくない氣持もはつきりと働いてゐるので、馨子の心

はひどい相剋の中で喘いだ。

（今のは冗談よ、あなたを擔いであげたの）

今ならまだ誤魔化せる。思つてもゐないうちにさう口走りさうで、それと闘ふのに一生懸命だつた。

そんなことをしたら敏感な冬彦に自分の心を觀破られてしまふ。乘りかゝつた勢ひで計畫した通りにやつて退けるほかはなかつた。

『もつとくはしく聞きたくはない？』

『いゝえ、格別』

『今のうちせいぜい落着いていらつしやい。どうしたつてあとで慌てるに極つてゐるんだから』

冬彦は沈んだやうすをしながら、言葉だけは輕い調子で、

『油斷のならないことになつてきた。そんな美しいのだとすると、今のうちにしつかり性根を据ゑて置かなくてはなりませんね、迷ひ込まないやうに。……いつたい、それはどういふお嬢さまなんです』

馨子は惡戲つぽく笑つて、

『そろそろ聞きたくなつた。……それはね、あたしの義理の姪なのよ。あたしの死んだ兄のお嫁さんの妹……。ちよつとむづかしいわね。嚥み込めて！』

『ほう、そんな方がいらしつたのですか。今まで一度も聞いたことがなかつた』

『えゝ、さうなの。あなたのやうなひとを見せるとたいへんなことになるから』

『おやおや』

『何がおやおやなもんですか。あなたのやうな美しすぎるひとは、女にとつてはやはり抵抗し難い敵よ。いちどあなたに逢はせたらひとツ堪りもないでせうから、それで今まで隠して置いたのよ』

冬彦はお義理のやうに眼だけで笑つて、

『その方を、今晩、僕に紹介なさらうといふのは、どういふ思ひつきによることなのですか。……あなたつてひとは毎日考へが變るんだから、交際つてゆく方の頼りなさつたらありはしない。僕だつて今まで幾度はぐらかされたか知れません』

冬彦は何か言ひかけてゐる。何を言はうとしてゐるか馨子にはよく判つた。祝子の當ずつぽうはうまく當つた。

（冬彦は、ひよつとするとあたしの心を感じてゐてくれる……）

心にドツと逆波が立ち、もうすこしで椅子の方へよろけるところだつた。……やうやくの思ひで喰ひとめた。死ぬより辛い一瞬だつた。

冬彦は急に堰が切れたやうなやうすになつて、

『あなたはほんたうに怖い。冷淡なうへにあまり聰明すぎるんだから。あなたと話してゐると愉しいより辛い方がよけいなんです』

これ以上言はせるととてもこちらが支へ切れさうになかつた。

馨子はいつもの冷たすぎる眼差を拵へて、

『どうぞ、何を言ひ出す』

すぐ、調子をやはらげて、

『なぜ紹介する氣になつたかと申しますとね、思ひ切つて眞波をあなたのお嫁さんにあげてしまはうと考へたからなの。……つまり、あたしがあなたの義理のママになるといふわけなの。この思ひつきはさう惡くないでせう。贊成なさいね、いゝママになつてあげますから』

冬彦の眼の中でチラと炎のやうなものが燃え、そしてすぐ死んだやうな色になつた。

五

眞波と冬彦を殊更並んで坐らせた。

曉子を冬彦の正面に掛けさせ、三人の顏を一と眼で見渡せるやうに自分の席は、食卓の長い方の端に置いた。

眞波と冬彦が眞正面に向き合ふ緊張から逃れさせ、氣持を弛めてゐる間の伴りのない表情を二人の顏の中から讀み取らうとする計畫だつた。

（かうさへして置けば、曉子の表情だつて看て取れるし……）

ところで曉子の方からすれば、冬彦と馨子が對角線になつてゐるので、二人の感情の動きをつくづ

くと觀察出來るわけだつた。

こんな工合にしてともかく晩餐が始まつた。

三人の表情に絶えず注意を拂ふといふことは、いさやつて見ると思ひのほかに厄介な仕事だつた。かういふ狀況を三人に感づかせないためには、いつも自然らしい會話を心がけてゐなければならず、食べ物を取り分けてやつたり飲み物に氣をつけてやつたりしながら、その間でさり氣なく三人の顏を戍つてゐなくてはならない。

馨子は緊張のあまり平和な顏ばかりしてゐられなくなつた。

自分でもすぐ氣がついて表情を解きほぐすのだが、いつの間にかまた油斷のなさすぎる嶮しい顏つきになつてゐる。

馨子の焦だちは思ひもかけないこの煩さい狀況のせゐばかりではなく、冬彦の眞波に對する愛想のよさも與つてその原因になつてゐた。曉子は曉子で例の通り突飛なことをいひ出しては馨子を惱ませた。

叔母さまなどといふ言葉を滅多に口から出さない曉子が、今夜に限つて妙に親しげに、叔母さま、叔母さまと絡みついて鬱陶しくてしやうがなかつた。

馨子の不機嫌に關らず、晩餐はたいへん樂しげに進んで行つた。

ちやうどジエリーにした鷄肉が出たところで、小間使が四人のワイン・グラスに白葡萄酒を注いで

廻つてゐた。

冬彦はいつになく熱した口調で、眞波に自分が栽培してゐる蘭の變種の話をしてゐた。

馨子と二人でゐた時のあの沈鬱なやうすはどこにもなく、浮き浮きした、輕過ぎるともいへるやうなやうすで喋舌りつゞけ、言葉だけで說明がしにくゝなると、眞波の方へ身體を倒して卓布の上に指で圖を描いて見せる。

眞波も冬彦の蘭の話がたいへん興味を惹いたらしく、花のかたちをよく見るために食卓に顏を近づける。二人の頭髮が食卓の端のところで觸れ合つたり離れたりする。そのたびに馨子は何ともいひやうのない辛い思ひをするのだつた。

冬彦は馨子が取り分けてやつた鷄肉の皿を無意識に傍へ押し退けて、

『……千八百年代の蘭の研究に對する熱狂のしかたはまつたくたいへんなものだつたんですね。一八六二年には、ブランソレリオ・カトレアのやうに三屬交配種まであらはれた位なんです。……一方では、世界各地の蕃地で未知の蘭花植物を發見するためにたくさんの探檢員が派遣されました。ボヘミヤのレツツルなどは一生殆ど南米の各地で……』

馨子がさうしまいと思つてゐるうちに、言葉がひとりでに口から飛び出した。

『ずゐぶんたいへんだつたのね。でも、お二人ともすこし召しあがつたらどう。それぢや蘭だつてお腹を空してしまふわ』

上手にいつたつもりだつたのだが、馨子のいひ廻しにどんな生な語調があつたのか、曉子は皿の上に顔を伏せるとクスリと笑つた。

六

曉子の意味あり氣な忍び笑ひはたしかに馨子の虚を衝いた。

自分では意識しなかつたが、二人に言ひかけた言葉の中にはたしかに度を超えた辛辣な調子が含まれてゐたのにちがひない。

感情をキチンと型付し奥深いところへしまひこんで、どんなほのかな翳さへも他人に見せないことを誇りにしてきたのに眞波に對する嫉妬を曉子にまで覺られるやうな取亂しかたをしてゐたのかと思ふと、身を切られるやうな屈辱を感じた。

いつも自分を高く支へ、どんなときでも低めることをしなかつた馨子の自尊心と貴族性は、冬彦に逢ふやうになつてからいつの間にか尻腰がなくなり、だらしなくズリ下つてゐた。今夜の失敗はまさにそのせゐだつた。

（あたしがあんな小娘を嫉妬する）

この自覺は我慢なりかねた。

二十四になつたばかりの世間見ずの田舍娘を嫉妬しなければならないほど自信のない自分ではない

はずだつた。

眞波は冬彦を自分の傍に繋ぎとめて置くための鎖の役をさせるためで、必要があればいつでも自分の手許へ冬彦を呼び戻す事が出來る。眞波を嫉妬しなければならぬいはれは露ほどもないわけだつた。

感情の暴風がとつぜん吹きやみ、心の沼の表面が鏡のやうに鎮まつた。もう小波さへ立たず、月の光のやうなものさへ白々と射しかけて來た。冷酷の月影。

この過敏症のひねくれ娘はたしかに何か感づいてゐる。しかし、そんなものさへ相手にする氣はなくなつた。

曉子の方ははつきりと無視しておいて、恐縮したやうな顔でフォークを取りあげかけてゐる二人へ、

『おやおやすつかり萎靡しちやつたわね。いけなかつたわ、かまはずつゞけてちやうだい。いまの蘭の話、素敵だつたわ』

冬彦は、チラと眞波と微笑し合つてから、困つた子供のやうな單純な表情で、

『いや、もうやめます』

『まあ、さう仰しやらないで』

『蘭の方は、またこのつぎにします。せつかくの御馳走が冷たくなつてしまふ』

『これはジェリーよ、もとから冷たいはずなの。なんて慌て方なのかしら』

眞波がのびのびした笑ひ聲をあげた。

冬彦はいつになく弱つた顔で、

『これは、どうも重ね重ね……。夢中になつて喋舌くつてゐたものですから』

『いまから夢中にならないでちやうだい。あなた、せつかちなところもあるのね』

眞波と冬彦が眼に見えぬほど顔を染めた。

馨子はまるつきり氣がつかなかつたやうに急に話題を變へ、

『でも、あたしたちが美に搏たれる瞬間ぐらゐ純粋な感動はないと思ふわ。そんな機會に一度も惠まれずに終ることもあるのに……』

自分がいま二人の心理をどんな風に導いて行かうとしてゐるのか自分によく判り、いかにも痛快で思はず微笑を泛べた。

『……お二人はいまさういふ機會の眞只中にゐるわけなのね、お羨ましいくらゐに思ふわ。……それにしても、なんて美しいんでせう、あなた方お二人は！』

眼の隅からチラと曉子の方を見やると、曉子は口惜しさうに唇を嚙んで顔を伏せてゐた。

七

馨子は、もう一度しつこく繰返した。

『お二人ともほんたうにお美しいわ、見てゐると胸がドキ〳〵してくるくらゐ！』

眞波と冬彦が互ひの美しさに驚き合つてゐることは、相手の顔へ間がなく視線をチラチラと戰かせることでも充分わかつてゐた。

はつきりと顔をねぢ向けなければ見ることが出來ないやうな位置になつてゐるので、眞波も冬彦も相手の方へ顔を向けられる自然らしいポーズをつくるためにさまざまに骨を折つてゐる。

さうしまいと自分を抑へつけるのだが、いつの間にか眼がそつちへ向いてゆくといつた風で、それを馨子や曉子に覺られまいとするので却つてその苦勞が見え透き、見てゐると可笑しいくらゐだつた。

冬彦の方は、眼づかひの中にもさすが控へ目なところがあるが、眞波の方はびつくりした子供のやうな、無邪氣ともとれる大膽な表情で冬彦の顔を窃み見る。あまり美しくていくら見ても見飽きないといふ風だつた。

かういふ二人にとつて馨子の煽動はたいへんに效果的だつた。

馨子がさういふと、それをキツカケに二人はまるつきり顔を見合はないやうになつてしまつた。

眞波は馨子の顔ばかり眺め、冬彦は冬彦で曉子の方ばかり向いてゐる、二人の氣持が馨子の言葉にひつかゝつて自由でなくなつた證據だつた。

そろそろ認め合ひかけてゐる二人の意識に拍車をかけることはこれで充分效果があつたが、二人の氣持をはつきり結び合はせるためには、すかさずこの間にもうひと打ちやつて置く必要があつた。

『……優生學の本を讀むと、純血馬種がどんなふうにして出來るかその過程がわかつて面白いわね。

……蘭だつてさうでせう、いゝ花はいゝ花同志の交配の間でしか出來ないのでせう』

冬彦はやうやく話題にありついた嬉しさで、食卓の上に身體を乘り出すやうにしながら、

『……ダーヴインが蘭の花粉は虫媒によらない限り自然に結實しないといふことを發表してから、蘭の栽培家はもう偶然を期待しなくなつたんです。……良種の系統を辿つて行けば、否でも應でも立派な花が出來るのですから……』

『それは、至當ね』

曉子はゆつくりと顏をあげると、冷たい眼つきで眞波と冬彦の顏を見比べながら、ズバリとした口調でいつた。

『そんなら、お二人は結婚なさるといゝわね、優生學萬歲だわ』

何のつもりで曉子がこんなことをいひ出したのか知らないが、馨子としては、これはむしろ御註文だつた。

馨子はたしなめるやうな口調で、

『曉子さん、あなた、失禮よ』

曉子は落着き拂つて、

『あら、あたし、叔母さまが遠廻しにいつていらつしやることをはつきりして差上げたつもりなのよ、いけなかつたかしら』

『あなたにお願ひした覺えはないわ』

『叔母さまは、戸山さんと眞波さんを結婚おさせになりたいんでせう、どうしてそんなに廻りくどく仰言る必要があるのかしら』

『つまり、これがデリカシイといふやつなの』

『複雜、といふ意味でならさうですわね。たしかにデリケート過ぎるところがあるやうですわ』

さういふと、すました顏で珈琲の茶碗の中へ砂糖を落し込んだ。

同行

一

新橋北口の高架線の穹隆口をさま〳〵な男や女が絶え間なく流れてゐる。

曉子は改札口の眞鍮の柵に凭れて眞波がやつて來るのを待つてゐた。

眞波が熱海の戸山冬彦のところへ手紙を持つて行くやうに叔母に命令られてゐるのを今朝通りすがりにチラと聞き込んだので、先廻りをしてこゝで待つてゐて無理にも眞波と一緒に熱海まで行くつもりなのだ。

冬彦にあまり惹かれないうちに、眞波が叔母の殘酷な心理の放蕩の犧牲になりかけてゐることを注意してやりたいといふのだらうが、自分がそんな優しい氣持ちなど持ち合してゐるはずはないのだから、ひよいとするともつと別なことなのかも知れない。

この世での憎惡の對象のやうな叔母のひとりよがりな計畫を微塵に叩きつぶして鼻を明かしてやりたい氣持からこんなことを思ひついたのにちがひない。

では、眞波に對する同情のやうなものはまるつきり嘘かといへば、さうとばかり言ひきれない節もある。

眞波は叔母の心理遊戯の犧牲になつて、この行先ひどい不幸の淵に身を溺らしてしまふのにちがひない。その激しさも、その悲しみもよく判るので、自分自身のほか絶えて他人に關心などを持つたことのなかつた曉子でさへも、何か見すごして置けないやうな心の撓りを感じる。

女性の連帶心とでもいふのだらうか、眞波のためにといふのではなく、一人の女性に加へられる不當にたいする義憤のやうなものがこんな節介なことをさせるのかともかんがへられる。

この長い間、他人に同情したり注意を拂つたりすることを骨の髓から輕蔑してきたこの自分が、善良と單純さしか持つてゐない退屈な田舍娘に廻りくどい忠告をするためにこんなところに突つ立つてゐる。

自分のやり方としては筋が通らず、いかにも滑稽な氣がして我慢がならなくなつた。

曉子は、ふむ、と鼻を鳴らすと低い聲で呟いた。

『冗談ぢやない』

（あんな娘なんか生きようが死なうが、あたしの知つたことぢやない。こんな馬鹿げた出しやばりをするのは、つまりはあたしの利益のためなんだ。馨子のやつがこの長い間あたしを冷淡な扱ひ方をした竹箆返しをしてやるにはこの上もない機會なんだからな）

自分がいま何をしたのか、何をしかけてゐるのか、ぼんやりと判りかけてきた。

眞鍮の横棒からくる冷たさが腕から胸へ傳はつて、心の中に一種痛烈な感じをひきおこす。

ニヤリと笑ひながら、もう一度呟いた。

『要するに、眞波の奴をあたしの竹箆返しの道具に使つてやるだけのことなんだ』

それにしてもこの狼狽てかたはどうしたものだらう。

眞波が一人で冬彦のところへ出かけて行くといふことを聞くと、夢中になつて家を飛び出して來た。

たつた一日でも眞波と冬彦を二人きりで過させるといふことは、考へたゞけでもがまんがならない。

はつきりと思ひ切つたはずの冬彦への思慕の情が、實はまだ捨てかねてゐるのだといふことを覺つて、曉子は息苦しくなつてギュッと唇を嚙んだ。

二

父が死んで、曉子が叔母の家へ引取られたのは十一のときだつた。

本館から離れた別棟に家庭教師と二人きりで放りつぱなしにして置くやうなことは、自分だけに加へられる冷淡ではないと知つてゐても、自分が孤兒だといふ感情が迫々に曉子の氣持をひねくれさせ、いつの間にか叔母の馨子が自分の敵だと思ひ込むやうになつた。

實際、馨子の冷淡さときたらひどいもので、ときたま廊下でなど出逢ふと、おや、見慣れない顏だが、こんな娘が自分の家にゐたのかしらといつたやうな眼つきで曉子の顏を眺める。

曉子はその度に、叔母のこの殘忍な無關心にいつか必ず、こつぴどい仕返しをしてやらうと心に誓ふのだつた。

曉子の冷血と沈默は孤獨や佗びしさから自分を護るための一種の自衞手段のやうなものだつた。

生きて行くためには是非ともさういふ態度が必要なので、長い間かゝつてせつせと自分で築きあげたものだつた。

この冷淡と無頓着の支へがなければ手のつけられない孤獨の感情のために、曉子はとうのむかしに破滅してゐたかも知れなかつた。

庭の奥にポツンと建てられた四間ほどの西洋館の中の家庭教師と二人きりの明暮に七年の間、曉子は、ひたすら自我を研ぎ澄ますことにばかり努力してきた。

家庭教師が持ち合せてゐるくらゐの知識は曉子にとつては手綾るすぎるくらゐのものだつたので、

家庭教師を男性といふものを學ぶ研究材料にしてゐた。

生仲な戀愛で身をほろぼすことのないやうに、あまり悧口でない家庭教師に去り氣ない戀愛をしかけては、その場合場合の男性のやり方といふものをつくづくと觀察した。

戸山冬彦に逢つたのは、曉子にとつて凄まじい突風に襲はれたやうなものだつた。

冬彦の完全な美貌に眼を瞠つた瞬間、この青年は自分のものだとキツパリと思ひ込んだ。二度目に逢つたときには、冬彦の顏を眺めながら、結婚の申込みをするのは一ケ月以内のことにしようと固く決心した。

ところで、この誓ひは、永久に果たされずに終ることになつた。

毎月のお小遣ひを貰ふ極まつた日に叔母の部屋に入つて行くと、いつも鍵が掛つてゐる整理棚の戸があいてゐて、その奥に見馴れない革表紙の日記のやうなものが入つてゐるのを發見した。

曉子にとつて、叔母の心の祕密をのぞき込んでやることくらゐこの世に痛快なことはないので、容赦なくそれを取り出して讀み始めた。

三行と讀まぬうちに、叔母がどのやうな狂熱で祕かに冬彦を愛してゐるかが見て取られ、あまりの辛さにもうすこしで聲を立てゝ泣き出すところだつた。

長い間の心の鍛錬が、際どいところで涙を迸らせることを喰ひとめてくれた代り、悲しみの情は一擧に冬彦にたいする嫌悪の情に飛躍してしまつた。

（冬彦なんてやつ、もう死んだつて相手にしてやるもんかイ！）

眼に見えぬところで叔母の戀情の吐息で溫められてゐるのだと思ふと、そんな男など見るのも穢らはしいやうな氣持になつてきた。

冬彦のことを思ひ切ることを納得するまで自分にいひ聞かせ、間もなくそれに成功したと思つてゐた。……

『曉子さま、あなた、どうしてこんなところに……』

三

自分だけの思ひに深く沈み込んでゐたところだつたので眞波が傍に來たのをまるつきり氣がつかなかつた。

不意だつたので、心を立て直す餘裕がなかつた。さういふつもりもなかつたのに、

『あなたをお待ちしてゐたのよ』

不用意に優しい調子が出て、忌々しくなつて心の中で舌打ちした。

『あら、なにかあたくしにご用でしたの？』

曉子は、彈きかへすやうに、

『用事なんかあるもんですか。假にさうだつて、こんなところで待つてゐることなんかないわ』

さう言つてから、殊更、意味ありげに、

『あたしも熱海へ行くのよ。……尤も、あたしの方はお使ひなんかぢやないの、冬彦さんのところへ遊びに行く約束になつてゐたもんだから』

眞波は、まるで子供のやうな單純な笑顔になつて、

『さうでしたの、うれしいわ、あなたとご一緒出來るんなら……』

困つたといふ顏をして見せて、

『熱海なんてとこ、あたくし始めてゞせう、心細くてどうしようかと思つてゐたところでしたの』

改札口を通つてプラットフォームへ出ると、改めて手でも握りたいといふ風に身體を擦り寄せて來ながら、

『途中でお話も伺へるし、向ふへ行つてから何かととりなしていただけるから、ほんたうに有難いわ』

（なんて奴なんだらう！）

女學生染みた田舍臭いうちとけ方が我慢ならなかつた。

善良といふことは退屈だといふことでしかない。この底知れない人の良さには閉口するほかはなかつた。いつたい、今までどんなゆつくりした生活をして來たんだらうと思ふと馬鹿馬鹿しくなつて腹が立つてきた。

『一緒に行かうと思つたゞけで、別に親切といふわけぢやないのよ、感違ひしないでちやうだい、感

謝なんかされるわけはないわ』

眞波は、おつとりと受け流して、

『では、感謝しないことにしますけど、でも、やはりうれしいわ』

それはさうと、自分が冬彦と會合の約束があるやうに仄めかしたのを眞波は聞かなかつたのかしら？

もう一遍、はつきり言つてやれと思つて、

『あたしは冬彦さんのところへ遊びに行くんだし、あなたはお使ひに行くんだから、まるつきり目的がちがふでせう、あなたのおとりなしなんか出來るかどうかわからなくてよ』

眞波にも、今度こそはつきり判つたはずだつた。

どんな效果を現はすだらうと、素氣ない眼つきでマジマジと眞波の顏を眺めてゐると、眞波は一向氣もつかない風で、

『それならそれでも結構よ。でも、あなたが熱海へいらつしやるのだつたら、叔母さま、あなたにお賴みなさればよかつたのね。あたくしなぞわざわざ出かけて行かなくとも……』

文使ひを曉子に委せて、引つ込めるものなら自分は引つ込みたいといふやうな口吻だつた。

曉子は呆れてもう一度眞波の顏を見返した。

（こいつ、冬彦のところへ行くのを迷惑がつてゐる）

あまり思ひがけなくて、眞波の氣持をどう解釋していゝのかわからなくなつた。

眞波が冬彦に惹かされてゐるとばかり信じ切つてゐたことが、見當ちがひだつたやうで狼狽した。

あんなにも美しい青年に感動しないといふのは一體どういふ娘なのだらう。ヌウつとしたこの落着き加減にはなんとなく壓倒されるやうな感じだつた。

四

眞波は七分身のゆつたりしたコートを着て、こちらに横顏を見せて立つてゐる。

無造作な着方だけに服が自然に身につき、コートのデザインが簡單なのが却つて垢拔けしてゐるやうに見せる。無理に胸を絞つた、わざとらしい派手な自分のコートの方が嫌味なやうに思はれ出していつそう氣壓されるやうな氣持になつてきた。

（それにしても、なんて美しいんだらう！）

曉子の心に、あの夜、應接間で初めて眞波を見たときの突き刺すやうな妬ましさの感情がまた衝きあげてきた。

高架線の下の家並を眺めてゐる眞波の横顏は、程のいゝ柔らかな輪廓の中でひきしまり、視線を變へるたびに長い睫毛が健康な子供のやうな血色のいゝ頰の上にチラチラと翳を落す。

耳のうしろから襟筋へかけた皮膚の色がほんのりと霞んで、厚味のある白い薔薇の花瓣の感觸を思

はせる。

ひとに見られるかなどといふ氣構へはまるつきりないらしく、どこもこゝも隙だらけで、そのうつそりさ加減は笑止なほどなのだが自分などには眞似られさうもない大まかなところがあり、自分の常識の中にまだ嘗てなかつたタイプで、どう片附けていゝのか當惑した。

それにつけても自分の狼狽へぶりはどうだといふのだらう。コソコソと眞波の横顔を偷視したり舌打ちしたりしてひとりで焦立つてゐるのに、眞波の方はまるで自分のことなぞを問題にしないやうにんびりと街を眺めてゐる。

（生意氣なやつ、器量がいゝと思つて落着いてゐやがる！）

自分が眞波ほど美しかつたら、すねたりアタフタせずにあんな風に落着いてゐられるのだらうと思ふと、すこし悲しくなつてきた。

食卓に向き合つてゐる間、びつくりしたやうに冬彦の顔ばかりながめてゐたあの眞波の眼差は、ひよつとするとどんなことにもすぐ驚く田舍娘の眼つきなので、眞波が冬彦に魅惑されかゝつてゐると考へたのはこちらの思ひ過ごしだつたのかも知れない。

それにひきかへ、冬彦が眞波を見る眼つきはどうだつたらう。抑へ切れなくなつて、叔母が甲走つた聲をあげたのも無理はなかつた。

（まるで、溺死しかけてゐるひとのやうな眼つきだつたわ）

また、まざまざとそれを思ひ出して心が刳られるやうな痛みを感じた。

（冬彦のやつ、たしかに眞波に惚れかけてゐやがる）

何としても今のうちに水を差して置かなければならないわけだつた。

『ねえ、眞波さん、あたし、ひとつお願ひがあるんだけど……』

眞波は微笑みながらすぐ振り返つて、

『えゝ、どんなこと？』

『ザツクバランに言ふけど、あたしが冬彦さんのところへ行くのは絶對祕密なの』

眞波はちよつと眼を瞠つたがすぐいつもの愛想のいゝ顏になつて、

『あたくし知らないことにして置きますわ、氣におかけにならなくても大丈夫よ』

その言ひ方はいかにも自然で愼ましやかだつたので、曉子は張合ひがなくなつて氣が滅入つてしまつた。

『おや、どちらまでお出かけ？』

曉子が振り向いて見ると、祝子が小さなスーツケースを提げてうしろに立つてゐた。

五

祝子が熱海の戸山冬彦を訪ねる用件は、馨子に知られては困るやうなことだつたので曉子に逢つた

ことはちよつと苦手だつた。

ブラブラしたやうすをしてゐるから遠くへ出かけるのではなからうが、それにしても行先だけは確めて置く必要があつた。

祝子が去り氣なく問ひかけると、曉子は右足の靴の踵でクルリと調子よく身體を廻して、落着き拂つた口調で訊ね返した。

『をばさま、あなたは？』

祝子は、ちよつと弱つたが、あとでどうでもなると思つてはつきりといつてのけた。

『あたし、熱海へ行くのよ』

曉子はふむ、と鼻を鳴らして、

『熱海へ何をしにいらつしやるの？』

相變らず、おしやまな娘だと思つて、舌打ちをしながら、調子だけは愛想よく、

『何つていふことはないの、ブラリとね』

曉子は敏捷な眼つきでチラと祝子の顔を睨めあげてから、

『へえ、ブラブラとね。……冬彦さんのところへ行くんぢやない？』

思はず眉を顰めて、

『まあ、どうして？』

『どうしてといふことはないの。ちよつとそんな氣がしたゞけよ』

この過敏症の娘の頭の中は一體どんな風になつてゐるんだらう。祝子は思はず曉子の顔を眺めた。

祝子が返事をせずにゐると、曉子はしやくるやうな薄笑ひをしながら、

『ごめんなさい。何だかいけないことをいつたらしいわね。氣になさらなくともいゝのよ、ちよつとそんな風にいつてみたゞけなんですから』

頭でもひとつゴツンとやつてやりたいやうな氣持だつた。

『そイで、あなたの方はどこへいらつしやるのよ。やはりブラブラといふわけ？』

曉子は澄ました顔で、

『あたしたち、冬彦さんのところへ行くのよ。でも、ブラブラといふわけぢやないの。叔母さまのお使で冬彦さんのところへ手紙を持つて行くところなの。ちよつと、郵便法違反つてとこね』

思ひもかけなかつたので祝子はたぢろいだ。

數枝に頼まれた用件はひどく急な話で、どうしても今日ぢゆうに秘密に冬彦に逢つて置かなければならない事情があるので、これはたしかに折が惡かつた。

しかし、いづれ蓋を明ければすぐわかる話なのだから、却つてはつきりさせるのもいゝと心を決め、

『お察しの通りだわ。實は土地のことであたしも戸山さんのとこへ出かけて行くとこなの、こ一緒出來てうれしいわ』

曉子はそれを聞き流して置いて、後向きに立つてゐる娘の背へチラと眼を走らせてから、

『……あゝ、さうさう、まだご存じなかつた筈ね。ご紹介して置くわ。……こちらはね、叔母の兄のお嫁さんの妹……。つまり、義理の姪にあたる吉江眞波さん。……お聞きになつたこともあるでせう、五日ほど前に島原の奥から出て來たばかりのところなの』

娘は、おつとりとこちらを振向いてお辭儀をした……。その顏を見ると、祝子は思はず息を嚥んだ。そんなにも美しかつた。

『……眞波さん、こちらはね、アメリカ歸りの舞踊藝術家……、さう言つていゝわね、間違ひぢやないでせう？　舞踊藝術家の由良祝子嬢。へい、どうぞ、よろしく』

疑惑

一

冬の入りがけと思へないやうな明るい陽が汽車の窓から射し込み、向き合つてゐる眞波の頭に落ちかけてその上に圓い光の輪を描いてゐる。

たしかに度外れな美しさだつた。整ひ過ぎた端麗さでもなく、眼立ち過ぎる艶めかしさでもない。

古典派の畫家が理想として追求した『美の始源』とでもいふやうな渾然とした美質が面輪の中にある。ちよつと首を傾げるだけの何でもない身ぶりにも、譬へやうのない自然らしさと淸純さに充ちてゐて、典雅などといふ形容ではとてもいひつくせさうもない優美さがあつた。

見るからに脆さうな都會風の病的な美しさの系列ではなく、健康と單純さにしつかりと貫かれてゐて、幾歲になつてもこの美しさは變ることがないのではないかとさへ思はれる。

あらゆる男性の眼を欲たせ、どんな女性でも本能的な嫉妬を感ぜずにはゐられないやうなそんなズバ抜けた美しさだつた。

（すこし美し過ぎるやうだ。……このお嬢さんを見て嫉ましく思ふ女の思ひだけでも、この先あまり幸福に行きさうもないな。かう美しいと誰だつてちよつと意地惡をしてやりたいやうな氣がするから）

祝子はうつとりと眞波の顏を眺めながらこんなことを考へてゐた。

この娘とあの美しい戸山冬彥とが並んだところを想像すると、祝子自身何ともつかぬ焦立たしい思ひがする。

それにしても、こんな美しい娘に冬彥を結び付けようとしてゐる馨子の思ひ切りのいゝやり方にはさすがの祝子も度膽をぬかれた。

馨子がひと知れず激しい狂熱で冬彥を愛してゐることはすつかりこちらへ筒抜けてゐる。

冬彥を眞波と結婚させようといふのは、詮じ詰めたところ、眞波をぼくよけにして、冬彥をいつま

でも自分の傍へ繋ぎ留めて置かうといふのにちがひないのだが、馨子がこんなにも美しい娘に嫉妬を感じないほどの枯方をしてゐるとは思はなかつた。

どんな重要な手紙か知れないが郵便で出せば濟むものを、冬彦のところへ眞波に持たせてやるなぞといふのは、わざと際どい機會をつくつて眞波と冬彦の關係を退つぴきならぬところへ追ひ込んでしまはうといふ魂膽なのだらう。

一旦かうと極めたら、感情を動かさずに鐵の鞭でも振るやうにビシビシと段取りをつけて行くきまりのよさはさすがだつた。

（なるほど、たいしたもんだね！）

ちよつとかなはない氣がした。

祝子の用件は、すつかりひねくれてしまつた清次郎の妹の幸子を、清次郎の親友だつた冬彦の口から適當に宥めさせ、遺書をこちらへ取りあげる役を買はせるためだつた。

幸子といふ娘は思ひのほか手强かつたほかに、數枝・馨子・祝子のトリオを眼の敵にしてゐる方代久武までが後押してゐるといふのではなかなか油斷がならない。

馨子と清次郎の情史や百貨店の内幕を素ッ破抜いてあるといふその遺書を思ひ切りよく惡德新聞へでも賣り渡されでもしたら、數枝としてはちよつと起ち上れないやうな致命的な打擊を受けることになるのだから、今日中に是非ともその防ぎをつけて置かなければならないわけだつた。

（あの美しい冬彦に口說かせたら、いくら頑固な娘だつて陷落するにきまつてゐる）

二

何のために祝子がこんな役を買つて出たかといへば、ぶちまけたところ、馨子の仕打ちに對する抑へ切れない憤懣の情によることだつた。

四五年もすつたもんだと腐つてゐた久武と馨子の離婚訴訟を見るに見かね、自分から進んで久武を肩代りしてやり、うまく籠絡め込んで離婚を承知させてやつた。

今度、自分がむかしの恩義も忘れて、たつた五千圓ぽつちの目腐れ金を、あゝでもないかうでもないと出し澁るなんて祝子としては腹が据ゑかねるほど癇に觸つた。

結局、取るだけのものは取りあげたが、馨子のやり方がいかにも忌々しいので、こつぴどいこの竹篦返しをしてやるつもりでこの役を引受けたのだつた。

馨子としていまいちばん痛いことは、何といつても戸山冬彦を引離されることなのだが、そこがこつちのつけ目で、今度の遺書の件に絡ませいはゞ一石二鳥の『窘め手』をつかつてやるつもりだつた。

冬彦が溫室を移轉させる適當な地面がなくて困つてゐるのを見込み、數枝が持つてゐる熱海の地面を無代で提供させてそこへ引き移らせて冬彦と馨子の間の水の手を切り、親切をカセにして冬彦から清次郎の妹の幸子を口說かせて、うまうまと遺書をこちらへ捲きあげるといふ手のこんだ段取りだ

つた。

それにしても、眞波の美しさはまつたく意外だつた。馨子がフイと口を滑らしたので、眞波といふ娘と冬彦を結婚させるといふことは聞いて知つてゐたが、どうせ大したことはあるまいと多寡をくゝつてゐた。

しかし、その娘をかうして眺めて見ると、とてもうつかりしてゐられないやうな氣持になつてきた。冬彦がこれほど美しい娘に惹かれずに濟むはずはなく、馨子の計畫通りに二人の結婚が成立すると、すれば、冬彦は馨子の義理の婿になる。それでは冬彦を馨子から引き離して辛い思ひをさせてやらうといふこちらの目算がフイになつてしまふわけで、するとどうしても冬彦と眞波の結婚を妨害しなければならぬ場合だつた。

さうとなつたら早いに越したことはない。

馨子にたいする反感ばかりではなく、この美し過ぎる娘を冬彦と結婚させ、みすみす幸福に終らせるといふことも何となく忌々しかつた。

『あなたと冬彦さんのことは、伯母さまからよく伺つてゐましたわ……ご結婚なさるんですつてね、おめでたう』

たぶん含羞んだやうすでもするだらうと思つてゐると、眞波はお義理のやうに、あら、と眼を瞠つて、

『でも、あたくしは、まだそんなことは伺つてをりませんわ』

普通の話でもするやうな、おつとりとした返事をした。

さういふ言ひ方をされると、當人より廻りの人間がお先き走りをしてゐるやうで、これはどうにも照れくさかつた。

祝子は狼狽へて、

『あら、まだご存じなかつたんですつて？』

自分らしくもなく間の抜けたことを言つて顏を赧らめた。

眞波は、それはいま言つたばかりだといふ風にちよつと微笑しただけで返事はしなかつた。

仕切つて立ちあがつたばかりのところで、あつさりと打棄を喰つたやうなかたちだつた。

三

跳ね返して來るとか、思はせぶりをするとかしてくれるなら、いくらでもやりやうがあるが、こんな風に素直な出やうをされるとちよつと二の句をつげなかつた。

心の中でとりとめなく足踏みをしてゐたが、手の出しやうがないとなると、持前の負けず嫌ひがムラムラと猛り立つて、何とかして思ひ切り叩き据ゑてやらなければをさまらないやうな氣持になつてきた。

際のない構へになつて、なんとか引つかけてやるつもりでわざと下司つぽく問ひかけてみた。

『一昨日、お見合ひなすつたんですつてね、戸山さんの印象はどう？』

どんな風に出て來るかと見てゐると、眞波は淀みのない眼つきで祝子の顏を見返しながら、

『あまり澤山印象があり過ぎてなんと申しあげていゝかわかりませんわ』

利口ならば利口なりにケチなはぐらかし方をするか、さもなければ、自分の頭の惡さを隱すために無理に氣のきいたことを言はうとするか、何れにしても何を考へてゐるかすぐ見透すことが出來るのだが、この娘は澎湃と大きくて、へんにつかまへどころがなかつた。

修道院のやうな女學校でずつと暮して來たといふことだつたが、その間、どんな生活をしてゐたのだらう。

（この娘は馬鹿なのかしら）

田舍者の堅苦しさも卑屈なところもない。相手を不愉快にさせまいといふやうな理智的な愼ましい微笑を浮べながらゆつたりと座席にかけてゐる。

祝子は心の中であわてゝいひ消した。

（とても、馬鹿なんていふ段ぢやないわ）

われともなくへどもどして、

『印象があり過ぎるといふのは率直ね、でも、結論はどうなの、伺つてみたいわ』

聞きやうによつてはずゐぶん失禮な問ひかけなのだが、眞波は愛想よく頷きながら、ちよつと困つ

たやうな顏をして見せた。

その實、たいして困つてゐるのではなく、こんな話に興味がないことを相手に覺らせて氣を惡くさせまいといふ奧床しいこゝろづかひをしてゐるらしいことがそのそぶりではつきりと判つた。

眞波はちよつと考へるやうな風をしてから、單純な明るい表情で、

『打ち明けたことをお話しますわ。……實はね、あたくし、生れてからまだ五、六人ぐらゐの男の方しか眺めたことはありませんでしたの。……眺めたといふよりはチラと見掛けたといつた方がいゝかも知れませんわ。……その五、六人といふのも、年に一度やつて來る視學官だの、父兄の方だの、それから尼姉たちの親戚の方だの、學校の小使お爺さんだの、そんな風な齡をとつたひとばかりなんです。……戸山さんのやうな若い方とはまだ一度もお話したことがなかつたので、ひつくりしてしまつて、どんな風に印象を纒めたらいゝのかわかりませんの、經驗のないことですから』

さう言つてから、思ひ出したやうに附け加へた。

『ちよつと間違ひました。……東京へ來る汽車の中でお逢ひした若い方がありましたから、戸山さんは二人目ですわ』

四

生れてから若い男性と向き合つて話したのはまだ二度きりしかないなどといふのは、嘘でなければ

恍けてゐるのだとしか思へないやうなことだつた。

しかし、眞波のやうすを見ると嘘を言つてゐるやうすも恍けてゐるやうすもない。自分で自分の言つたことが可笑しくなつたらしく、無邪氣なやうすでクスクス笑ひ出した。

『ずゐぶん妙ですわね。信じていたゞけないかも知れませんけど、でも、ほんたうのことなんですわ』

『今の世に、そんなことがあらうなんて、とても信じられないくらゐよ』

『……加特力の嚴しい學校で、それに、ずつと寄宿舍にばかり引込んでゐたからですの。……その點だけでは、たいへん損をしてゐたわけですわね』

こちらの氣持に合槌を打つつもりらしく、口ではそんな風に言つてゐるが、自分が不幸だなどと思つてゐるやうすはどこにもない。それどころか、過去の生活がどんなに幸福だつたのか滿足さうな表情を隱し切ることが出來なかつた。

かういふ風變りな相手に、馨子と冬彦の複雜な心理の交渉を仄めかして中傷して見ても、果して成功するかどうか覺束ない話だつた。

『それぢや、たいへんだ。これから大急ぎで、いろんなことをお知りにならなくてはならないわけね』

眞波はしづかに訊き返した。

『いろいろなことつて、どんなことですの？』

『手近なところでは、戸山さんのことなんかでも、あなたのご存じないやうなことがいろいろあるのぢやないかしら』

ちよつと言ひ過ぎたかなと思つてチラと曉子の方を見ると、曉子は、いつものやうな無關心な顏つきで、ブロンの小型本の餘白に短い鉛筆で何かせつせと樂書をしながら二人の會話から全然孤立を守つてゐた。

曉子はどつちみち馨子の味方ではなく、それにはつきりした青年輕蔑派で、中年の紳士なんかとばかり遊んで歩くやうな奇嬌な娘だから、すこしぐらゐ突き込んだことを言つても、格別氣にとめることもないのだらうと思つて構はずつゞけた。

『男と女の友情なんて實在する筈もないのに、馨子さんと戸山さんの友情だけはよく長く無事につゞいたものね。その點、ちよつと信じられないほど見事なものだつたわ。……理想的と言つてい〳〵くらゐ』

眞波はちよつと眼を瞠つて見せた。

驚いたのではなく、これも相手を外らさないための一種の儀禮なのらしかつた。

（なんといふ落着き加減なんだらう！）

祝子はあせり氣味になつて、

『あんなひたむきな友情なんてこの世にあるのかしら。お互ひの尊敬と、誠實と、惜みない獻身。ちよつと詩の作用と言つたやうなところがあつたわ。……ほんたうに、あんなに愛されるお互同志なんて見たことがない。お互が相手の生活の中でだけ生きてゐるといつた風だつたの』

『ねえ、曉子さん、さうだつたわね……あなたもよくご存じでせう』

曉子は氣のない調子で、

『さあ、どうかしら。……あたし離れたところに住んでゐるから、二人がどんなことをしてゐるか知らないけど。……でも、あんなのが友情といふのかなア。もし、あれが友情なら妙な友情もあるもんだ。逢ふと二人で溜息ばかり吐いてゐるんだ。へんだぜ、まつたく』

五

曉子が、話に乘つて來てくれたので、祝子は、やれやれと思つた。

この娘が、『青年』に反感を持つてゐるのは事實でも、深いところではやはり冬彦と眞波の結婚に冷靜であり得よう筈はないのだから、その點ではまづまづ二人の意見が一致してゐるわけで、曉子が乘つて來た以上、あとは曉子に任せて置くに限ると思ひ自分はそろそろ身を退きにかゝつた。

祝子はわざと面白さうな笑ひ聲をたてゝ、

『それは、いつたいどういふ溜息なのかしら?』

曉子は本の表紙にグイグイ出鱈目な繪を描きつけながら、

『溜息は、溜息よ。……溜息の內容まで知らないわ』

曉子の方でもそろそろ逃げを打ちかゝつてゐるらしかつた。

祝子は追縋つて、

『ひどく思はせぶりねえ。構はないでせう、もつとはつきり仰言いよ、眞波さんだつて聞いて置いていゝことなんだわ』

曉子の方もさるもので、それには乘つて來ずに、急に話題をかへ、

『ねえ、をばさま、さつき仰言つた土地の話つて何のこと?』

思ひがけないところを衝かれたのでちよつと返事に困つたが、すぐ立て直して、

『戸山さんが溫室を移す地面がなくて困つてゐるのでせう。熱海にいゝ地所が見つかつたから、もしなんだつたらお世話してあげようと思つて……』

曉子は、本の上に顏を伏せたまゝ、白眼でジロリと祝子の顏を見あげ、

『へえ、馬鹿に親切なのね、それ、どなたの土地なの』

さすがにグツと詰つて、咄嗟に返事が出來なかつた。

『……ちよイとね……それは、まだいへないの』

『でも、叔母さまにすれば、冬彦さんの溫室、別に邪魔にしてゐるわけぢやないやうよ。それどころか、死ぬまであそこにゐてもらひたいつもりぢやないのかしら』

『それは馨子さんの方の意向でせう。戸山さんの方では、どう考へてゐるかわからないことぢやないかしら』

『それは言ふまでもないわ。あたしに冬彦さんの氣持なんかわからないけど、引越す處がなくて困つてゐたのは以前の話でせう。今はもう動く氣なんかないのよ』

他人のことにまるつきり無關心のやうな顏をしてゐるくせに何もかもよく知つてゐる。兎に角扱ひにくい小娘だつぢ。

『すると、あたしの親切は無駄のやうなものね』

『無駄なことはあなたがいちばんよくご存じぢやないのかしら。冬彦さんが叔母さまの傍から離れたがらないことをまく知つてゐるくせに、土地のことなんか言ひに行くのはちよつと妙だわね。……あら、ごめんなさい。こんなことあたしの言ふことぢやなかつたわ、氣になさらないでちやうだい』

こちらがやり返す暇も與へず、すぐまた次の話に移つて、

『ねえ、をばさま、あなた、冬彦さんと眞波さんの結婚にご反對らしいわね』

かうまでズバリと來るとは思はなかつた。思はず嚴しい口調になつて、

『曉子さん、冗談ぢやないわ。あなた、それはすこし言ひ過ぎよ』

『さうかしら？　さつきからのをばさまの言ひ廻しを聞いてゐると、あたしにはどうしてもそんな風にしか思へないの。でも、これはあたしだけの感想よ』

祝子はもう負けてゐられなくなつた。

『相變らずお察しがいゝわね。正直なところはさうよ。眞波さんが氣の毒だと思ふからなの。この意味はあなたにおわかりでせう？』

曉子は落着き拂つた聲で答へた。

『あたし、そんなことは知らないわ』

六

曉子と祝子の會話を眞波は默つて聞いてゐた。

話題は、自分と、伯母と、戸山冬彦のことらしいが、自分などにはとても了解されさうもないほど複雜で、はつきりと眞意を摑むことが出來なかつたが、曉子も祝子も何か遠廻しに自分にいひかけてゐることだけはわかる。

（いつたい、あたしになにを覺らせようといふんだらう？）

冬彦と最初の晩餐があつた夕方にも、曉子が謎のやうなことをほのめかしたことを思ひ出す。

世間馴れない眞波にも、どうやらそれは自分と冬彦に關係したことだといふことはうすうすわかつたが、單純に物事を受けいれ、人の氣持の裏などを忖度しないのが自分の價値だと思ひ、長い間そんな風にばかり暮して來たので、あの時もあまり深く氣にとめずにすましてしまつた。

曉子の場合はこちらにわけのわからない疑惑を起させただけだつたが、今日の祝子の方は自分と冬彦との結婚があまり幸福ではあるまいといふやうなことをはつきりとほのめかしてゐる。

（それは判つたけど、一言で濟むことをなぜこんなに手間をかけていはなければならないのかしら？）

眞波にすれば、むしろその方がいぶかしいくらゐだつた。

それも、聞えよがしに曉子と會話してゐるだけだ。自分に面と向つていふのなら應對のしやうもあるが、二人の會話では口を挾む必要もないと思つて沈默してゐると、祝子は程のいゝ微笑をうかべながら曉子に、

『おや、あなたにも知らないことがあるの？　これは、ちよつと信用出來にくいわね』

いひ廻しは穏かだが言葉の中には辛辣な棘があつた。

曉子はそんなことにまるつきり氣づかないやうに、むしろ愛想よく、

『えゝ、さうよ、知らないことだらけだわ。どうぞ、買ひ被らないやうにしてちやうだい』

祝子は白々しくうなづいて、

『それア、さう。謙遜なさるのは贊成よ。直感だけではわからないこともずゐぶんあるんだから、そんな風にいつて置く方が無事だわね』

曉子はニヤリと突つて、

『をばさま、あなたとあたしの意見が一致したのはこれが初めてぢやないかしら。あまり仲のよい方ぢやありませんものね。……でも、あたしのことなんかに關はずに仰言りたいことをおつゞけになつたらどうかしら。あたしもお伺ひしてよ、あたしにだつて參考になるに違ひないんだから』

祝子はニコニコ笑ひながら、

『そんな風に改まられては困るナ。……實はね、これはあたしの推測だけど、馨子さんが冬彦さんと眞波さんと結婚させようといふ思ひつきの中に、何か奇拔なものがあるやうな氣がしてならないの』

と、言つて、ひどく拔巧的な仕方で眞波の顏を眺めてから、

『なんといつたらいゝかしら。……例へば、代數式ね。……AとBとの數値を取り代へても全體の値は變らないといふ、つまり、あれね。……あなたの口眞似ぢやないけど、これはあたしだけの感想なんだから氣にとめてもらふ必要もないけど……』

眞波にも、やうやくわかりかけて來た。

自分の幸不幸なぞ關係なく、この二人は自分と冬彦を結婚させたくなくてそれを互に相手の口からいはせようとしてゐる。……

（なんといふ複雜なやり方なんだらう！）

眞波は煩はしくなつてきた。

七

眞波がぼんやりと心を沈ませてゐるうちに、曉子は容赦のない口調で、

『すると、眞波さんと冬彦さんの結婚に何か不自然なところがあると仰言るのね。もし、さうだとす

るとどんなことなんだらう。代數式なんかぢやなく普通な言葉でサックリいつてもらへないかしら』

『だから、先刻これはあたしの推測だけど、といつたでせう。ほんたうのところは何もわかつてゐないのよ。たゞ馨子さんのことだから、例の自分勝手な詩心であまり二人を玩具にし過ぎはしないかと思つてそれを心配してゐるだけ。つまるところ、取越し苦勞よ』

『つまり、あなたはこの結婚に反對なのね』

『さういふあなたは？』

『あたしは大贊成。をばさま、あなたは？』

『あたしも大贊成よ』

眞波は呆氣にとられて二人の顏を眺めた。

（この人達は、一體何を大騒ぎしてゐるのかしら？）

自分は、冬彦と結婚するなどといつた覺えもなければ、そんな素振りをした記憶もない。また、考へてみたことさへなかつた。

伯母が自分を戸山冬彦の結婚の相手と獨り極めしてゐるとしても、伯母の意思がそのまゝ自分の意思である筈はなく、どのみちそんな獨斷の掣肘を受けなければならぬいはれはなかつた。

眞波の氣持にはすこしも屈託がないので、冬彦に對しても、伯母に對しても、こゝで向き合つてゐるこの二人に對しても、極く自由な考へ方をすることが出來た。

伯母に對しては、自分を忘れずに東京へ呼んでくれたことに單純な感謝の念をもつてゐるだけで、戸山冬彦の場合はこんな美しいひとゝこの世の中にゐるかしらと思つて驚嘆して眺めてゐただけのことだつた。曉子の方はひどく神經質なひとだと思ひ、どうせ自分などが太刀打ちなどは出來る相手でもないのだから、あの夕方、庭の隅で逢つた時たいていの無理は通すつもりとはつきりさう極めてゐる。ところで、この祝子といふひとはいつたいなんだらう？　なにかひとり苛立つて行き逢ふ人間にみな嚙みついてやらうと身構へてゐるやうに見える。この方も廻り冗い事にかけては曉子によく似てゐるが、殊更に失禮な事をいひかけて無理に相手を怒らせようとするのはあまり愉快ではなかつた。

（こんなのが社交とでもいふのかしら？）

何ではあれ、初めて逢つたばかりの相手の結婚問題に臆面もなく鼻を突き込む厚顏しいやり方を舞臺舞踊家といふ特別な人間を眞近に見る好奇心も手傳つて、煩いなりに相當興味を持つて眺めることが出來た。

それにしても、伯母が思ひついた自分と冬彦の結婚の計畫の中に何か腑に落ちないことがあるといふのはどういふ意味だらう。私が不幸になるといふのは？……曉子ははつきりとさういつた。

（郵便で出せば濟む手紙をわざわざあたしに持たせて冬彦のところへやるのは、どういふわけなのかしら？）

モヤ〳〵したものが自分のまはりに立罩め、ぼんやりとその中へ自分が包み込まれてゐるやうに感

じられる。

（この手紙には、何が書いてあるのだらう？）

今まで平和だつた眞波の心は、急に落着かなくなつて、さまざまな疑惑が胸を壓し始めた。

溫室の中

一

溫室の中は、それとはつきり指摘出來る一種の放漫狀態に支配されてゐた。

午前十時には必ず閉める筈の送湯管の調節瓣が開け放したまゝになつてゐるし、室内の濕度を調節する水槽の水も、まるつきり無くなつてゐた。花棚に敷いてある石炭殼に觸つて見ると、これもカラカラに乾き切つてゐる。

思はず眉を顰めながら濕度計の傍へ行つて眺めて見ると、室溫に比べて濕度が殆ど零位まで下つてゐる。蘭のためには最も危險な狀態だつた。

冬彦は狼狽てスチームの調節瓣を閉め、水槽に水を出し、それから石炭殼に灌水しはじめた。

蔽光幕を閉め忘れた硝子屋根から直射する日光が花瓣の上に焦點を結んでゐて、こゝもドキツとす

るやうな危險な狀態のまゝ放置されてゐた。

冬彦は衝きあげてくるやうな瞋恚を感じて强く舌打ちをすると急いで蔽光幕を閉めて廻つた。

水槽に汲み込んだ水と石炭殼から忽ち蒸氣が立ちのぼり、硝子屋根の内側に小さな水玉を結びはじめた。

冬彦は半巾で汗を拭ひながら陳列室に入つて、『紅頭アマナ蘭』の傍へ行つて見た。

日誌を見る迄もなく、當然花芽が發生してゐなければならぬ時期なのに、どの花もまだ低稚狀態にある。これは開花の促進に必要なエーテルの噴霧を怠つてゐた證據だつた。

『久米の奴、いつたいどうしたといふのだらう』

激しい言葉が口の先まで出かゝつたが、さすがにさうはしなかつた。そのために助手の久米圭二に對する忿懲の情は一層手のつけられないものになつた。

冬彦は、陳列室の隅の籐椅子の中に沈み込んでやりどころのない怒氣に惱んでゐた。

このやり方は、だらしがないといふだけではちよつとすまされない。長い間この仕事にたづさはつてゐた男の仕業だとは思はれないやうな惡性なもので、なにか自分に對する久米の敵意といふやうなものさへ感じさせた。

冗々と考へて見たが何一つ思ひ當ることがなかつた。久米の神經を刺戟するやうなことをした覺えもないし叱責した記憶もない。それどころか、僅ばかりだが、久米に任せつ切りにしてゐた間の骨折

に對する特別な手當といつたやうなものもやつてある。

『この仕事が嫌になつたとでもいふのか』

さういへば、どうでもなれといつた自棄的なものも感じられないでもない。

『しかし、久米に限つてこんなことをする筈はないのだが……』

九州の孤兒院から父の溫室番に拾ひあげられてからこの方七年の間、ちよつと比類のないほどこの仕事に熱中しつゞけて來た久米が、どんな理由にせよ突然に熱を失くするなどは到底考へられさへしないことだつた。とすると、一體この怠惰なやり方はどうしたといふのか。

花どもの呼吸づかひも聞えるやうなひつそりとした溫室の天井のあたりで微かな蜂の唸り聲が聞える。

今度こそ、冬彦は眞蒼になつてしまつた。

蘭を人工交配して世界中の植物雜誌に新種の發表をするといふ仕事に、何より恐ろしいのは毘虫に不隨意な花粉の媒介をされることだつた。

何年もかゝつて二つの純種の間だけで交配を重ねるこの骨の折れる仕事は、溫室の中へ紛れ込んだたつた一匹の蜂のために十年の努力も水泡に歸してしまふ。

溫室の入口を二重の網扉にし、空氣の調節窓を明ける前に花に一つ一つ薄紗の覆ひをかけ、猶念のため陳列室の扉を閉ざしてしまふのもつまりその危險を防ぐためだつた。

冬彦は捕虫網を取りあげると、狂氣したやうに蜂のゐる方へ突進して行つた。

二

背伸びをして一擧に蜂を掬ひ取ると、捕虫網を床へ叩きつけ、生れてから始めてといつていゝほどの荒々しさで網の上からそれを靴で踏み躙つた。

蜂はかたちもないほどベツチヤリと擦り潰され、翅の一片だけが網の目に殘つた。

冬彦はセイ〳〵と息を切らしながらそれを眺めてゐたが、それだけではどうしても瞋がをさまらないので網から翅を取つて指で引きちぎつた。

ギーツと網扉を引き明ける音がした。

久米が、白い上ツ張りのポケツトへ兩手を突つ込んだまゝブラリと溫室の中へ入つて來た。

冬彦は、飛びかゝつて行きたいやうな衝動を感じたが、やうやくのことで抑へつけた。

久米を叱責するためにつとめて冷靜になる必要があつたが、額に髪を垂らしたあまり好感の持てない棘々した貧相な額やヌーツとした横着のやうすを見ると、冷靜になるどころか一層ムラ〳〵として來て、つい甲がかつた聲で呶鳴りつけてしまつた。

『おい、久米君、君は僕の仕事を滅茶滅茶にしてしまふつもりなのか』

久米は、落ち窪んだ眼で冬彦の顏を眺めながら一種自若とした口調で、

『それは、どういふ意味ですか』

痺れるやうな瞋恚の中に溺れ込んで行く自分を感じながら冬彦が叫んだ。

『意味も糞もあるか。……おイ、さうなんだらう、はつきり返事をして見給へ』

久米の顔がサツと血の氣がさし、そしてすぐ眞蒼になつた。腰に手をあててすこし反り身になると、怒つた犬のやうな眼つきで冬彦の眼を見返しながら、

『私はあなたの仕事を滅茶滅茶にしようなどと一度だつて考へたことはありません。いつたいどうしたといふんです』

『どうしたといふ挨拶があるか』

舌が痙攣つたやうになつて、どうしてもひと息ではいはれなかつた。

『……なぜ調節瓣を閉めて置かない。水槽の水はどうしたんだ。溫床はカラ〳〵になつてゐるし幕まで開けッ放しになつてゐる。……君はこの仕事をもう七年もやつてゐるんだらう。こんなことをしたら花がどんなになるかよく知つてゐる筈だ。……え、、おイ、どうしたんだ、いつて見給へ』

『忘れました』

冬彦は、思はず突進むやうに二三歩久米の方へ近づいて行つて、

『忘れた？　忘れたで濟むか』

『人間のことだから忘れることだつてあるでせう。……しかし、何といつたつて私の失策に違ひないんだから、お詫びだけはして置きます。その代り、あなたにひと言……』

冬彦は何も聞いてゐなかつた。

首の血管を傳はつてありつたけの血がヅキヅキと脈を搏ちながら頭の方へのぼつてゆく。

長い間の讐へやうもない辛苦がこの男のために一擧に突き崩されてしまつたかも知れぬと思ふと、悲憤とも憤激ともいひやうのない感情が胸を貫き、なんとも知れない激越な涙が眼にうかんできた。

『何だ、その態度は！　おイ、久米、溫室の網扉はいつたい何のためにあるンだ、言へッ』

『そんなわかり切つたことを私にはしてどうしようといふんです』

もう何をするのか自分でもわからなかつた。アッと思ふうちに久米の方へ突進して行つて力任せに拳で顎の下を突き上げた。

久米は不意を喰らつて網扉のところまでよろけて行き、網扉に激しくぶつつかつてから床の上に倒れた。

兩脚をひらいて、仰反けに倒れたまゝになつてゐたが、床の上に落ちてゐた花鋏を手に握ると、ゆつくりと起き上つて來た。

眼が据わつて、唇の端がビクビク痙攣してゐた。

三

怒りと昂奮のために、歩行が自由にならないのらしく、捜るやうな奇妙な足取りでのろのろと冬彦の方へ近づいて來て、二三歩前で止まつた。

右手に握つてゐる花鋏がギクシヤクと動き、その度に鋏の刄がドキツと光つた。

（どうしようてんだ？）

何故かすこしも怖くなかつた。

一氣に飛び掛つて來ないのは久米の感情に制動がかゝつてゐる證據でこちらの言ふ理窟ぐらゐはまだ通じる餘地がありさうだつた。

日頃は溫和な男だけにこの忿怒のし方に何か底知れないやうなところがあり、その點だけはすこし不氣味だつた。

何を仕出かすだらうといふ不安ではなく、不氣味なのはむしろ醜くひき歪められた久米の蒼白んだ顏だつた。

熱心に仕事をしてゐる時には輝き出すやうにさへ見える朴訥な顏が怒るとこんなにも醜惡になるのかと思ひ、かういふ顏に直面しなければならぬことが冬彦の神經にこたへた。

『おイ、久米ッ、そんなものを握つて、それでどうしようといふンだ』

久米は笑つてゐるのかと思はれる樣な痙攣つた顏を振りあげたまゝ、またジリッと一歩進んで來た。

（畜生！　本當にやるつもりなのかな？）

それならそれでこちらも防禦の方法を考へなければならなかつた。

一方しかない出入口は久米に塞がれてゐるし、通路は一人が通るだけの幅しかないのでちよつと體の躱しやうがなかつた。

花棚の上に植出しに使ふ大きな鍬がある。手を伸ばしてそれを取りたい衝動を感じたが、さうはしなかつた。

『利いた風な眞似をすると承知しないぞ。貴樣は毆られていゝわけがあるんだ』

『八釜しい、靑二才』

聲が嗄れて殆ど聞きとれなかつた。

『貴樣などに毆られるわけはないぞ』

冬彦は硝子屋根の棟についてゐる調節窓を指しながら、

『おい、大きなことを言ふならあそこを見ろ。……あそこが開けッ放しになつてゐたんで、こゝへ蜂が入つて來た。どんな理由で僕に突ッかゝつて來るにしろ、この怠慢だけは許されん』

久米は神經的にチラと開け放しになつてゐる調節窓を見上げた。

『親父の代からやつてゐる仕事をこんなやり方で破滅させてもいゝのか』

さすがに、これには徹へたらしく、眼を伏せたまゝ返事をしなかつた。

『何とか言へ、おい』

『濟みません』

『言ふことはそれだけか？』

『……』

『君の怠慢のために、ひよつとすると、この仕事はまた始めからやり直さなければならないことになるかも知れない。……この溫室の純粹さはこれで信用ならないものになつてしまつたんだぞ』

『……』

『僕がこの仕事を承け繼いでからまだ一年にしかならないが、これまでかゝつた父の苦心を考へたら君の怠慢はたしかに毆られるだけの價値はあるんだ』

『……』

『おい、どうしてこんなことをした』

久米は、急に顏を上げると、底の据わつた不敵な表情になつて、

『それは、私のせゐではありません。……むしろ、天罰です』

『何ッ！』

『ちよつとお伺ひしますが、父上の「アマナ蘭」の新種を完成させるのがあなたの仕事なのですか、三宅伯爵夫人とふざけるのがあなたの仕事なんですか、はつきり言つてみてください』

四

この詰問はさすがに痛かつた。

咄嗟に何とも答へやうがなく默つてゐると、久米は激したやうに口を吃らせながら、

『私の怠慢を咎め立てする權利はあなたにない。詰責するのはむしろ僕の側です。……もう間もなく授粉をしなければならないといふいちばん大事な時期に、あなたは仕事を放ッたらかして東京のホテルに泊り込んで歸つて來ない。……何をしてゐるのかと思ふと、毎晩人知れず三宅伯爵夫人の邸のまはりをウロウロしてゐるといふ……。私はあなたの戀愛に差し出がましい口をきかうといふんぢやありません。そんな風で、仕事はどうなるんだと言つてゐるんです』

『……私はたしかに失禮なことを申しあげてゐる。口幅ッたいことをいつてゐることは僕もよく知つてゐますが、これであなたとお別れするつもりなんだから、最後にいひたいことだけはいはせてください』

あまり意外な出やうで、冬彦が呆氣にとられてゐるうちに、久米は言葉をつゞけ、

『我々のやつてゐることは二人の精神の緊密だけで支へて行くやうな性質の仕事なんですから、これからこのまゝあなたの助手になつて働くつもりなら、どんないひたいことがあつたつて氣拙いことな

んか口には出しません、默つて嚥み込んでゐます。しかし、もう罷めるんだからこんなことも自由にいへるといふわけです』

『久米君、君、それは……』

『まア、默つてゐてください。今度は私が喋言る番なんです。……私は今、二人の精神的緊密といひましたが、實際のところ、これは亡なられた父上と、あなたと、私の三人の精神の釣合でやつてゐる仕事です。……ところで、その中からあなたが拔けたらその後はどうなるといふんです。……手が一人足りなくなつたなどといふ單純なことぢやなくて、完全に仕事の目標と推進力を失ふことになるんです。……ねえ、冬彦さん、なるほど調節瓣は開けッ放しになつてゐたし濕床も乾いてゐる、薇光幕も引き忘れてゐました。……七年もこの仕事に沒頭してきた私が、一體こんな粗忽をするなどあるものでせうか？　私自身絕對に考へられない！……ところがどうです、現實としてかういふひどい結果になつてゐる。……どうしてこんなことになるのです？……あなたは私を怠慢だと仰言つた。しかし、怠慢だけでこんなことになるものでせうか？　そんなことは絕對にない。絕對に、絕對に絕對に！……私は哲學者ぢやないから哲學の方法で物はいへません。そんなしち面倒なものを持ち廻らなくても、私はたつたひと言でいへる。要するにこの仕事を支へて行く精神が失はれたためです。あなたの戀愛が始まつて以來、仕事に對する私の氣力が少しづつ減つてきた。あなたの戀愛の熱度の高まるのに比例して仕事に對する私の精神は低落してくる。不思議な現象ですね。……私は一年の間辛抱してあな

たの戀愛を傍觀してゐました。この不思議な精神的消耗とどんなに鬪つたか知れません。ところで、たうとう最後の日が來たやうです。支へるにも支へないにも、對照になる精神がまるつきりなくなつてしまつた。率直にいひますから聞きにくくとも我慢してください。一口にいへば、あなたと一緒に仕事をする氣がなくなつたんです。久米圭二は戸山冬彦を見限つた。あなたは父上の仕事の繼承者ぢやない。從つて久米圭二はあなたの仕事を助ける必要はなくなつたわけです。異論があるなら充分伺ひますが、僕にいはせれば、仕事と戀愛を一緒にやらうとするやうな狀態は相當ナンセンスだと思ふんです。反駁があるならまづこの點からやつてみてください。僕は、むしろ伺ひたくさへ思つてゐるんです』

五

自分が父の仕事の繼承者ではないといふ久米の無禮な獨斷は、冬彦をカッとさせるだけの力があつた。

冬彦は頭の中に殺到してくる言葉の選擇に惱みながら、

『おい、久米君、無禮なことを言ふと赦さないぞ。どういふ理由からそんな生意氣な斷定を下す？君に僕のことが何がわかつてゐるといふんだ』

久米は、仕事の話をする時のいつものねばつこい口調になつて、